

# すまいるん

季刊  
1998  
秋

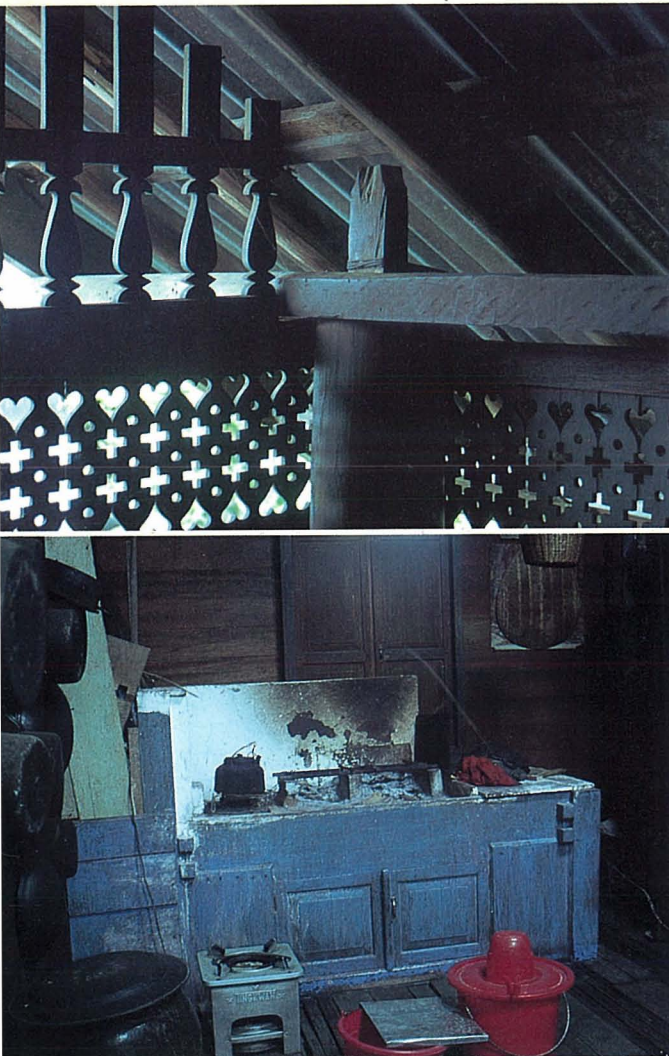
号 (通巻第48号) 一九九八年十月一日発行 ©

## 特集 II フォリナーズによる住宅設計 異文化との葛藤

### 目次

- 〈風紋〉層構造の住居 インドネシア 藤井明…………… 2
- 〈焦点〉異文化との葛藤 フォリナーズによる住宅設計…………… 4
- 異文化との出会いと葛藤 A・レーモンドの残したもの  
三沢浩 (建築家) + 内田青蔵 (文化女子大 助教授) 司会 片山和俊 (東京芸大 助教授)…………… 6
- 今、異文化の中で設計を進める トム・ヘネガン…………… 27
- 幕張ベイタウンの設計から 曾根幸一…………… 32
- 異文化人とのコラボレーション 牛田英作…………… 36
- 〈すまいるのテクノロジー〉海外建築家との協働 三沢亮一…………… 40
- 〈私のすまいるん〉異文化同士、異文化に暮らす 松田直則…………… 44
- 第18回住総研《未来へのハウジング計画論》地にとのようなシンポジウム 図を描くか…………… 48
- 講演 小林重敏・佐藤滋・服部孝生  
早川邦彦・鈴木崇英・間野博・大村芙美雄
- 〈図書室だより〉建築環境と地球環境 宿谷昌則…………… 68
- 〈すまいる再発見〉エリエル・サリーネハウス 岸健太 & トーマス・コン…………… 74
- ひろば…………… 70 次号予告・お知らせ…………… 72 編集後記…………… 76

スマトラ島最北端に住むアチエ族の高床住居。三列に分割された平面は、前「男」後「女」の空間とされ、切妻屋根の妻側は丹念な透かし彫りを施して、室内に光と風を取り込んでいる。〔風紋〕より。





# 風紋





# 層構造の住居

—インドネシア・アチェ族の高床住居

写真と文 藤井 明

インドネシア・スマトラ島の最北端の都市バンガ・アチェの周辺にアチェ族は住んでいる。アチェ族はイスラム教の東進を最も早く受け入れ、一四世紀以来、敬虔なイスラム教徒となっている。アチェ王国は一六世紀以降、胡椒貿易で隆盛したが、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのオランダとのアチェ戦争でその名を馳せた。インドネシア独立後も分離独立を求め、現在は特別州になっている。

アチェ族の住居は高床形式で、床面が二・五mあまりと非常に高い。床下はピロティになり作業場や休憩場になっている。道に沿って親族の住居が並び、ピロティを介して床下に連続する交流の場が形成されている。住居の周囲は、パイヤやバナなどの果樹で囲まれ、道路側に前庭が、裏手に菜園がある。

切妻の棟は必ず東西方向を向く。住居は平入りで前庭に設けられた階段から昇る。主屋の内部の平面は縦方向に三層に分割されている。前部と後部の細長い空間は一室で間仕切りがない。これに対し、床面が一段高くなっている中央部は隔壁をもち、いくつかの部屋に分かれている。道路に面する前部は男性の空間で、昼間は居間兼客間になる。これに対し後部は女性の空間で、家事室になっている。いずれも夜には自身の男女や子供の寝室になる。後部の奥に下屋があり、厨房になっている。下屋の床は主屋に比して低く、勝手口に小さな階段がある。

板壁のいたる所に幾何学模様彫りが施されているが、とりわけ妻側の破風には丹念な透かし彫りが施され、光と風を室内に取り込んでいる。床は竹か板の簀の子で敷かれている。そのため通風が極めてよく、年間降雨量が四〇〇〇mmに達する多雨な気候にあつて、快適な住空間をつくっている。屋根材はサゴ椰子の葉である。

東南アジアの高床住居は屋根裏、床上、床下と垂直方向に三層に区分され、それぞれが天上界、人間界、地下界に対応しているものが多いが、アチェの住居はそれを更に前後方向に三分割し、男性と女性の空間として表象している。

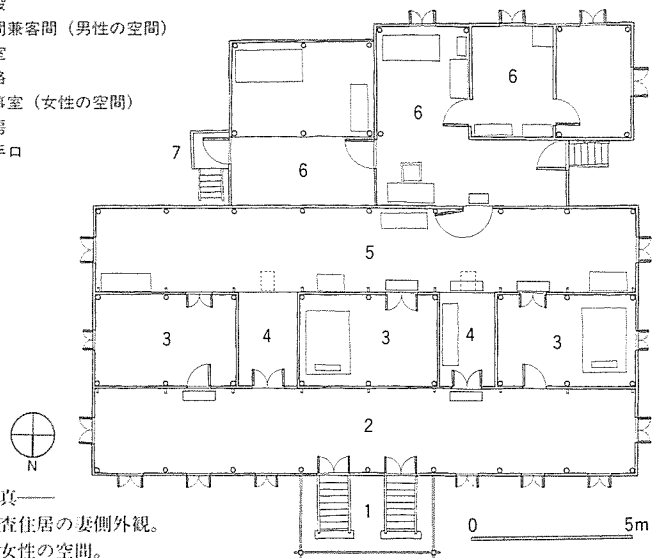
この調査建物は階段を二つ、寝室を三つ持つ典型的なアチェ族の住居で、一八八五年に建設されている。

(ふじい・あきら／東京大学生産技術研究所教授)



高床の住居の床下を見る。

- 1 階段
- 2 居間兼客間 (男性の空間)
- 3 寝室
- 4 通路
- 5 家事室 (女性の空間)
- 6 厨房
- 7 勝手口



右頁写真—  
上／調査住居の妻側外観。  
右下／女性の空間。  
左下／男性の空間。

調査住居平面図

# 異文化との葛藤・フオリナーズによる住宅設計

—アントニン・レーモンドの時代と現代

最近、A・レーモンドの住宅を二軒続けて見る機会があった。

一軒は名作といわれたカニングハム邸（一九五二年）、東京青山の一角に昔のまま残っていた。カニングハム女史もお元気で、殆ど出来た当時のまま住んでおられた。音楽も出来るようにという女史の要望を受けて生まれたこの家は、居間の上部が吹き抜けてそのまま二階を包み込む断面構成に特徴がある。オープンな階段に腰掛けたり、二階からも演奏を聞くことができる居間には、厚い鉄板の暖炉が置かれ、その脇をお馴染みの木造のシザーズトラスが伸び上がって天井を支えている。

もう一軒は高崎の井上房一郎邸（一九五三年）。この家は、正確にはA・レーモンドの設計とは言えないかも知れない。寸分違わずA・レーモンドの自邸を模し、左右対象にひっくり返して建てた「写し」である。麻布にあった自邸がない今となっては、「写し」がその魅力を伝えてくれているのだから、歴史とはわからないものだ。やはりシザーズトラスが斜めに天井を支え、南側の開口部に嵌められた障子から柔らかな光が射し込む室内には、当時の木製家具がそのまま置かれていた。

この二軒の住宅が建てられてから既に四〇年以上も経つ。その間に日本は急激な経済成長を経験し、量的にはある程度水準に達した住環境になってきている。暖冷房がいきとどいた住宅も多く、住宅に対する関心が高気密高断熱であったり、室内環境汚染の問題であったりする。しかし、二軒の住宅を見て、住宅の設計—空間的な構成を改めて考えさせられたというのが率直な感想である。そこには、丸太の木造とラワンベニアの壁と天井、障子があつただけなのだが、一日の変化を感じ、ゆったりとくつろげる空間があつた。

私たちはさまざまな意図やテーマを追いかけて住宅を設計してきているが、ある環境に心地よさとか居心地のよい空間を素材と構法を用いて創出できるかにかかっているという原点を、もう一度思い出してみる必要があるだろう。

● ところで、日本近代住宅の歴史を振り返ってみると、A・レーモンドの評価は曖昧なまま残されている。明治以降、米日して活躍した外国人建築家の中でもである。東京帝国大学で教え、三菱関係の仕事を中心に資本家の邸宅を多く手がけたJ・コンドル（一八五二—一九二〇、イギリス人）や近江兄弟社や神戸女学院の設計で有名なV・ヴォーリス（一八八〇—一九六四、アメリカ人）はもちろん、日本にわずか三年しか滞在しないにもかかわらず、講演や著述、仙台や高崎において工芸指導を行ない、「日本美再発見」の評価を与えたB・タウト（一八八〇—一九三八、ドイツ人）と比較したら、A・レーモンドの評価は低い。F・L・ライトとは較べものにならない。極端にいえば、外国人建築家とみなされていないようにも思われるし、かといって日本人建築家と同じ枠内では考えられていない扱いをされている。A・レーモンドは損な役割を演じているといえそうだが、その一つに、A・レーモンドは何よりも実務派の建築家であり、言葉よりも図面、思想よりも空間で考えを示すタイプであったことが、不利な条件としてあげられるだろう。その上、初期の作風がなかなか一定せずわかりにくいということもある。帝国ホテルの後に日本に残ったからの作風は、ある時はライト風かと思うと、ある時はライトから逃れるようにモダンデザインに走り、またある時は彼の故郷チェコスロバキアの風土性色濃い木造に帰ったりしたからである。

● けれども、戦後まもなくアメリカから再来日して以後発表されたA・レー

モンドの一連の住宅作品は、日本の空間的特質を捉えた素晴らしいものである。日本の近代住宅史の系譜の中でも、戦前と戦後をつなぐ接点のような役割を果たしたものとも考えられる。明治以降の近代住宅史は『日本の近代住宅』（内田青蔵著、鹿島出版会刊一九九二年）に詳しいが、その中で、明治時代初期の和館と洋館の併置から始まった住宅が、さまざまな試みを経て和洋が捉えられていく様が描かれている。戦前は吉田五十八が和風を基調にしながら洋式の合理的な生活様式を吸収して終わる。そして戦後、住宅は再び第一歩からのスタートになる。A・レーモンドの一連の住宅は、当時の荒廃した日本の社会の中では、手が届かない物質的な豊かさをもち、時代のテーマとして追っていくと把えにくいのが、今から振り返ると、一つの確かな歩みがそれら作品に示されていたといえるだろう。戦後の建築設計とくに住宅設計の太い流れが、A・レーモンドの弟子たちやその作品に刺激を受けた建築家によってつくられているのだから。

いくつかの住宅の設計図をみてみよう。プランの上からは、ここには和としての要素は殆ど感じられない。とくに和室は殆どない。けれども組み上った住宅の内外の空間には和というものが強く感じられる。スケール感、簡素さや率直な表現、木造の軸組とあたたかさ、障子による光の構成などは、和そのものである。こうしてみると、A・レーモンドは、近代日本の住宅史の中で、洋を基本として和のもつ空間的特質を取り込み実作の中に示した最初の建築家とみなすことができる。和を基本として洋を取り込んだ戦前の吉田五十八、その逆のA・レーモンドと考えることもできるだろう。日本の空間的特質を評価したB・タウトも重要だが、A・レーモンドが創出した住まいの空間的な構成は、それにもまして貴重なものであることがわかってくる。そのうえ興味深いのは、一人の建築家が異文化としての日本に影響を与えただけではないということだ。逆に、異文化がこの建築家に影響を与えている。A・レーモンドの系譜を辿ると、日本という風土や環境、社会との対峙がレーモンドを育てたように見える。ここには、近代建築の思想と日

本的な空間的特質とチェコスロバキアの建築の伝統が、一つの空間の中で昇華されている様が見られる。

● 戦後はや半世紀を過ぎて、外国人が日本において建築を設計する機会が増えてきた。経済成長のおかげ、ジャパマンネーの力ということかも知れないが、センチュリー・タワーのN・フォスターや東京国際フォーラムのR・ウィニオリ、関西国際空港のR・ピアノをはじめ、集合住宅でもネクサスワールド香椎や幕張ベイタウンなど、外国人建築家の仕事が多く見られる。こういう事態は、むしろよくやくという感じがしないでもない。そしてA・レーモンド以来のその長い空白の間に、社会は大きく変化し、科学技術の発達が急速に時間と空間を圧殺し始めている。長く一つの風土に滞在し、文化を深く肌で感じるような生活と創造活動はむしろにくい時代になりつつある。A・レーモンドを滞在型と呼べば、通い型による異文化での仕事の時代を迎えている。そして風土性や異文化との対応は殆どみられない。むしろつくり手としての建築家の個性の方が重要であるようにも見える。いや逆に考えれば、わざわざ気にかけていたり、影響を与えたりするような文化的な個性が既に存在しない風土になっているのかも知れない。そして一方では、エネルギー、人口、環境破壊や環境共生といった問題、他方ではインターネットなど情報通信の発達は、国や地方という従来の枠組みでは対処できるようなものではなくなりつつある。フォリナーズではいられない状況も迫ってきているのだ。

● この特集では、A・レーモンドが果たした異文化における仕事を振り返りながら、時代を現代にスライドさせて、それでも今、異文化の中でその環境や文化に関心を抱き、住まいや建築を設計する場合の外国人建築家が抱く印象、ジレンマ、問題点を明らかにしてみたい。単純にA・レーモンド五〇年後として見てもよいだろう。記事は日本での設計の話が中心となっているがこの事情は、裏返せば日本人が海外に住み、仕事をしていく場合を類推する一端になるのではないかと考えた結果でもある。

（片山和俊／東京芸術大学美術学部建築科助教授・建築家）

八八年の生涯のうちの四四年間を日本で過ごし、日本の文化・風土を愛し、理解し、日本の建築の原理を学びとりながら、この地での新しい住まいの形を模索しつづけた、アントニン・レーモンド（一八八八―一九七六）。

# 異文化との出会いと葛藤 ― アントニン・レーモンド の残したもの

三沢 浩

みさわ・ひろし  
建築家・三沢建築研究所

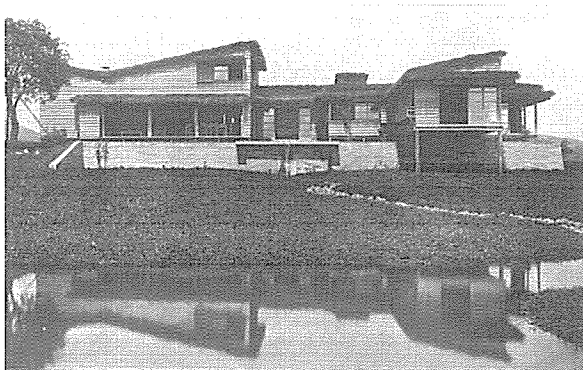
内田 青蔵

うちだ・せいぞう  
文化女子大学生活造形学科教授

司会 Ⅱ

片山 和俊

かたやま・かずとし  
建築家・東京芸術大学建築科助教授



軽井沢の「夏の家」の外観(1933年)

A・レーモンドは四十数年間日本で仕事をした。われわれもそうだが、海外へ行くと、その国の人より一生懸命その国を理解しようとするので、いろいろなことがよく見えてくるということがある。レーモンドは、日本という異文化のなかで、日本の伝統文化や技術と対峙し、吸収し、発展させた建築家と見える。けれど今、その存在が案外忘れられている。

一方、現在、外国人建築家、その卵の方々、留学生と会う機会がたくさんある。また、外国人建築家によっていろいろな作品が日本になかにつくられていることもあり、異文化で仕事をするということが、昔のように特別なことではなく、日常化してきている。いま異文化で仕事をしている建築家の状況とレーモンドとを対比して考えられないかと考え、この特集になった次第である。

レーモンドは日本に滞在して、暮らしながら建築の創作活動をしたが、交通機関が便利になった今では、通い型で仕事をする場合も多く、これから風土とか地域性などはどうなっていくのだろうか、ということがその背景に感じている問題でもある。

レーモンド自身が長く忘れられており、まず、レーモンド事務所の仕事をした三沢浩さんにレーモンドの住宅を中心に勉強会をやっていたら、レーモンドの認識をレベルアップしてから、日本の住宅の近代化の過程に詳しい内田青蔵さんのお話、ディスカッションに進みたい。  
(片山和俊)

# レーモンドの住宅の系譜

## 日本建築の原理と

## 近代建築の融合を目指す

三沢 浩

レーモンドとモダニズム



私が訳したレーモンドの自伝の出版（一九七〇年）から二八年、そしてレーモンドが七六年に亡くなってからすでに二二年が経っています。

レーモンドが日本に来たのは、一九一九年の大晦日、関東大震災（一九二三年）の四年前。コンドルがまだ元気で、新しい近代建築の香りがヨーロッパから流れてくる前のことです。F・L・ライトの助手として帝国ホテルの現場で一年間働き、その後一七年間、一九三七年まで日本で仕事を続けました。

レーモンドは、ヨーロッパでは失われた過去の事物が日本で続々発見できたとし、それが西洋と同じようになくなっていく流動期にあると考えたようです。これがレーモンドを日本に定着させる第一の要素になりました。

と同時に、モースや、『菊と刀』のヴェネディクトなど、向こうからきた人たち誰もが感じることに——日本人は自然と人生を融和させていて、地震や台風を恐れない。また、西洋の家が閉鎖的で、自然に対してきわめて攻撃的であるのに比べて、日本は、どちらかというと和やかに融和していく。しかも、四季の違いがあり、自然の和やかさがある——この大きな違いがレーモンドを捉えたいらしい。レーモンドも、大正時代の日本人のなかに「謙譲の美德」を発見しています。そして、夢中になって日本の良さを建築の原理として考えました。この時代、ヨーロッパでは、ヴェルクブント、ロシア構成主義、そしてデ・ステイル、レスプリ・ヌーヴォーといった具合に、新しい近代主義の発祥がありました。

一九一〇年のライトのポートフォリオ（六〇センチ角ぐらゐの大型版で建築とデザインが一〇〇枚ぐらゐ入っているもの、ベルリンで出版）はヨーロッパにショックを与えました。そしてオランダ派の人たちがアメリカを見に行ったりしたその結果が、デ・ステイルとなったのです。そのデ・ステイルがグロピウスあたりに影響を与え、バウハウスのモダニズムになっていきます。つまり、二〇年代に近代主義が二つに分かれたと考えてもいいと思います。ライトから根を発して、次第にル・コルビュジェのピューリズムを加え、成長していくわけです。

レーモンドは、関東大震災で自分が借りていた家をなくし、一九二四年、自邸を霊南坂（現在の虎の門のアメリカ大使館の裏）に建てました。それは内外ともコンクリート打放しで、まさにデ・ステイル型のモダニズムでした。モンドリアンは別ですが、デ・ステイルは、ファン・ドースブルフ、J・P・アウトなど、属していた建築家が皆ライトの洗礼を受けていたことで、ライトから抜け出そうと、モダニズムのタイプに入っていたのです。そしてレーモンドの最初の作品が脱ライトの「霊南坂の家」。これは現存していませんが、藤森照信さんは、あとになって気がつく、世界でも相当先端の仕事だったのではないかと、岩波新書『近代建築』のなかで最高の賛辞を示しています。

しかし、レーモンドは一方で、日本建築がどうして近代建築と合一するかということに非常に関心がありました。「単純で、機能的にシンプルで、内外の空間が貫入して……」というモダニズムの原理を日本建築のなかに発見したのはライトです。一九世紀の終わりごろ、シカゴ博覧会に出品された鳳凰殿にライトが発見したことがそれでした。鳳凰殿といっても、宇治の平等院とはちょっと違って、正面に書院造りがあり、左右に離れがある、屋根が載っていて柱だけで、中はすつからかんで何も無い畳の部屋。外は縁側で、回廊で離れにつながっていくというものです。

これがライトに相当影響を与えました。これによってライトのプレイリー住宅ができていく。ライトの建築が以前の、いわゆるアメリカ型の古いタイ

プから、「ロビー邸」のような広がりのあるものになっていく根底には、その鳳凰殿があります。柱だけを残して縁側が外の自然につながっている。左右にどこまでも伸びていってしまう縁側が続いて、南に広がっている。離れに至るまで全部見渡せる。これがもしかすると、いわゆる近代建築といっているもの、そしてコルビュジエまでがビュリズムとしてきた元ではないか。そうだとすると、ライトがモダニズムの最初を日本の建築に発見し、それを自分で定着させ（日本にきて帝国ホテルはそういうぐあいにはつくらなかったが）、すっかりオランダに影響を与えていたことになる。

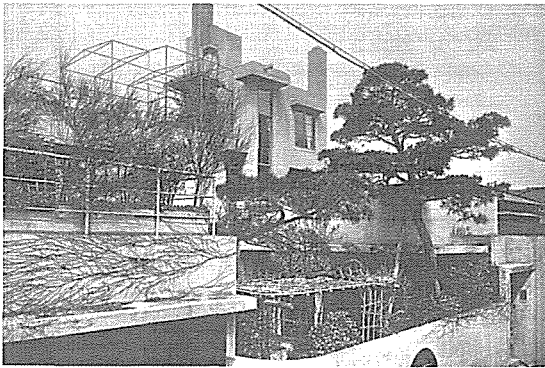
それほどの影響があるわけだから、ライトのレーモンドに与えた影響も大きかった。彼はライトの影響から抜け出すのに、オランダのデ・ステイルの方法を使って、一挙に抜け出しました。その次に、コルビュジエのモダニズム、またはビュリズムを少し真似る。ペレーの打放しのコンクリートの、素材が主張する方法を取り入れます。

## A・レーモンドの住宅―戦前 日本の近代住宅に到達するまで

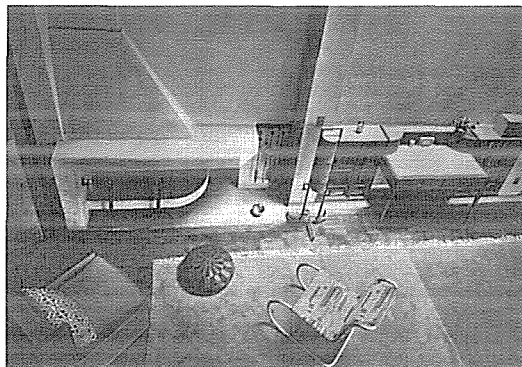
時代を追ってレーモンドの作品を見ていきます。

一九二〇年に計画が始まり、三三年に完成した「東京女子大学」。非常に施主に忠実なレーモンドらしく、ライト風を残しています(写真―1)。一三年間、彼はライトの影響を引きずっていたことになりました。

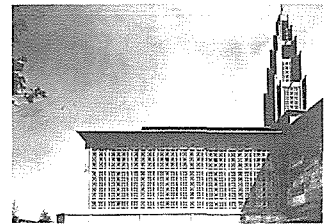
最初につくったのが寄宿舎二棟。これはコンクリート打放しで、構造が窓の方立になっている。現在でも一棟は口の字型で完全に残っていて、この基礎に一九二一年とありびっくりするのですが、最初にコンクリートを使い始めた。そのなかに、まったくライトのプレイリー住宅の方法で、日本風に瓦を載せている教師館の住宅三棟が大変きれいに残っています。さらに当時の学長「安井邸」が残っていて、関東大震災の年につくられているにもかかわらず、これはもうライトの感じがありません。後の駐日大使の「ライシャワ



写真―4 霊南坂の家(1923~24年)  
デ・ステイルの手法で脱ライトを果たした最初の自邸。



写真―5 霊南坂の家の内部(居間)  
暖炉の前にパイプチェアがあることに注意。



写真―1 東京女子大学の礼拝堂  
及び講堂(1934~37年)



写真―2 ライシャワー博士邸  
(1925~27年)



写真―3 リード博士邸(1924年)  
ライトの影響を色濃く残している。



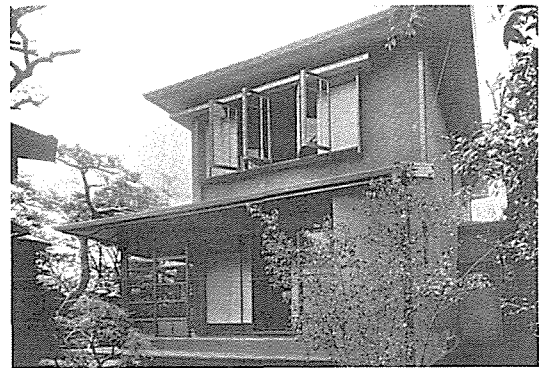
「博士邸」も残っています。お父さんが博士で、当時東京女子大の理事だったのです。ライシャワーはここで育ち、日本の旧制高校に行ったわけですが、この家は安井邸の五年後でありながら、少しライトがかかった調子に戻っています（写真―2）。

「靈南坂の自邸」は内外がコンクリート開放して、中庭がある住宅。屋上はすべて植物で覆うというやり方です。それぞれの空間が一つずつ囲われていて、それに庇が付き、庇の雨は日本流に棕櫚で落とす方法をとっています（写真―4）。

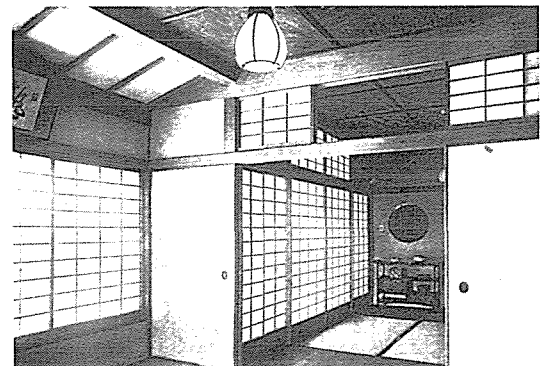
内部はいっさい塗らず開放して、ただしはつってありました。梁は露出していてなぐり仕上げ、居間にはなんとなくキュービズムの暖炉があり、驚くべきことは、一九二四年に完成したこの家に、プロイヤーより先にパイプ椅子があることです（写真―5）。プランをみると、入口は小さく、居間がずつと続いて、食堂、階段を上がって上に寝室があります。この寝室が幾つかの空間体をつくっていて、早くいえば、縦に貫く階段以外は、キューブを積み重ねたかっこうで、どういうわけか少しずつズレがある。このズレがデ・ステイルのコンポジションのやり方で、デ・ステイルのコンポジションというのは、モンドリアンも含めて、そういう発明と発見と主張をしていたわけです。これらのものがライトからきたというのは大変不思議ですが、ライトのコンポジションが見える平面がずいぶん流用されて、デ・ステイルの人たちのプランになっています。ライトのプランは、壁を外して柱だけにした開放的なプランですから、そういうキューブの積み重ねに変容することがわかると思います。

当時はライジングサンといった、シェル石油の一〇人の速記者のためのアパートが、フェリス女学院一〇号館としていまも残っています。リビングが一階で二階に寝室がある、これもモダンな、早くいえば、空間を重ねたようなデ・ステイル型の建物です。非常に不思議な間取りで、一つずつのベッドルームが独立しています。

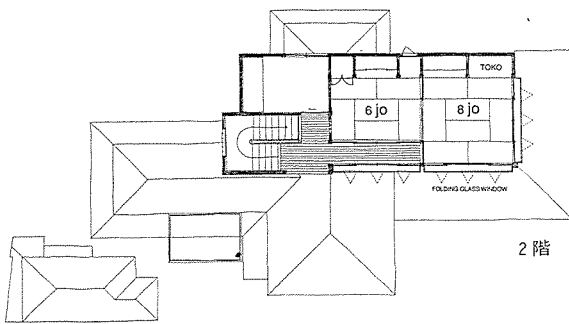
おもしろいことに、一九二六―二七年ころ、どうしても日本の家がつくり



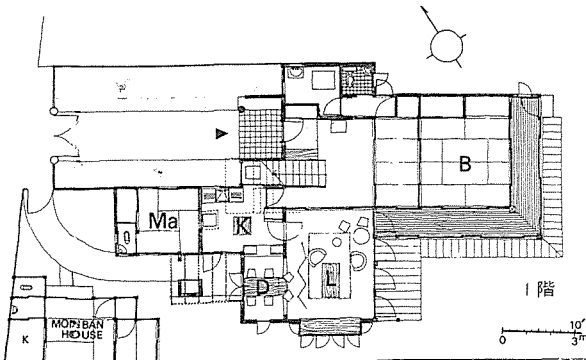
写真―6 浜尾子爵夫人別邸外観(1926～27年)  
この住宅で、日本の住宅のつくりを初めて取り入れた。



写真―7 浜尾子爵夫人別邸の2階和室  
初めて障子を取り込んだが、使い方はまだこなれていない。



2階



1階

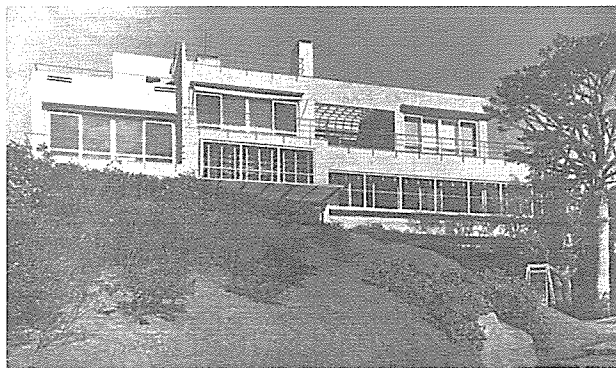
図―1 浜尾子爵夫人別邸の平面図

たくて、「浜尾子爵夫人別邸」をつくりました。角に八寸角の大きな通し柱を下までおろします。そして入り側をつけて、さらにその外に濡れ縁をつけています。二階の和室が寝室で、障子をつけています。レーモンドは「初めて日本の住宅をつくった」と書いていました(写真―6、図―1)。

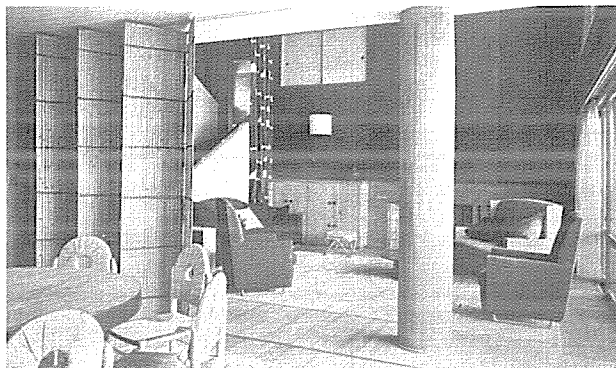
このなかに、初めて暖炉のない洋室をつくっています。レーモンドのキーワードとしては、「洋風の住まいには暖炉があること」があります。実はこれも、ライトが一九〇〇年の初めに、「これから暖炉を回復しなければいけない。暖炉が中心にあつてはじめて人間の家ができる」と『レディス・ホーム・ジャーナル』に書いていることに発しています。レーモンドは、和室に暖炉があるのはおかしいというので、二階の和室は完全に日本風。といっても、大壁があつたり丸太の柱があつたり、和洋の混在する不思議な家です(写真―7)。それまでは耐震的なものは壁構造を考えましたが、和室は入り側で囲む柔構造であることを発見しました。通し柱を一本通す構法で、これは五重塔の芯を考えてみればわかることです。

その一方、三二年、彼は「赤星邸」で実験をやりました。コンクリートを使って、約三センチのモルタルを塗り、その上に白のペンキを塗ってあります。コルビュジエだったらピロティにするのですが、ピロティはなく、中に柱を抜かしてしまっています。レーモンドは日本の家だから、ここから庭に降りるということを意識していたようです。庭園を使う。そして横長の窓。ところが隅を開いて大森海岸のほうをみるというやり方は、コルビュジエもやらなかった方法だと思います。ここでは木製の建具を柱にぶつけない「芯外し」の方法を用い、全部開けば、開放できます。

その四年後、三七年に熱海に「福井別邸」をつくりました。熱海の丘の上にあつて、とうとうコンクリートの家に全面的に大きな木製のサッシュを引きました。どうしようになりました。しかも中は折りたたみ式の間仕切りで、ダイニング、居間を日本風にしながら、境のない広い空間、自由な空間をつくりました(写真―9、10)。コンクリートにずいぶん苦労して木製の上枠、下枠を納め、金物をつけて風止めをしてすきま風を防ぎ、スチールサッシュより木



写真―9 福井菊三郎別邸外観(1934~36年)  
コンクリートに全面木製サッシュを実現。



写真―10 福井菊三郎別邸の内部(居間)  
内部は折りたたみ式の間仕切りで自由な空間をつくる。



写真―8 赤星邸(1932年)  
連窓の隅を開いて海の眺望を楽しめるようにしている。

製の効果を上げた。日本的に開放する家をつくったのだなと感じています。

三三年に初めて自分の別荘「夏の家」をもちました。形はバタフライを使った大変バタ臭いものですが、全面的に南に開放して、内側で芯外しをしたクリの木の柱を使っています。しかも、これに飽き足らず籬をおろし、屋根に周辺にあるカラマツの枯枝を載せる。こういった日本風でバタ臭い家になっているわけです(写真—11)。二階に仕事部屋をつくって、別棟に所員を泊まらせて夏のスタジオにしてみました。池を前にしてプールもあって、そこから水が流れていくようにつくっていますが、入口と本体が一メートル半ほど高さが違うので、ピロティにして……という平面をつくりました(図—2)。

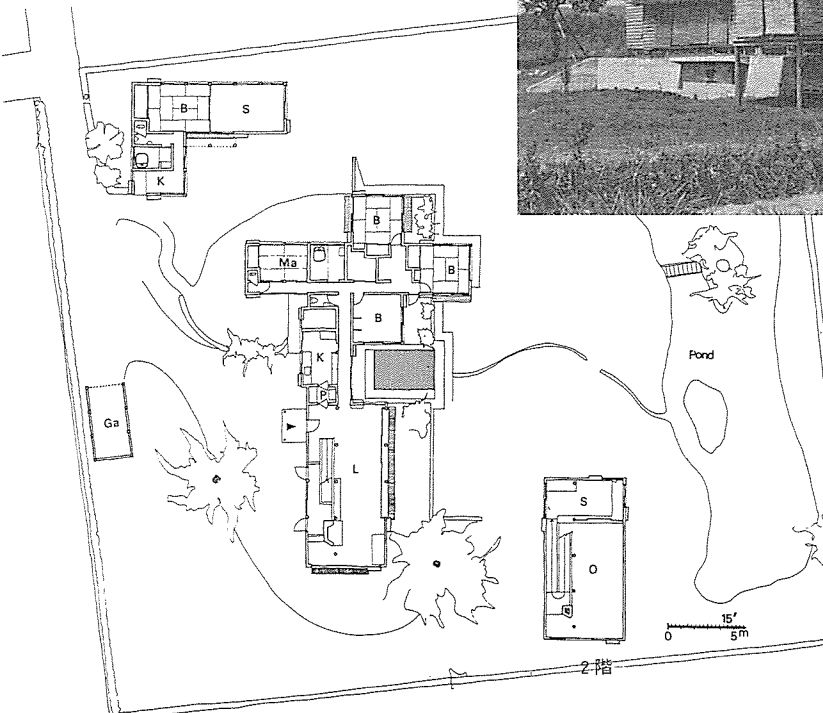
実は、この建物はコルビュジエのチリの山荘計画——チリの海岸に建つエラズリス邸からそっくりもってきたバタフライだったのです。これを真似たことよって、両者でいろいろあったのですが、コルビュジエは全八巻の作品集の中にレーモンドのこの家の写真を入れて、なじるのではなくて、「これは私の案を使って成功したい例である」と書いています。そしてそれはお世辞でもなんでもない、あとからきた手紙で述べています。

コルビュジエのプランは、大きな居間があって、小寝室があり、二階にスロープで上がっていく方法も同じ。しかも、もっと大事なことがあり、コルビュジエはこのエラズリス邸によって、それまでのサヴォイ邸などのような四角い家から離れて、初めて地域の技術と地域の材料、そして景観を取り入れることに専念したのです。つまり、近代建築のピューリズムは一九三〇年代に死んで、コルビュジエはこのエラズリス邸から変わっていった、次は石の壁、ヴォールトの屋根、上に土を載せるという荒っぽいことをやります、そのきつかけをレーモンドに先取りされてしまったのです。

コルビュジエはまさかその案が使われるとは思わなかったんですね。レーモンドがその案を盗んで、しかも、コルビュジエが大事に考えていた景観の取り入れ、その土地の材料、土地の技術(大工)を取り入れて先につくってしまったから、一本やられたという意味の手紙だったのですが、なかなかしぶとくて、やられたとは書いてありません。

写真—11 軽井沢の「夏の家」 簾を下した外観

土地の材料、土地の技術を取り入れてつくった。現在、ペイネ美術館として残っている。(1933年)



図—2 「夏の家」の平面図

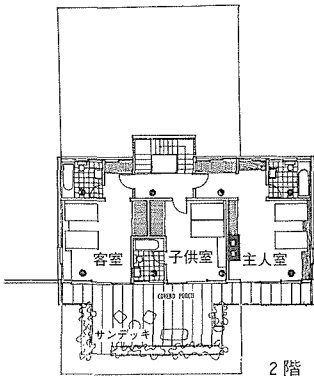


さて、その後レーモンドは再び近代建築に挑戦して、黒い横板張り・南京下見（南京というからには、外国なのですが）を使って芯外しで丸太の柱を使うようになります。つまり、柱のある通り芯から障子、ガラス戸、網戸を外していく方法です。したがって、その分だけ支えなければならぬ。上は金物で止める。これはレーモンド事務所がいまも住宅でやっている方法だと思います。和風の内側をつくり、外は横板張り、平らな屋根に近いもので、洋風にしていく。しかもそのプランは、あれほど伸び伸びしていたいいプランが、いつの間にか非常にコンパクトになり、中はほとんど間仕切り壁がなく、折りたたみ戸で仕切る。二階も子どもの部屋は襖で仕切られている状態です。

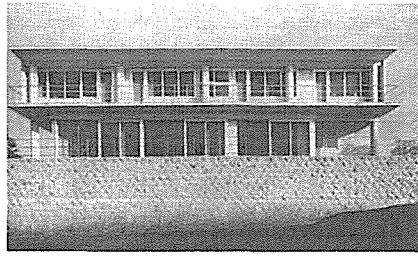
ほかの人たちが白い直角の家をつくって「モダニズム」としたのに対して、レーモンドは、ステインかペンキを塗って、すっかり開放できる黒い横板張りの木造日本住宅をつくっていた。これが彼が到達した日本の近代建築でした。三七年という、盧溝橋事件が起こって、日本が中国侵略を始めた年です。この年、日本を去ることになります。

## A・レーモンドの住宅―戦後 レーモンドスタイルの完成

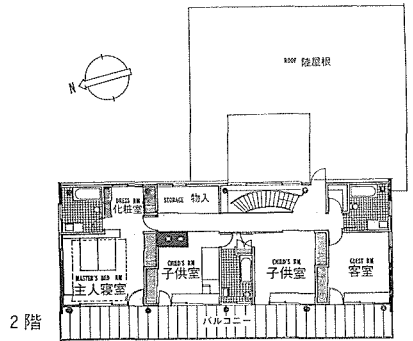
戦後、再び日本にやってきたのは、戦争が終わって三年目の四八年。四九年には「スタンダード石油社宅」がつくり始められていて、横浜の山手、フエリス女学院の隣りに一軒ポツンとできました。いまでも残っています。外観はまったくの洋風です。二階にコンクリート打放しの柱が外に見え、下の柱は内側に入っていて見えません。とにかく眺めのいいところで、元町一帯、関内まで眺められます。（写真―12）。中は、これこそ大きな芯外しといえる内容で、仕切りは襖を使っています。均等スパンでもっていくから、女中部屋には柱が出るという強引なプランです。以後、こういうことはやっていません（図―3）。



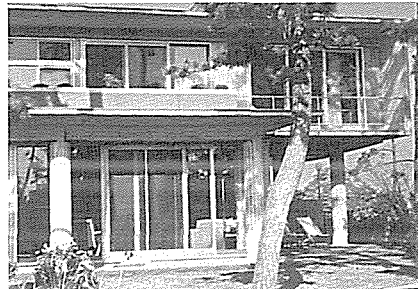
2階



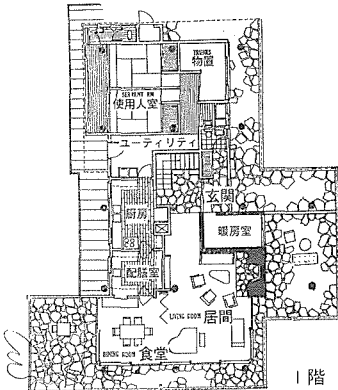
写真―12 横浜・山手のスタンダード石油社宅  
(1949~50年)



2階

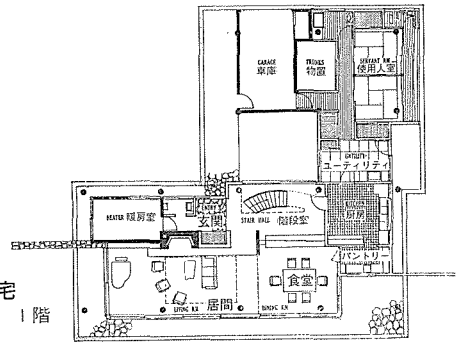


写真―13 横浜・本牧のスタンダード石油社宅  
(1949~50年)



1階

図―4 横浜・本牧のスタンダード石油社宅の平面図



1階

図―3 横浜・山手のスタンダード石油社宅の平面図

横浜本牧の八聖殿の脇にも「スタンダード石油社宅」をつくりました。これは打放しコンクリート、木製サッシ(写真13)。これも現在かろうじて残っています。戦前は横板張りでしたが、戦後は縦板張りに変えました。縦板張りにするということは和風にみえるもとだということを発見しました。この平面から、アメリカの文化が入ってきたと、当時われわれは歓迎したのですが、LDKになっていて、居間とキッチンがつながる。外側はコンクリートであるが、日本風で、開放されているのを感じます。確かに、このやり方で行くと、庭先はつながります(図4)。入口が不思議なところについています。レーモンドのプランは入口がわかりにくいことで有名で、吉村順三さんの住宅もその点で似ています。入口は小さく、南は広くというのは、実はライトがやっている手法と同じです。

さて、戦後の最初の木造の「自邸」です。麻布西の筈町に長さ一三間で二棟、レーモンド事務所と並んで自分の家をつくりました(写真14、15)。この家は、玄関を入れて、昔の屋敷の基礎を使った池なんかがあったりして、この丹波石の廊下を渡って居間に入っていく。間にパーゴラのあるパティオを挟んで、居間と寝室があります。居間はやっぱり芯外し、木製の足場丸太で組んだ小屋組みです。南側の戸を開けていきなり外に出ていくような仕掛けです。居間の一部を執務室として、レーモンドは手紙を書いたりしていたわけで、これとそっくりなものが代々木に移った現在のレーモンド事務所の五階にメモリアルとして残されています。

真ん中にファイアープレースを二重の鉄板でつくりましたが、木造の家では非常に火災の危険があり、できるだけ壁から離して空間の中央に置きました。大事に至らなくて済んだのですが、レーモンドのこの暖炉も一度ならず火を出しています(図5)。この住宅は、そっくり左右逆にして高崎の旧井上房一郎邸になって残っています。事務所は、北側にトップライトをとり、これに足場丸太でシザーズ・トラス(鉄状トラス)の構造をつくって、全部みせていました。

これと同じようなやり方で住宅を何軒かつくりました。「プロワー邸」はじ

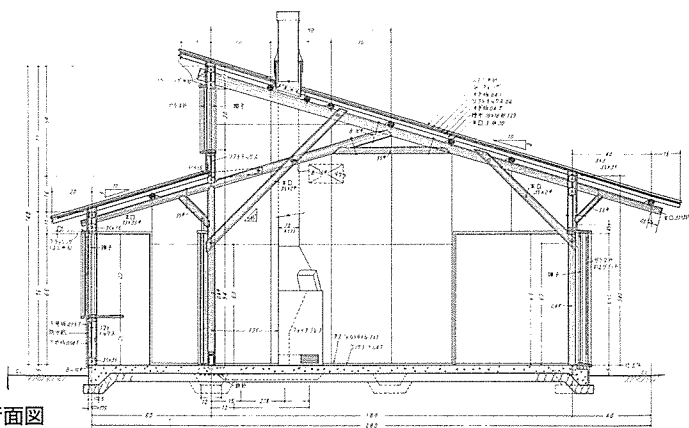


図5 麻布筈町の「自邸」の断面図  
足場丸太を組んだシザーズ・トラスによる構造。

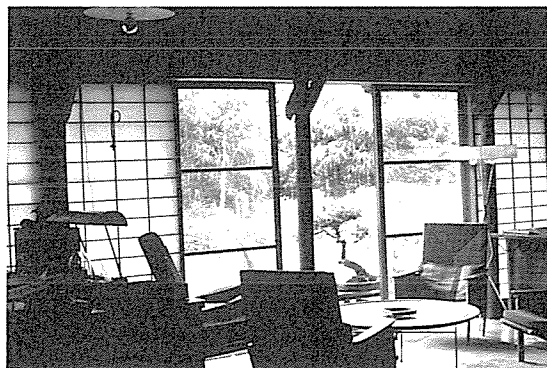


写真15 麻布筈町の「自邸」の内部(居間)  
架構の現しなど、レーモンドスタイルと呼ばれる作品のさきがけとなった。



写真14 麻布筈町の「自邸」の南側外観(1950~51年)  
パーゴラのあるテラスを挟んで手前に寝室、向こうに居間。

め、縦板張り、和風仕込みの、いわゆる「レーモンド・スタイル」と呼ばれるもので、芯外しとシザーズ・トラスと襖、これを繰り返しています。

戦後のメルクマール「リーダーズ・ダイジェスト東京支社」は一三年の短い生命でした。あまり話題にならなくて、二〇年間ぐらいで消えてしまったのですが、現在の米国大使館アパートのところにあった「ペリーハウス」と「ハリスハウス」。これは完全な壁構造で、六階建てですが、三本のコアが北側で大きく支えて、南側は完全に開放された面になっていた。とても日本の常識ではできなかったものをつくっています。

いまも狸穴に残っている「アルバン教会」。この構造はシザーズ・トラスですが、戦前の軽井沢の「セント・ポール教会」ではこういう組み構造ができず、一点で交じわらせて、鉄の平板で締めたものを、今度はホルトでとめて、半割りの非常に軽いヒノキの丸太を使って、鉄状の構造をつくったわけです。これが大スパンになっているいちばん大切なところです。次の札幌の「セント・マイケル教会」では、積雪荷重に対して、やや太いエゾマツを使って同じ構造でやることになって、結局、軽井沢のセント・ポール教会でやった構造が戦後の教会に入り、木造の住宅にも入っていったわけです。

住宅を中心に、大切なことはだいたい述べたと思いますが、あとで補足させていただきます。

## コンドルの時代と レーモンドの時代

### —— 和の理解と住宅設計

内田 青蔵



レーモンドに関して、SD選書『私と日本建築』はなんとか手に入りますが、レーモンドの自伝は、古本屋で探してもなかなかないし、あっても高く手に入りません。私が勉強したころも、レーモンドは基本的には忘れかけ

られていた、そういう建築家でした。

### 日本の近代住宅の発生——和洋館並列から和洋混在住宅へ

私の著作『日本の近代住宅』は、明治から戦前までの住宅の近代化していく変化の過程を追ったものです。日本の近代建築の原風景として、「洋館」を考え、明治以降の出発点である「和洋館並列型住宅」——和と洋が対立した形で建てられたものが、こういう対極された姿がお互いに葛藤し合いながらいかに一つの住宅としてまとめられてきたのか、というプロセスを追うことに興味がありました。

ごく簡単に私の考えの概要をお話しすれば(図—6、7)、「和洋館並列型」という和と洋を並列したタイプが上流層にあり、それがいろいろなかたちで変化をして、戦前期に、「和室・洋室混在型住宅」という一つの完成された姿に行きついたと考えています。外観は伝統的なものではなく、洋風の姿をしているけれど、内部は、部屋の機能に応じて和室と洋室が混在した住宅です。しかも、洋室は大壁で、窓も上げ下げ窓的なスタイル、和の部分は真壁で、長押が回っていて、建具も障子や襖というものです。

デザインとか空間性を把握する尺度というものはなかなかつかめないけれど、このような住宅が成立する過程を、生活の変化と住まいの和と洋のイメージの変化から追えないかということで、生活のスタイルとして床座と椅子座、そして和と洋のイメージの変化として大壁と真壁に注目しました。これらをもとに日本の住宅がどういうふうに変化したかをみただけです。

結論をいえば、和の部分にどんどん洋が入り、洋の部分に和が入るといふかたちで、住宅が、和と洋の対立したものから徐々に混在していき、ついには和か洋かどう判断したらいいのかわからないものができることになる。吉田五十八の大壁造りの和室が、和と洋の拮抗のなかでできた戦前期の一つの到達点だろうと考えています。

この『日本の近代住宅』の中に「レーモンドのレの字もない」と三沢さんに言われました。まったくそのとおりで、このような分析方法では、レーモ



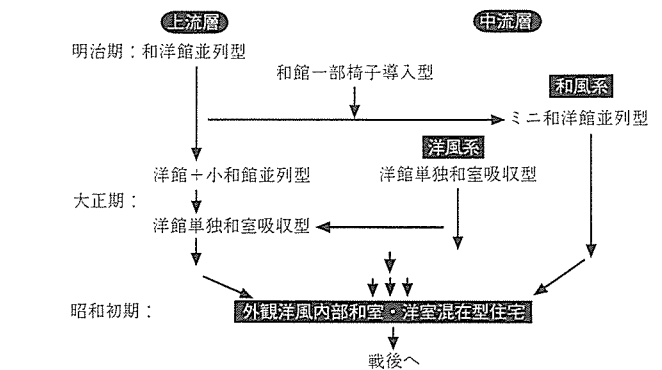
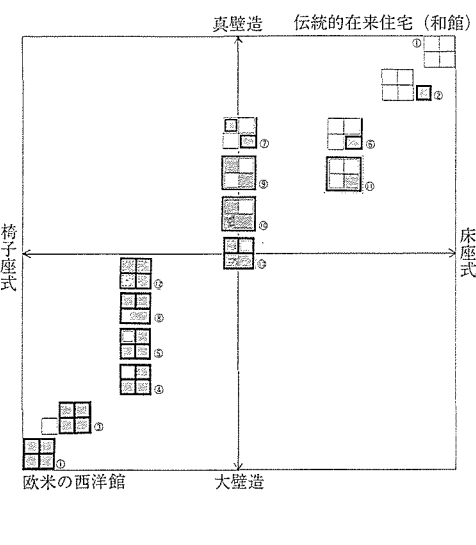
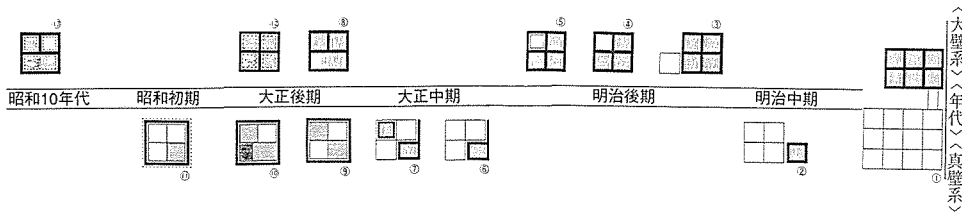
ンドの作風は追えないのです。一つは、作風があるようでない、はたまたないようである、大変多彩です。しかも、海外との関係が非常に強いということも、その存在を難しくさせています。私としては、レーモンドの位置づけは非常にむずかしいということです。

『日本の近代住宅』は、戦前までの話を書いたわけですが、私があえてレーモンドのレの字も入れなかったことの釈明はあとに回して、日本の住宅の近代化と西洋建築家の異文化との葛藤に、簡単にふれたいと思います。

### 日本の住宅の近代化と西洋建築家の異文化との葛藤

日本には、コンドルとかヴォーリズのような、非常にたくさん住宅をつくり、また、多くの影響を与えた外国人がいました。けれど、非常に巨視的にかつ簡単に述べれば、おそらくコンドルとかヴォーリズの時代——明治、大正の初期ぐらい——で一線を引かなければいけないだろうと思っています。ライト、レーモンド、タウトという人たちが日本に来たうえで活動や「日本的なるもの」に対する認識のしかたは、コンドルやヴォーリズなどが活躍した時代と、かなり違っていたと考えています。

コンドルは「暁英」という画号をもつほど、日本の伝統絵画の勉強をして、第二回内国絵画共進会などに出品して賞までもらうぐらいの腕前をもった人ですし、さまざまな日本の文化を海外で紹介しています。さらに、奥さんも日本人で、亡くなるまで日本にいたというかたちで、日本のなかに非常に溶け込んだように思います。けれど、彼のつくった住宅から、日本の文化をどう考えていたのかをみていくと、和と洋という問題は、あくまでも様式の問題としてしかとらえていなかった。つまり、自分が知っている完結した洋という一つの様式の世界と、異文化である和の様式を融合させようというような思考は基本的にはなかった。融合させるのではなく、一つの建物のなかにはつきりとわかるかたちで取り入れることはありました。つまり、折衷主義という考え方のなかで、あくまでもある様式をベースにして、味つけのなかたちで別の様式を加えていくということを、一つの手法としていたのです。



図一六 わが国の住まいの近代化の系譜 (明治期から昭和戦前期まで)

図一七 床座—椅子座、大壁—真壁の観点からみた住まいの近代化

コンドルは自邸として、自分が住む生活の場は洋館を建てています。けれど、奥さんは日本人でしたから、その後ろに和館を建てて、基本的には住む形式を変えろということをしています。ここに端的にみられるように、伝統的な和を空間として積極的にとらえて、一つの生活の様式として自分がそのなかに溶け込んでいくというかたちはみられません。

ウォーリズにおいても同じようなことがいえます。彼も奥さんは日本人ですが、彼がつくっていた住まいや生活のスタイルは、伝統的なものを積極的に取り入れていこうというより、やはり自分が知っている洋の様式を展開することでした。また、彼の場合には、アメリカ人スタッフがちよくちよく事務所に入ってきていて、そういう人たちを通していろいろな情報を取り入れていました。そのため彼の作風は、アメリカ住宅の様式の変化とよく対応しています。

率先して日本に住んで、自分の生活の基盤、活躍の基盤を日本に置きながらも、日本的なものをベースにして新しいものに転化させていこうという志向は、作風のなかでは確認されません。そういう意味で、彼らが使命としてもっていた考え方が、ライトやレーモンドとは明らかに違うという気がするわけです。

では、大正以降に日本にきたライト、レーモンド、タウトはどうだったのか。ライトは、いち早く日本の建築の原理を見出して、それを自分の目指す新しい建築の原理としてとらえていく。それを一つの具体的なかたちとして再構成するということをしたのだと思います。

彼の初期のプレリースタイルは、水平線を強調し、軒の出が深いなど、形態的にも日本の伝統建築と非常に似ていますが、求めたものは、むしろ精神性、空間性。つまり、様式としてとらえるのではなく、様式を支えた背景としての精神性をとらえました。それゆえにそれが自分たちの新しいかたちに応用できる。そういうことができた人たちだろうと思います。

最近のケヴィン・ニュートの『フランク・ロイド・ライトと日本文化』という本をみますと、ライトはモースの影響を非常に強く受けているそうです。

ライトの住宅論における自分の住宅の紹介の内容は、モースの日本の様式、住宅に対する理解のしかたと非常に共通した部分が見られる、というのが根拠となっています。

この説を信じれば、彼は、モースをモデルにしなが、形態だけではなく、日本の建築の原理を探っていこうとしたことになりました。ライトやレーモンドは、西洋と異なる建築に対する興味が非常に強くありました。そこには、自分たちがこれから新しい建築をつくっていくための原理を探るという強い目的意識があったのです。ということは、彼らの身の回りにあった建築に対してすこぶる否定的な見方をもっていたということが背景にあった、といえるのだらうと思います。このような否定的な意識はコンドルにはなかったと思います。

### レーモンドが日本に見たもの

レーモンドの『私と日本建築』のなかに、戦前期に日本の建築について書いた文章が四遍ほど残されています。一九三五年に書かれた「日本住宅について」がいちばん古い文章ですから、来日してからかなりたっており、当然、日本的なものをかかなり咀嚼したうえでの話で、これをもって初期からそういう考え方をもっていたとはいえませんが。

その中で、「日本で仕事をする外国人建築家の特権というのがある。それは現代建築の目的として再発見された基本的原理が、日本建築や文化のなかで具体的にどうなっているのかを直接目にすることができる」と述べています。日本の建築の開放性とか構造の単純さ、正直さが、近代建築の原理と非常に共通するわけですが、そういうものが再び日本のなかでどう再構成されて、新しい建築ができるのかをじかにみる、ということが可能です。さらに、戦後（五三年）の文章「建築の根本原理」のなかで、「日本の富豪の住宅の多くは、ビクトリア時代の模倣で、建築史上いちばん悪い時代の建築が、建築の根本原理を理解しているはずの日本でつくられていたのが不思議である」と述べている。これはまさしく、コンドルなどがつくった住宅を目にし

て、「自分としてはそういうものを否定するつもりで来た。しかし、日本は新しい時代の建築としてそういう建築をつくっていた」と述べているのです。

ヨーロッパ建築について、彼は同じ五三年の文章で、「キリスト教的思考を背景にゴシック様式で最高点に達した。しかし、その後、退廃の一路をたどり、一九世紀に至って最悪の段階に達してしまった」と述べています。彼は、今ふうというと、中世主義者であったという言い方ができるのだろーうと思います。

レーモンドは、日本にくる段階で、自分たちの建築をどう乗り越えるのか、そのためにはさまざまな異文化の建築をみなければいけない、という気持ちがかかなりあったように思います。そのころヨーロッパで起こっていた近代建築のなかで、とるべき方向性はかなり明確になっていたのでしょうか。コルビュジェの近代建築の五原則は一九二六年ですから、もう少しあとになります。ドミノシステムは既に知られていましたし、煉瓦造、石造の閉鎖的な空間から、いかにして開放的な空間をつくるのか、ということが建築の大きなテーマであったことは、一九世紀の後半から二〇世紀にかかる段階ではつきりみえていたと思います。

コンドルやヴォーリスとは明らかに日本に対する認識が違っていた。この点は、個人の差というよりも時代的な差といえるかもしれません。

## 日本の近代建築とレーモンド

私の『日本の近代住宅』の考え方に立って、少し無理やり、レーモンドの作品を見てみましょう。

ライト、レーモンド、タウトなど、はじめから日本の建築の原理を新しい建築の一つの可能性であるという前提に立ってものをみている人たちの住宅は、和と洋の対立の構図上ではうまく整理できません。

一見日本の伝統的なものに非常に近い考え方でつくられている彼らの建築も、実は明らかに質としては違う。精神性なり原理性のなかで日本文化を継承しようということのでつくられた建物であるがゆえに、イメージとしては、

洋館というかたちで把握できないものとなっていたと考えられます。

逆にいうと、明治から戦前期にかけて、建築は、まだ一般的な形態を通して理解されてきました。そういう一般的な流れのなかにあつて、レーモンドは早くも精神性のレベルで日本の住宅の精神を吸収し新しい住宅づくりをしていました。いわば世界レベルの住宅をつくっていた、ということですね。私がつた分析のしかたは、日本というローカルなものを対象としたものから、レーモンドを外してしまつたということになるわけです。

三沢さんのお話にもあつたように、ライト風の住宅から始まつて、一九二四年、自邸「靈南坂の家」の打放しのデ・ステイル的な要素をもつた住宅、さらに二七年「浜尾子爵夫人別邸」で、ようやく「和洋の生活様式の調和のとれた住宅ができた」といっています。これは外観がモルタル塗りの住宅ですし、ここで初めて、「障子を住宅に導入した」と述べています。さらに、折りたたみ戸とか、引き違いのアルミサッシなどがその後どんどん出てきます。

ただし障子に関しては、彼は、「外国人用の住宅では使わなかつた」と書いています。住み手に合わせて用いたものということで、開放性という原理に対応するかたちとして、強い個性をもつた障子を使うとは思っていなかったのかもしれない。

三四年に「川崎邸」というRC造の大きな住宅をつくっています（図一〇）。この時代になると、一般的には和洋館並列型の形式はどんどん変わってきていて、洋館のほうに生活が移ってきます。さらには、畳敷きの部屋、床の間、違い棚、付け書院などがついた書院風の座敷が建物の内部に取り込まれるのが当時としては一般的な姿になっていました。川崎邸は続き棟として、「日本間の平屋がつけられているタイプです。ですから、私の様式的分類では少し古いタイプに属します。

レーモンドは、日本の座敷、さらに建築と庭との関連性をかなり強調して述べています。そういう意味で、住宅の中に和室を取り込んでしまう形式と比べると、日本的なもの良さを理解して、そういうものを伝えたい、



生かすためにはこういう伝統的なやり方しかない、ということを書いている形式なのかと私は解釈しています。ただ、レーモンドの戦前の住宅の詳細がよくわかりません。畳が敷かれていながら、部屋が大壁なのか、真壁なのかわからないので、分析がむずかしいのです。

その後一九三四年ころになると、丸太が出てきます。軽井沢の「夏の家」「小寺邸」「セント・ポール教会」などが続々と建てられ、一様に丸太、下見板張りによる建築です。それは一見すると、民家風で、先ほど地域性というお話がありました。まさにそういう感じがします。作品集をみる限りは、これは突然出てきます。こういうかたちで戦後の「レーモンド・スタイル」の要素は戦前期にいろいろな形で出てきております。

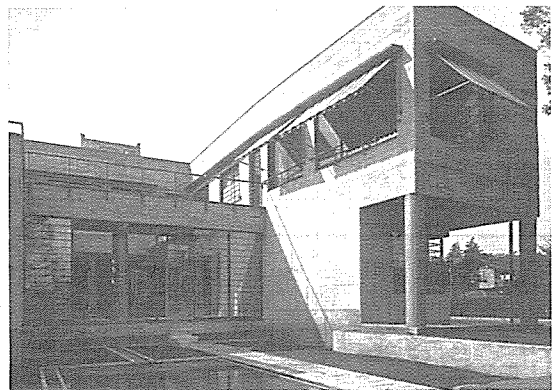
三七年に帰国しますが、その後、『アントニン・レーモンド詳細図集』を出版して、そこで、引き戸等の有効性を、日本だけではなく、海外にも紹介しました。それによって、ガラス窓の内側に障子をはめ込む形式とか、壁の中に建具を引き込んでしまう形式が、日本でかなり普及したのだからという気がします。そういう意味でも、レーモンドの与えた影響はかなり大きかった。

しかし、障子にしても、彼が使う場合には、いわゆる日本の障子ではなくて、合板を使った襖立ての引き戸みたいなものをつくっていたりして、一見日本的に見えるのですが、使っている素材はかなり違います。

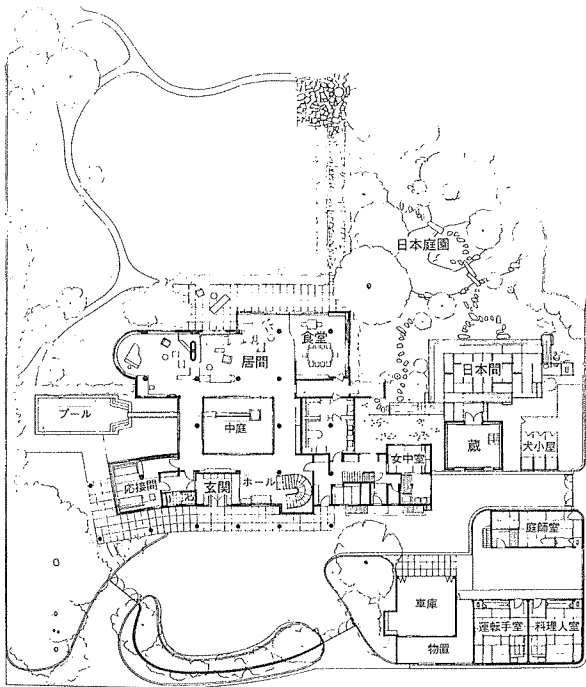
精神性を取り入れ、そのなかで有効な素材をそこにもう一度取り入れて、自分として咀嚼し、再構成して出していくという形式がその段階で少しずつ出てきていると思います。逆に、一見日本的に見えるけれど、どうも伝統的なものをそっくり使ったかたちにはみえない部分は、質の高さといったほうがいいのだらうと思いますが、そういうところが起因しているのではないのでしょうか。

### レーモンド・スタイルの再評価

戦後の住宅は、レーモンド・スタイルというかたちが出てきて、足場丸太と



写真—16 川崎邸外観(1933~34年)  
別棟として純日本風の和室をもつのはこの作品のみ。



図—8 川崎邸の平面図(1933~34年)

か、いろいろな形式が出てきます。このころから、彼の五原則（自然とのつながり、正直さ、直截さ、単純さ、経済性）が出てきます。コルビュジエの五原則を意識したのかもしれないませんが、コルビュジエの場合は、かなり形態と結びついた五原則なのに対して、レーモンドのものは形態にあまり結びつかない五原則になっています。彼として、日本の建築をどう読み換えていくのかという意味では、形態ではなくて、精神性、原理そのものとして読んでいくということをかき強く述べていたのだろうという気がします。

戦後のレーモンド・スタイルの住宅は、日本の建築を読み換えたかたちでできた新しいタイプの住宅だったのだらうと思います。非常に新しい住宅をつくり続けたと考えていますが、施主の多くが外国人だったということで、日本のなかで日本人のための建築というニュアンスは、戦前に比べ欠けていたという気がします。戦後のローコスト・ハウスをみていくと、実は五原則からは少しずれていき、形態的にはかなり画一化された形態が多かったという気がします。終戦直後のローコスト・ハウスという、あまりよくないイメージのなかに埋もれてしまった。そういうものが日本の戦後の住宅のなかにあまり普及しなかったのは、そこに理由があったのではないのでしょうか。

モースに代表されるように、日本の伝統的な建築、日本の文化を評価する建築家は多くいましたし、現在でも多くいるでしょう。しかし、レーモンドのように、これほどわかりやすく伝統性の継承、どう置き換えて実際の住まいに適用したらいいのかということを具現化した建築家はまずほとんどいなかった。そういう意味で、彼の役割は非常に大きかったと考えています。しかし、われわれの側があまり彼の行なってきたことを理解しようとする機運に至らなかった。これはレーモンド・スタイルの実践された時代の不幸があったのだと思います。彼の作風はもう一度評価していいのではないかと思います。

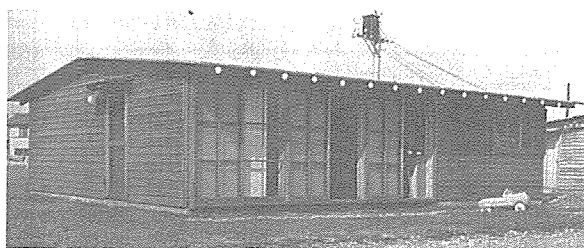


写真-17 ベーシック・ハウスの外観(1954年)

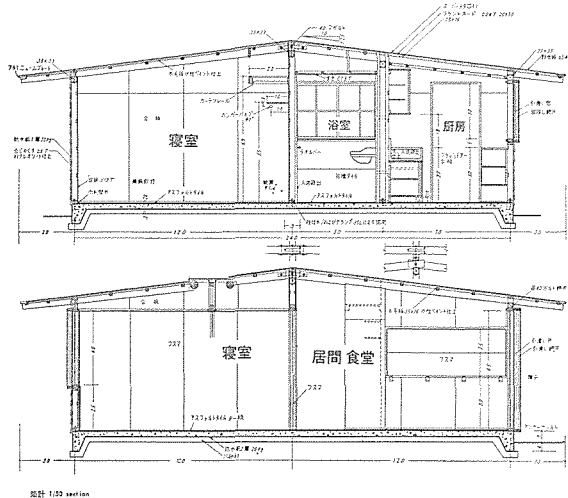


図-10 ベーシック・ハウスの断面図

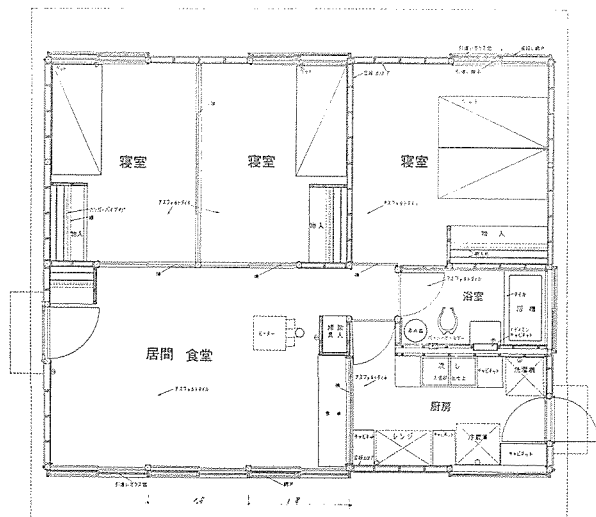


図-9 ベーシック・ハウスの平面図

## デイスカッション

片山 お二人からお話をうかがいました。内田さんのお話に対して、三沢さん一言。

### ベーシックハウス——レーモンド・スタイルの創出

三沢 内田さんのお話の最後に「ローコスト・ハウス」のことがありました。ローコスト・ハウスが戦後につくられていたのに、それが一つのスタイルにならなくて伝播しなかったということ。

そのローコスト・ハウスは、「ミニマム・ハウス」といって一五坪から二〇坪の外国人の家で、そのフラットルーフの家が五年の『新建築』に載りました。軍用に二十何軒かつくった「ベーシック・ハウス」はすべてが二〇坪前後。これでもLDKで、日本のバラックより少しはいいかなと思われれるものです。これも単純な家で、芯外しどころか、日本の普通の木賃長屋と同じで、柱にひばたをつけてドアを開閉するという、われわれの下宿時代にあったような家で、襖までそうやって開けます。ベーシック・ハウスという以上臨時の家としてつくったもの。成増にあったはずですが、私は見たことがありません。図面だけ残っています(図―9、10、写真―17)。

この二種のローコストハウスは、当時、設備などは何もなかった日本にあつて、最低コストではあつても必要な機能と設備を備えていた点で、注目に値する住宅の原形だつたと思います。それをレーモンドが直接手がけたということは重要です。

どうしてこういう家が普及しなかったのだろうかという点ですが、レーモンドとしては、「ベーシック」だとか「フラットルーフ」といわれながら、発表はしたけれど、最低の設備が整っただけの戦後の家ということで、ファイアー・ブレイスもない。レーモンドとしては、そういった家は本物の家だとは考えていなかったのです。本物の家は、せめて足場丸太でつくった自分の事

務所であり、自邸であり、シザーズ・トラスで組んだ構造が見えて、固定式ではないのだけれど鉄板の独立式の暖炉がある居間があつて、しっかりと南に向かつて開けている家を、自分の論理に基づいた、そして精神構造から押し出された家と考えていたのです。われわれはそれを「レーモンド・スタイル」と呼んでいるわけです。

片山 内田さんは、研究者として三沢さんに質問はありますか。

内田 レーモンドの書いた文章を読んでいますと、これからの新しい近代建築をつくるうえで、日本はたぶん何か自分を啓蒙するところがあると思つていたので、という話をしました。「一九一三年にボストン美術館の東洋部副主任、ハーヴィー・ウエツツェルから日本の文化の教えを受けて、この段階で日本に行つてみたいと思つていた」と書いています。

三沢 僕もそういう話を聞いたことがあります。ウエツツェルに会つてオリエントとおもしろいところであるといういろいろ聞いたのでしよう。そして、一五年にライトのタリアセンにいった時、たくさん日本のものがあつて、なぜだろうか非常に疑問に思つていた。プレイリー・ハウスをやつていたライトからいろいろ聞いたと思うんですね。

日本に関係があることは自伝にも出ていますが、そのウエツツェルが、ウオッシュユバンの『NOGI』という本(邦訳・講談社学芸文庫)にある「乃木將軍は非常に謙讓の美德をもつていて、記者が行つても、戦死した子への悲しみを隠してわれわれに應對してくれた」ということを書いていて、「謙讓の美德」が出てくるわけですが、非常に不思議だとは思つていました。まずそこまでです。

### ノエミ・レーモンドの果たした役割

内田 わかりました。レーモンドが書いたものをみると、奥さんがかなり出てきます。奥さんがどのぐらい作品に手を出していたかですが。

三沢 ケネス・フランプトンの『近代建築の批判的歴史』(未訳)という本にあるのですが、なかなか読みが深くて、さっきの川崎邸も含め、戦前の大き

な住宅は「そのどれもがレーモンド夫人の手になるものであって、きわめてインテリアとしては高級なものをつくっていて……」と書いています。子育ての時期の三年を除き、奥さんがインテリアデザインを全部やっていたことは紛れもない事実です。日本にくる前も、極貧の時代がありました。昔、カールピスには黒ん坊がストローで吸っている絵があって、それが商標になっていました。あの絵のとはNIPPというサインのあるポスターですが、そのNIPPがレーモンドの奥さんのノエミ・ペルネサン。いわゆるデザイナーで、それで稼いでいたので、一五年に結婚してから、レーモンド夫妻は三年間食えたということです。日本にきてから帝国ホテルの「孔雀の間」の孔雀の原型をつくったのも彼女です。戦後は、自分で友だちの家——カニングハムさんなど——の仕事をとってきて、レーモンドがみて、あの家ができました。

内田 引き違いの襖とか障子などはどちらが担当されたのですか。

三沢 それはレーモンドです。レーモンドが引き違いにしよう、あるいは折りたたみ戸にしようと言って、その材料を考えるのは所員。その柄を考えるのは奥さんでした。レーモンド事務所のある住宅がそうです。ベニヤを張ったほうがいいとか、坊主襖のほうがいいとか、それに車をつけようとかを考えるのは所員です。レーモンドはそのとき、「面倒だからさうしよう」とか、「引き手のほうがいい」とか、言いますが、分担当がありました。しかし、レーモンドが全部みています。奥さんのもみていますから、目が通っているといえます。特に細部、つまりショップドロイングという施工図は完全に目を通して、ホルトの太さまで自分で決めますから。

## つくり方の変化と血縁

片山 内田さんから「和と洋の観点からはレーモンドはとらえにくい」という話がありました。しかし、レーモンドの作品の初期には和があつて、「浜尾子爵夫人別邸」で実験をしていますよね。非常に早い時期にそういうものを設計して、戦後の「カニングハム邸」などに収斂していきます。その迫り方というのはすごく速いんですが……。

三沢 だいたい五年ぐらいで変わっています。

片山 それはどういふきつかけなのですか。

三沢 きつかけは全部自分の家です。震災後の一九二三年の「靈南坂の自邸」、その一〇年後の「夏の家」。これがきつかけになって、初めて洋風でありながらなんとか自分の思うようにもできた。

戦後、五一年から麻布笄町の新しい家に住み、五七年にはどうしてももう一つ夏の家をほしくなった。葉山にちょっと傾斜した柱のある小さな家をつくりました。これも画期的な家です。切妻の真ん中に柱も梁もないんです。唐傘そのまま、二階をつくらせた家です。

それから、もう一つどうしても軽井沢に建てたくなくて一九六二年に丸いスタジオをつくりました。石造りでつくりたかったけれど、それだと開放的にできない。三六辺形にしちゃえと、三六にしたら障子をはまらない。一二辺形にしたら、ちょうど六尺ぐらいになってはまったものだから、一二本の柱が一二辺形をつくり、中心に力になるファイアープレースを置き、自分の寝室とか所員の部屋は外に出して、ようやく家ができました。これは円形で自由プランをつくりたかったんです。早くいえば、中心に暖炉があつて、その周りに製図板のあるところ、居間、厨房まである家で、これはいま残っている新スタジオです。

こういうふうに分家の住宅、または自分の勝手にできるもので新しいタイプをつくっていったというのが彼の歴史です。

片山 それが時代性をとらえているということになった。

三沢 どうしてもやりたかったことを自分の家でやるのは、ライトも同じ。ライトのタリアセンに行くと、非常に大きな家だけれど、プレイリーからユソニアンから現代までいろいろ必要な要素が全部ある、そういう家です。

## レーモンドの和と洋の葛藤

三沢 内田さんが先ほどの分類で、「コンドルやウォーリスは、型にはまった洋式と和式の並列である」といいました。「川崎邸」には並列に近い和室があ

り、古いタイプに属するという話が出ました。「川崎邸」では、オーナー自らが使うために和室が欲しいという希望があり、ああいう形で和室部分があるのです。それにお気づきだったわけですね。たった一つだけの例で、これ以外にないんです。

内田 彼が和室をどういうかたちで取り込むかを調べたくて、平面図を追っていったんです。ないんです。出てきたのは川崎邸しかない。

和館をつくるときのタイプとして、コンドルにしても、洋館が従で、もともと伝統的な生活のほうにベースがあって和館をつくるタイプから始まって、徐々に洋館のほうに生活が移っていきます。そして最終的には、洋館の中に取り込まれた和室というかたちで生きてくるプロセスがあるわけです。その過程で、和館が非常にいい座敷空間として、離れとしてつくられる場合と、使用人の生活空間、つまり主人とは明らかに違う生活ということで、つくられる場合があります。同じ「和風」といいながら、数寄屋の質の高い材料でつくった和風と、粗末な和風とがある。私の分類のしかたは非常に乱暴で、真壁・畳敷きかどうかという話にしてしまうと、結果としては、そういうものが同じレベルで出てきてしまうということがあります。

レーモンドの場合、戦前期にそういうあたりをどう追っていきけるかをみたくてです。レーモンドは「二重生活というものをどうしても日本人には認めなければいけない」という文章を残しています。

三沢 内田さんが、洋館、和館にこだわって長いこと調べておられることが非常によくわかるのですが、私は図面のうえで、不思議なことをレーモンドはやっているな、ぐらゐの認識しかなくて、内田さんの本を読ませていただいて、あらためて昔の図面をひっくり返してわかった部分が大変あります。それは、レーモンドが初期に洋館、つまりライトの家みたいなのをつくって、ああいうものには外側洋風、はめ板張り、中に真壁の畳敷きの女中部屋がそつとくつついている。それから、中期に、初めて和風をつくつてみた。しかし、門番の家は別にしたかった。メイドの部屋の中には入れたけれど、とりあえず置いた。このメイドの部屋というのが、大きな家でも六畳までは

つくれなかったようで、四畳半です。女中部屋には畳を敷いてある。そして女中用の便所がついています。これは和風です。昔からのやり方でオーナー側とは完全に違うスタイルで、やっていました。麻布笄町のレーモンド事務所も、はずれのほうの庭番の部屋には昔の汽車便がついていて、私たちもそれを使っていました。そのようにオーナーの部分と使用人の部分は区別していたんですね。

戦後初めてつくった「スタンダード石油社宅」で、誤解を解かなければならないのは、女中部屋にコンクリートの柱が出てきて驚くのですが、これは戦後五年目、五〇年にできあがった。その時代をお考えいただければわかるのですが、実はあの家は、レーモンドがアメリカに行ったり来たりしていた四八年を超えてすぐにできた家で、どう考えても日本の所員が考えた平面図ではありません。ニューヨークのレーモンド・アンド・ラド事務所の所員であったデービッド・レビットが、非常に才のある男で、向こうで図面をつくっていたと思われれます。日本の畳の使い方とか、そこに柱を立てるとかということは知らなくてつくった住宅で、芯外し——日本で戦前やっていたやり方を、レーモンドにいわれて取って付けた。そのときに、使用人の部屋および機能的な部屋は横に付き出すわけで、そういうところに皺寄せがあったと考えられます。日本にすっかりしたモジュールがありながら、この時期の建物だけはモジュールに従っていない。つまり、向こうのフィートでやったら少しあぶれて、それを平面図に合わせて建てちゃったという家なんです。モジュールに従うと、日本の家のことですから、三尺、六尺、九尺という寸法が出てきて、それに合わせて柱が載る。「麻布笄町の自邸」はそのコンクリートの家の二年後にできているのですが、これはきちんとモジュールののつて六尺ごとに柱が立っています。

片山 これで誤解が解けたわけですね。レーモンドの「異文化との出会いと葛藤」——「葛藤」というところに期待してお話を聞いていたのですが、生活スタイルはほとんど洋ですね。だから、それを和をデザイン的に、工法的に取り入れて、一つの空間に消化してきたというふうにとらえると、葛藤が



ベーシックなレベルではなくて、わりとデザイン上の問題だなどんだん思えてきたのですが。

三沢 本人はずいぶん精神的な葛藤をしているつもりです（笑）。

戦後、外国人が日本にきて、どんな部屋でも美しい金具のついた日本の簾箆を洋風に置いたり、おひつを宝石入れにしたりしました。それをわれわれは笑ったのですが、レーモンドはそれはやらなかった。そういう区別はついていて、しいていえば、ライトが自分の部屋に大変いい屏風を、立てるのではなくて壁に張っていました。それはレーモンドもやりました。それから、床の間は自分で勝手につくっていました。そういう意味で、精神的にはモースなんかよりも相当「和」が入っていたのだろうという気はします。自分では和風は生み出せないけれど、和風の気持ちに到達しようと努力した、これは間違いないです。

### レーモンドから言った弟子たち

三上（MIDI総合設計研究所） 建築家としてのレーモンドにはもう一つ大事な面があったのではないかと思います。それは教育者としてのレーモンドです。レーモンド事務所には、前川国男さん、吉村順三さん、三沢さんをはじめ、たくさんの優秀な建築家が集まっていました。吉村さんの作品がそこまで到達したことは、ご自身で日本建築を非常に研究されたということ、レーモンド事務所での合理性の洗礼を受けたことが非常に大きかったのではないかと思えます。その評価を内田さんがどういうふうにされるかということ。そして吉村さんがわれわれによくおっしゃったのは、「レーモンド事務所に障子を持ち込んだのは僕だよ」と。しかし「浜尾邸」が二七年ですから、吉村さんが入る以前ですね。あの障子の使い方は非常に稚拙ですから、障子はあったことはあったのだけれども、ある程度完成した使い方をしたのは吉村さんだという意味に受けとめているのですが、その点は三沢さんにお聞きしたい。

三沢 私ははっきりそう思っています。吉村さんが「自分が持ち込んだ」と

いうけれど、その前に杉山さんが「浜尾邸」で障子を使っていたんですね。そこでは、レーモンドはやり方を知らないから、欄間も障子、下も障子、その外にガラス戸、そのまた縁側の向こうにガラス戸。しかも、洋間は折りたたみ戸。二階はサッシュの折りたたみ戸。それは全部引き込むという不思議な窓を輸入して使っているんですね。だから、大変無理をした家だということがわかります。しかし、レーモンドとしては、「初めて日本住宅をつくった」と誇らかにいつているわけで、これは障子だけではなくて、畳の部屋で暖炉がない洋風をつくった、これが日本人の普通の住まいなんだ、そこに到達したんだということ、それが一九二七年です。

吉村さんは一九二八年の春から入っています。吉村さんが実際に障子を入れたのは「夏の家」の前後、三二年ぐらいで、黒い近代住宅という横羽目板の家です。その前につくった日光の別荘では障子が入っていません。

内田 吉村さんは設備等に関して大変ご努力されていますね。ああいう面は、やはりレーモンドの薫陶の結果だろうと思うのです。暖炉の話がありますが、「建築として、質を最終的に変えるのは設備である」ということを吉村さんは書いていますし、そのへんはかなり力が入っている気がします。彼としては、単なるデザインの問題ではなく、住まい方の問題としての設備面という意味で、目にもえない合理性をかなりしつこく教えられたのだろうと思います。われわれは日本の住宅は開放的であるということで、開くとか閉じるといふ話だけで終わってしまうのですが、それだけではないかたちでしっかり押さえていたということが、吉村さんが質の高い住まいへ到達した一つの理由だろうと思っています。

### レーモンドが日本に住みついた理由

稲葉（東京芸大大学院） 日本に長く住みついた建築家として、レーモンドは特異だと思うのですが、何にそんなに惹かれて日本に住みついたのか。仕事があったということは第一にあると思うのですが、戦後また日本に戻ってきて仕事を精力的にこなすわけで、日本の哲学、文化、スタイルになぜそこ

まで惹かれたのか。

三沢 答えは非常に簡単です。おっしゃるように、仕事があつたからです。非常に運のいい人で、帝国ホテルにきてすぐウォーリスの人と一緒にたつて仕事が始められて、二年目の関東大震災で帝国ホテルは残つた。自分が設計した星商業学校も、東京女子大学も残つた。つまり、帝国ホテルがライトのモニュメンタルな耐震建築であるとすれば、それを手伝つたエンジニアはレーモンドですから、やっぱり最新の耐震建築技術者ですよ。そこで仕事がありました。

しかも、レーモンドのいた三菱仲二一号館には日本貿易会社があつて、ナショナル・キャッシュレジスターの社長がいたのです。その人が東京ゴルフクラブ、東京テニスクラブなどを紹介して、そこにいる日本のトップクラスの子爵、男爵たちが紹介されたのです。そういうことが仕事のもとです。

それで、三七年に支那事変が始まつたときにアメリカに帰つてしまつて、アメリカではアメリカ人になつたのです。アメリカで軍隊の仕事をやつていた。もう日本には帰つてこれないかと考えれば、アメリカで食べていく以上、アメリカ陸軍、海軍、空軍に一生懸命尽くして、一〇年間やつて、戦後、沖繩の仕事、韓国の仕事をもつて日本にやつてきたんです。当時の疲弊した状態では、日本はアメリカに物資を頼まなければならなかつたし、アメリカの占領軍のために、教会とか、司令官の家、座間の總司令部をつくりました。

同時に、石油会社がいちばん儲け、次に映画会社、それから銀行、こういうつたアメリカ資本のために尽くしたのが五〇年。リーダーズ・ダイジェストもそうです。五五年になるとアメリカ資本はぱつたりだめになつていふところがそのころになると、ヤマハ、八幡をはじめ、日本の大企業が次々レーモンドに頼むようになりました。それがなくなつた六〇年以降はミッシェンです。昔のミッションの学校が残っているから、いい教会が続けてできるよになつて、ミッション系の学校から南山大学につながつたんです。戦争中一〇年とんで四四年間日本にいたわけで、その長い日本滞在では、われわれが非常に苦しんでいた波のなかで、いちばんいいところにいたのではないで

すか。そう言つてしまつては自分の師匠に申しわけないのですが、あんな運命に遭つてみたいと僕は思うんです(笑)。

片山 答えにオチがつかました。

三沢 先ほどの三上さんの話に戻りますが、レーモンドは教鞭をとつたことはないが、教育家のような立場をもつていました。だから、流れ流れのエポックでいい人が入つていふ。「靈南坂の家」のときには、若くして亡くなつたけれど内山隈三という優秀な人がいた。杉山雅則さんは一から一〇まで全部手伝つていふ。吉村さん、コルビュジエのところから帰つた前川さんがきた。コルビュジエのところからまた一人やつてきた。ペレーのところからもやつてきた。こういう人をチーフに使つて、うまく育てながら、自分がペレーを吸収し、コルビュジエを吸収し、近代建築を前川さんから吸収しちやつたのがレーモンドでした。

そのあとに、岡本剛とか、増沢洵という人がいました。増沢さんは非常にエポックをつくつた人です。

内田 レーモンドはいろいろな作風がありすぎてわからないというのは、お弟子さんのルーツをもう少し整理すると、多少きれいに区分けできるといふ気がしますね。そのへんはぜひ三沢先生にやつていただければ……。

三沢 それは私の仕事じゃない(笑)。私はありのままに書き立てて、資料を研究者にあげるほうですから。

一言、言い足りなかつたことがあります。「日本にモダニズムの原理があつた」といふのは、口ではサラリといえますが、なかなか具体的にわかりません。ところが、ヘンリー・ヒッチコックが「国際様式(インターナショナル・スタイル)」は三つの原理がある。ガラスで仕切ろうが何であろうが、空間のボリュームがあるということ。これはいままでの量感、石の塊とは違ふ。これが新しい一つのボリューム。第二は、規則性があるということ。モデュールが国際様式には必要である。三番目には、「無装飾」といつていたんです。これは一九三二年ですから、まさに「夏の家」のころです。ところが二五年後に修正して、第三の無装飾といふのは、ライトが出てきて装飾を加えたか

ら、構造によって一つのデザインが表現できるような、構造の分節化を加えたわけですね。その三つになったわけですね。

そのころ日本は何をやっていたかというところ、白い箱を洋風にして、白い近代建築をつくっていた。似ているから原理になるわけではない……という。先ほど内田さんがおっしゃった、構造が出てくることや、リビング・ダイニングだったり、日本の座敷みたいに突き抜ける内外空間の自由、内部空間の自由。モテュール・システムとか、方位とか、あるいは非常に融通のある部屋の使い方（戦後になると、「食寝分離」がいわれましたが）、これは、早くいえば、ダグウッドの漫画にあつたように、アメリカの文化の象徴でもあつた。どこから入っても構わない、庭にもすぐ出られる、入るとリビング・ダイニングで、そこが客間になったりする。寝室はドアをつけておけばいい。そういう融通のある使い方が魅力だったわけで、「こういうことは近代建築と同じじゃないか」といわれて、レーモンド・スタイルをつくってきた私たちがいるわけです。

レーモンドは、それに対して、「そういう表現のことではない」と。精神性であつて、日本の建築の原理がそういうものをもっている。「人生と自然との融和であるとか、自然を抱き込んだような庭であるとか、地震や台風に対しても物おじしない、西洋式に閉ざさないような生活、季節感、こういうたものが底辺にあつて、哲学になつていっているんだ」と、こういうのです。「それを忘れて、物理的な相互貫入とか、そんなことをいっても困る」ということははっきり何度も何度も戦後繰り返して言っていました。われわれはつくる立場にいたものだから、そうやればなんとかなるだろうと思っていました。

## 異文化と仕事、これから

片山 いまでも外国人の建築家がおおぜい日本に来て仕事をしています。一方、インターネットなどにより情報が一元化して、多様に広がっています。そういう時代を迎えて、これから建築家はどのような仕事の仕方をしていくか、

そのへんについてお話しただけだと思います。

内田 確かに、かつては、レーモンドに代表されるようなかたちで、日本は、ある意味で「神秘の国」だった。それなりに仕事も得られるし、大事にされる。しかも、日本という異文化からさまざまな情報を吸収できる国であった。しかし、いま日本で仕事をしている海外の建築家たちをみると、得るものがあるというのは、仕事があるという意味のことで、はたして日本にどういう魅力をもっているのか。自分の母国ではできないことが日本ではできちゃう、日本のなかではなんでもオーケーというような価値観をもっているような気がするのです。

レーモンドは、日本の文化をすごく大事にして、日本の建築の精神性をどういうかたちで展開したらいいかという一つの方法を提示してくれていると思います。そういう建築家が、はたしてこれから本場に出ているのかどうか。逆にいうと、日本がいろいろなかたちの実験場になつてしまつて、ひよつとしたらわれわれは粗大ゴミをいっぱい抱えるような……。こんなことをいうと、怒られちゃいますね（笑）。そういう危険性があるのかもしれない。

先ほど三沢さんのお話で、レーモンドは施主がいろいろなことをいったときには、自分の好きなことができなかつたと、そういう見識を当時の施主はもっていた。いまだどこまでそれが施主にあるか。「葛藤」ということはもうなくなつてきているという気がしますね。

建築というのはいやほやり地域性に根ざすものだ、私は思っています。そういうなかで、建築家が葛藤できる国にしたいと思っています。

片山 三沢さんは、これから異文化との出会いはどういうふうになると、お考えですか。

三沢 これから考えていかなければならないことになりそうです。もう粗大ゴミができていますからね。富山あたりにいくと、粗大ゴミが十幾つかある。わが同胞も海外にいつて、ひよつとすると粗大ゴミをつくっているかもしれない。だから、フランプトンが言い始めた批判的地域主義ということがもう少し理解されなければいけないし、もともとレーモンドはそれを言っ

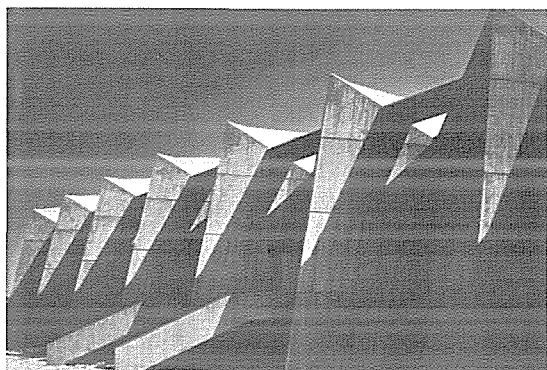
いるのですが、私がそれに気がついたのは、群馬音楽センターのころなんです。レーモンドは近代建築といっているけれども、違うことをしゃべっているなど。

群馬音楽センターは高崎にあつて、竣工三〇年目にあたる八年前に、つくった時の三億円を超える八億円をかけて修理して、しかも、市民の言うとおり、元のデザインのまま修復したということで現在はそれで有名になっています。群馬交響楽団の根拠地ですが、市民がたくさん使うために、普段の練習ができなくなって、最近レーモンド事務所が裏のほうに練習所をつくったといういわくまでつきました。全体は一二枚の完全な折れ版構造です。この音楽堂の建設費は、市民が三億円のうちの二億五〇〇〇万円を町内会費を倍にして寄付しました。レーモンドは大変感激して、「この建物は浄財、つまり寄付金で建てる建物だから、絶対によいことをやっちゃだめだ」と。私たちは贅沢な材料だとか、非経済的なことをしないことだと思つたのですが、彼は「長もちをさせて、市民が末永く使えること」と思つていたので、一センチの厚みの上に防水剤をかけただけ。いきなりホールになるわけで、外の音も聞こえたりして、欠点があります。しかし、とにかく無駄は一つもない。「絶対に二階をつくつてはいけない。舞台と客席は一体で、どっちにいても一体感のあるものにするのが民主主義である」といつてわれわれに設計させたのです(写真―18)。

舞台上部を普通のホールのように高くしていくと、この環境に対して申し訳ないとレーモンドは考えた。「ここは城跡ですから、「松の木より高くするな」といつてフライタワーをやめさせた。そのおかげをこうむって、書き割りは全部横に入っていくようになりました。つまり、いままでの機能一本やりの近代建築に加えて、いろいろ環境に対する配慮をすることがレーモンドの考え方の基礎にありました。これが近代建築の考え方とはまったく違うことです。

それから、戦後、住宅をやりながら非常に考えさせられたことは、中からみて「いい景色」がみえること。これを彼ははずつと「庭とのつながり」とい

つてきたのですが、「夏の家」でわかつたことは、「建て主は眺めのいいほうに住むべきだ」という観念ですね。これは「靈南坂の家」からもつていました。内側からみた建主に対するサービスはすごかつた。私がそれに気がつたのは、やっぱり群馬音楽センターです。レーモンド事務所に勤めて一〇年たたなければそれがわからなかつたわけです。こういうことを考えるような人であつたということ、外国人がどうしてこんなことを考えていたのか、つまりそれが日本にあつたということ、片山 そうすると、半分冗談ですけども、外国人が日本で粗大ゴミをつくらないためには、逆にレーモンドを勉強せい、ということですね。三沢 そうでなくてもいいですが、日本人の住まい方を研究してほしいですね。まだ日本人の住まい方はそんなに西洋流になつていないですよ。靴脱ぎ、スリッパ履きですからね。そういうふうに僕は考えています。片山 三沢さんの本音が出たところで、今日の結論にして終わりたいと思います。どうもありがとうございました。



写真―18 群馬音楽センター(1958～61年)  
市民のためにつくること、環境への配慮を一番に考えていた。

6頁―26頁の写真及び図版は、  
『アントニン・レーモンド作品集』及び  
『アントニン・レーモンド自伝』より転載。

# 今、異文化の中で設計を進める

施主や地域の夢を汲み取り、時や場所を理解すること——建築家の国籍がどこであろうと、それがよい建築の基礎である。

## トム・ヘネガン

人は誰でも各人固有の文化を持っており、すべての建築家は常に自身の文化とは違うもののために設計しているのだ

これまでに多くの人により日本の閉鎖社会について述べられ、また、一九九〇年に来日して以来、不適當に外国人を受け入れない職業も目にしてきたが、建築分野は今のところ退行する法律の枠から免れている。外国人建築家は、日本人建築家が海外で仕事をするのと同じく、日本国内において自由に活動できる。これは、日本が世界の建築界の完全な一員だということだろう。

ある意味で、この日本建築界の開放性が、幾人かの偉大な建築家、フランク・ロイド・ライトやル・コルビュジエ、ブルーノ・タウトなどの建築を結果としてこの地に生み出したといえる。近年の、ピーター・アイゼンマンやアルド・ロッシなどによるものは同列に扱えないかもしれないが、世界の自由な思想の流入が日本の建築界を刺激したことには疑いが無い。これと同じく、磯崎新や中国生まれのI・M・ペイの作品がアメリカの建築界を刺激しているともいえる。彼らは自分と違う文化の国のために設計したが、人間は各人固有の文化を持っており、すべての建築家は常に自身の文化とは違うもののために設計しているということも事実である。国籍はその人の知覚や性格を定義するただ一つの物差しではなく、またいかに日本が一つの人種で成

り立ってしようとも、多分彼らは「レプリカント」ではないだろうから、無数の文化が日本の中にあるといえる。学歴の差は違う文化背景を、貧富の差は違うライフスタイルを、形作るかもしれない。年配者は若者とは違う文化や態度を持つ。例えば、この文章を読んでいる何人かはボニー・ピンク、コッコ、ウーアについてよく知っているが、他の人(たち)はこの言葉が何を意味するかわからないだろう。

来日する前、私はロンドンで、世界で最長の歴史を持つ建築学校のAAスクールで一四年間ユニットマスターを務めていた。AAスクールの教授、生徒は世界中のほとんどの国から集まっていた。授業は英語で行なわれプロジェクトの敷地はたいいてい英国内に設定されたが、しかしこれは、英国の文化環境内のみで通用するデザイン教育を意味する訳ではない。この学校の教育目的は、学生に、彼らの設計する建築を通して考えることを促し、どう表現できるか教えることだった。設計課題は世界的な視野の問題を提起したので、国に帰ってからも多くAAスクール卒業生は故国の建築界のリーダーとなり、また彼の地の建築の進展に意義のある貢献をしている。アジアにおいては、例えばシンガポールやマレーシアについては特にそう言える。また、日本においても、教育者として、AAスクール卒業生はますます重要かつ影響力を及ぼしている。



各国の芸術は世界的に収斂しつつあり、その源泉をたどることが容易ではなくなってきた。坂本龍一は中国とチュニジアを舞台にした映画の音楽を担当し、カズオ・イシグロは長崎で生まれ現在は英語圏のすばらしい作家のひとりとして認められている。小沢征爾はドイツ音楽を演奏するアメリカのオーケストラを指揮し、ローリングストーンズはアメリカ黒人音楽に影響を受けた白人英国人だが東京ドームでのコンサートを満席にする。これら、ファッションや絵画彫刻、音楽文学、ダンスの国籍は実際関係ないといえる。これらの芸術が建築と異なる点は、特定の場所に依存しないところだ。建築においては建物は特定の場所に関係するし、するべきである。ライフスタイル、気候の点からも各地域の建築は違ってしかるべきである。アジアにおいて北欧や北米風の建築を建てるのはまったく不合理だと思うが、多くの建築家しかもアジアで生まれた彼らが、そうしているのである。

## 敷地のもつ「独自の文化」を読む

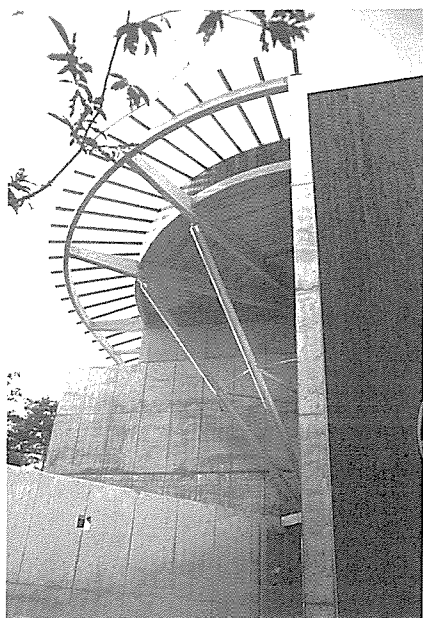
ケネス・フランプトンが評論「地域主義建築」(critical regionalism)の中で述べているが、一九二〇年、三〇年代のヨーロッパの近代建築は、文字どおり「国際様式」として輸出された訳ではなかった。名前は便利なレベルであっただけだ。それは、「国際的な手法」となるべきもので、建物の性格はその地の気候や文化、地元建設業者の技術などに適応すべきものだった。このことは、コルビュジェのインドにおける一連の仕事で理解できる。このプロジェクトをデザインする過程で、コルビュジェは、新しい独立国家の夢を理解し、分析し、シャンティガールにおいて実現する必要があった。同様に、フランスに帰ってもサボワ家の夢や、ロンシャンの神父の祈りを理解しなければならなかった。

クライアントの夢を理解し、吸収し、時には誘導することが、建築家にとって必要な能力である。これは多分、役者が、脚本の上につくり出されたまったく実在しない人物の役柄を理解し、描写するのに似ているだろう。日本に

おいては、茨城の「光の教会」と淡路島にある「真言宗本福寺水御堂」の二つの明らかな例が挙げられる。これは安藤忠雄によるすばらしい豊かな宗教空間であるが、彼自身に言わせると、個人的には無宗教だということである。彼はこの二つの空間を、彼自身の文化からかなり違うクライアントのためにつくりだしたのである。

私が面白いと思うのは、私が設計した熊本の草地畜産研究所をヨーロッパ人が見るとき、彼らはこの建物が見るべき日本建築の特徴を持っていると感じ、日本人はこの建物をヨーロッパの建築だと感じるところだ。私が思うに、この反応は、建物のデザインが特徴ある敷地から直に影響をうけて決められていたからだろう。ここは日本であり、日本の暑さと活火山である阿蘇山の火山灰から建物と牛を保護する目的をもっていた。同時に、建築家の三上祐三が指摘しているように、この敷地が、スコットランドのヒースが茂る不毛な荒地によく似ていることも事実なのだ。気候と、敷地の性格に沿って計画された結果、建物はそのような国籍のはっきりしない印象を持つようになった。

また、七月に完成した福島県のオートキャンプ場「フォレストパーク・あだたら」についても、建築の国籍を話題にするのは適さない。おいても重要なのは、森の環境と傾斜する丘に整合性をもって建てられた方法であり、施設を利用する人が豊かな自然環境を経験できる仕立てだと思う。私は、敷地の性格を解釈しようと努め、その環境と調和する建物をつくらうとした。言いかえれば、特定の場所の「文化」に調和させようとしたといえる。そしてこれは建築デザインの成否を決めることなのではないかと私は確信している。例えば公共住宅や病院、劇場などを設計するとき、建築家はたいがい最終的な使い手を知る由がないが、敷地について知り、新しい建物を周囲にどう関係づけるべきかを理解できる。建築家は、最終的な住まい手の「独自の文化」にデザインを関連づけることはできなくても、敷地の「独自の文化」を常に念頭に置くべきである。



管理棟露天風呂上部キャノピー

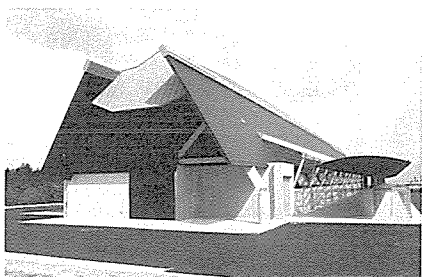


南谷側外観



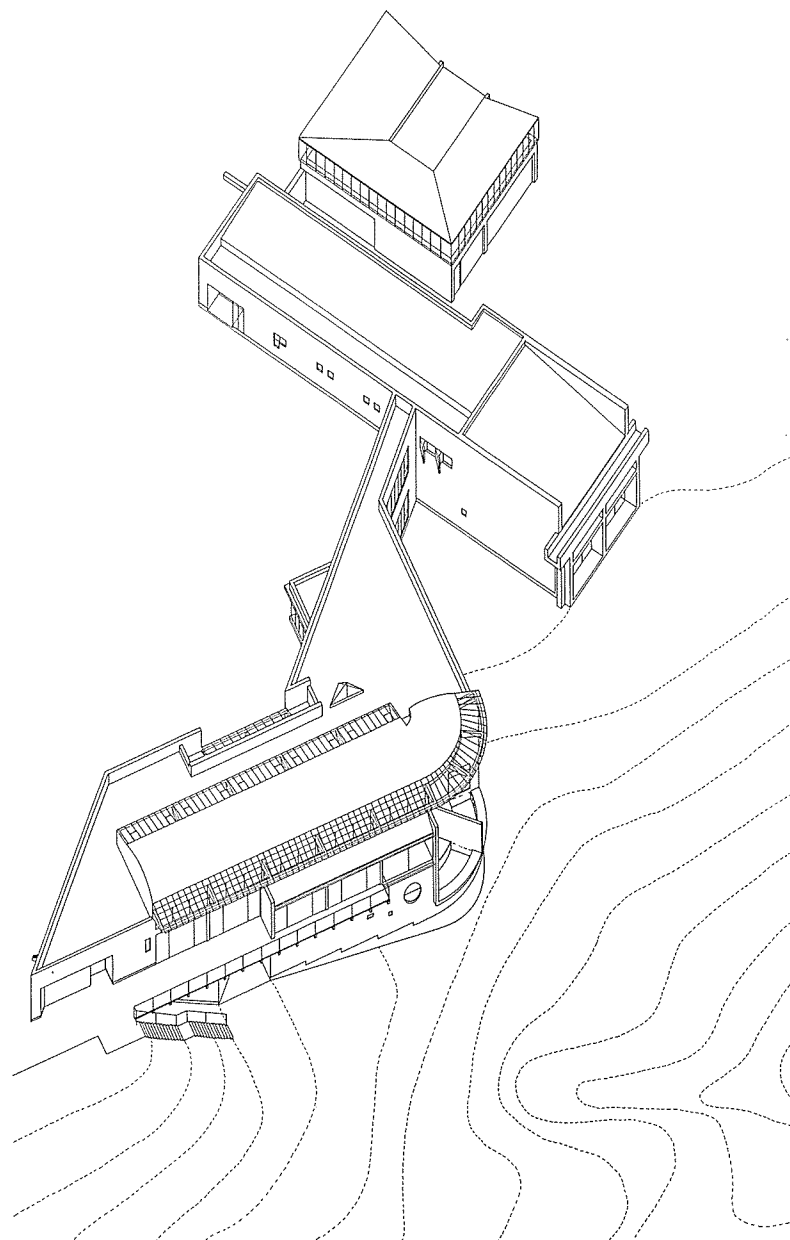
外観

●フォレストパーク・あだたら



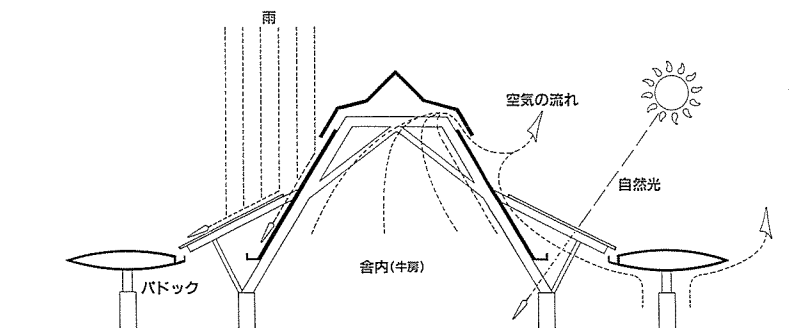
外観

●熊本県草地畜産研究所



管理棟アクソノメトリック

写真提供：村井弘道(福島県生活環境部)



断面図

## 「まればと」の場所を捉える眼

磯崎新は、地元の人に比べ他所からきた者のほうが、時に、場所を「感じる」ことがたやすいのではないかと指摘したことがある。これは、彼が富山県において、「まちのかおプロジェクト」を手掛け、海外建築家を招き、地元の建築家とコラボレートするよう促しながら町や村に顔となる建築物を設計していった中で言葉だ。磯崎は、このアイデアを日本の「まればと」から得たという。「むら」に外からやってくる別種の人間が急激に影響を与え、村を活性化する。時に日本を流れ歩く芸能集団などが「まればと」の役割を果たし、村人は他者の新鮮な目を通して自己を理解することを学んだ。この富山の試みと、七人の海外建築家による十四の建築物の成功は、このプロジェクトとクライアントである中沖富山県知事が一九九五年に日本建築学会賞特別賞を受賞したことに見てとれる。

全体的に、この富山のプロジェクトの建築は、個々の土地に対する思慮深くかつ注意深い解釈により生まれたものだといえる。そしてこれは、西洋の建築教育の基礎となる部分で、建築の環境を捉えることに重きをおいている結果ではないだろうか。日本の大学では、デザインのコンテキストについて、頻繁に議論されていないように感じる。これは日本の都市が、ヨーロッパの都市のように一貫した歴史的・社会的環境をもたないことにも一因があるだろう。しかし、京都のような長い歴史を持つ町や、日本のいたるところにある古い村は、一貫した環境と他とは違う性格を確かに持っているのだ。近年の日本都市の混沌とした様は、コンテキストを重要なものだと捉える訓練を受けなかった一部の建築家やプランナーによってつくり出されたものだと思う。

現在の完全な景気後退は今後数年は続くだろう。このため、建築は、バブル期のように「使い捨て」ではなくなるだろうし、これは好転している新しい態度だといえる。たぶんもう建築は、一時的な形の流行を追い求めるだ

けではあり得ないだろう。建築は、何十年間も、より物理的に長持ちし、様式として古びないものになる必要がでてくるだろう。これが結果としてコンテキストを考える態度を変えていくだろう。

確かに、海外で仕事をすると、日本人建築家はコンテキストに非常に注意をはらう。これは「まればと」の眼を彼が持っているからか、磯崎新は例えばスペインのラ・コロニーヤ人間科学館で、岩盤の上であり大洋に開ける敷地を持つ性格（ゲニウス・ロキ）に対し、完全な整合性をもって建物を町の中に設置するすばらしい成功を取めた。また、安藤忠雄がイタリアで手掛けたベネトン・アートスクールも同じく、一七世紀の貴族邸宅の増改築において成功している。

## 「建築家」の役割りの日英の違いについて

ここまで私は、故国の文化と違う環境で仕事をしている外国人建築家としてこの文章を綴ってきたが、現場ではどうなのか日本の建築家として触れようと思う。私はこの八年間、日本に住みいくつかの公共建築、市博物館、県の保養施設、子どものためのバンガローなどを設計してきた。仕事の進め方は日本もイギリスも似ているが、実際のところ、一番の大きな違いは、日本での建築家へ支払われる設計料がかなり低いということだ！

英国の建築事務所はよりコンピューターを導入して設計を進めているところが多いようだが、設計書はより簡潔だと思う。例えば、トイレの図面一つとっても、英国では位置とサイズが示されるだけだが、日本ではトイレの紙ホルダーの釘位置まで注意深く描かれる。もちろん、コンピューターによってあまり時間を無駄にしないでやれるが、私は、建設業者がそのようなピクチャレスな図面が必要なのか、今だ完全に理解してはいない。

監理の面では、日本と英国では一長一短で、どちらが良いとは言いが切れない。たとえば、イギリスの建設業者は、建築家が仕様書に明記した通りに建てるのに疑問をほさまない。これは将来問題が起こった場合に責任を持つ

は建築家であり、それゆえ建築家は、法的解決になった場合に備えて多額の保険金を支払っているからだ。日本の建設業者はよく無償で問題箇所を修理するので、建築家のほとんどは保険を払っていないだろう。しかし建設業者が施工の責任をもつ故に、彼等にとってはディテールや素材の管理をする必要があるのだ。これは時に、以前に経験があるという理由だけで施工方法を変えることが起きる。保守的な建設業者の安易な変更によって、どれだけ設計意図が曲げられるか理解するのは簡単だろう。

日本の建築家にとってより重大なのは、仕事が終わった時に手元に残る利益が少ないということではないだろうか。日本も英国も、建設費における設計料の割合はほぼ同じだが、日本の建設費は英国よりもずっと高いので、金額的には日本の方が多く見える。しかし日本では、構造設計家、設備設計家、建築費概算のコンサルタント、パース画家などに建築家が支払っており、彼自身への実際の設計料は少ない。英国では、これらのコンサルタントとは施主が直接契約をかわすので、建築家は設計料すべてを使って、より多くの時間をデザインそのものを考えることに費やせる。

そのほか著しい違いは、コストコンサルタントの役割である。先に述べたように英国では施主に直接雇われ、また、彼の仕事は常に建築家にアドバイスを与え、デザインや図面の進展を監視することなので、最終的に建設費は予算内におさまる。建設中には、建設業者が質の良い仕事をしているか、また彼が買った素材が適所に正しい量で使われているかなどを監理する。これは訓練を受け経験をもった者にだけやりとげられる複雑な職種である。一方、日本ではこの仕事を建築家が行なう。建築家はある程度予算を治められるが、しかし、この複雑な仕事に毎日専念できるコストコンサルタントにはなり得ない。日本のコストコンサルタントが図面を初めて見るのは、たいてい、設計が出来上がって施主に認められた後だ。したがって建築家が最後に直面するのは、建設費の大きな問題だということが頻繁におこる。

現場での仕事は似ているが建設日程はこちらのほうが短い。日本の現場のほうが友好的だ。コンクリートの質は日本が優れ、デザイン材料としての鉄

鋼の質感は英国が良いと思う。また、私が使いたい幾つかの素材は日本国内で使えない。例えば安価の高断熱二重サッシなどだ。エネルギー消費を抑えるためにヨーロッパ政府は高い断熱性を要求するが、日本では断熱性能をあげることはまだ一般的な問題になっていないようだ。

これらは実際の相違点だが、困難な問題ではない。そして、私が日本の建築法規の複雑さに煩わされているのではと、友人たちは同情してくれるが、これも実のところ大きな問題ではない。法規は従うべき「ゲームのルール」のようなものだ。もっとも、首をかしげる法規もあることは認める。同様に、英国の法規の中にも、とても複雑で非論理的なものもある。

そしてなにより、私は日本で働くことに刺激を受けている。この国は長い芸術の歴史を持ち、また現世代の日本建築家の多くは世界でも有数の芸術家だ。彼等と同じ時代に同じ場所で仕事を続けていることは刺激あることだ。そして私を含め日本の建築家は、施主や地域の夢を汲み取り、時や場所を理解することに今後も努力していくだろう。そしてこれは、いつでもどこでもまた建築家の国籍にかかわらず、よい建築の基礎となることだろう。(文中敬称略)

(Tom Heneghan / 建築家、アーキテクトチャー・ファクトリー主宰)



トム・ヘネガン

一九五一年、ロンドン生まれ。A.A.スクール(ロンドン)卒業後、建築構造設計事務所オーブ・アラップ、及びアリソン+ヒーター・スミッソン建築事務所に勤務、一九八五年、ロンドンで事務所設立。この間、一九七六―八九年、A.A.スクール教授を務めたほか、多くの大学に講師として招かれる。一九九〇年、アーキテクトチャー・ファクトリーを東京に設立、現在に至る。工学院大学建築学科特別専任教授。

主な作品は、本文中掲載のもの以外に、滑川市はまなす公園展望台、三良坂町灰塚湖畔の森バンガロー、滑川市はたるいかミュージアムなど。

# 幕張ベイタウンの設計から

「奥の細道」――日本人の発想より日本的だったステイブン・ホールの構想

曾根 幸一

## 幕張住宅地の目論み

私が幕張新都心住宅で一緒したステイブン・ホールとのやりとりを、というのが「異文化との葛藤」という編集の主旨らしいのだが、それに関連して、幕張で試みている都市建築の配置論から触れさせていたきたい。彼とは、日本の都市建築や沿道性などについて、冒頭話題にした記憶があるからだ。

都市建築などと言ってみたと、わが国では震災が起きてもたいして変わることもなく、あちこちに異形異様な物体がところ狭しと場所を占拠していくのだから、いまさら街区だ景観だと言ってみたところでどうしようもない。情報ビットの加速や資本の渦がそうさせているのであって、磯崎新さん流に言えば、都市はますます消えていく存在になりつつあるのかもしれない。そんななかで集合住宅をつくる機会は、マンションという消費文化に巻き込まれていくか、出口のなさそうなコーポラティブハウスの気の遠くなるようなつき合いにしか見出されそうにないのだが、それはそれで、環境と呼べそうな広がりのある住宅地の事業化を企画してみるならまた別だ。

考えてみれば、幕張の住宅地で画いた描像は、今世紀の初頭、オランダでH・P・ペルラーへの唱えた都市住宅の原像にひどく似ている。まず第一に、都市という織物を形成する中心的要素として住宅を据えること。住宅は独立

したものでなく大規模な住居集合体とすべきこと。そしてその形式は中庭を囲む形で住棟を配置する閉鎖型配置の集合住宅であること。これがその基本的な骨格であった。

アムステルダムは、幕張の住宅地を計画するにあたって、われわれ計画や設計に関連した人たちが改めて確認させられることになった街である。この構想を最初に実施したのはアムステルダム中央駅の北西港湾地区にある。この一九世紀と今世紀初頭の集合住宅が併存している地区では、街区と建築の関係が新世紀で変わったわけではなく、街区自体が不定形にくねりながら大きな広場を囲む形式が特徴になっている。巨大なスケールを巧みな手捌きで分節し、精緻なディテールを付加しているのが、後に「アムステルダム派」と呼ばれるM・デ・クラークの建築だが、そこには、巨大なものの分節の技術もさることながら、焦点となる場にミニメンタルな建築を配するなど、当時カミロ・ジッテが提唱していた閉鎖性の美学が色濃く投影されているのも、関心を呼ぶ一因となっている。幕張での住棟の分節方法や、均質になりがちな街を救済する景観先導施設といった概念は、このあたりから得られたものではなかったか。この街はその後、高層住宅を生み出すまで、近代建築の遙藍の地としての役割を果たすことになる。



## 沿道性という概念

ところで、アムステルダム集合住宅地をみて歩くと、住戸と道路との関係に対するこだわりの経緯が見て取れる。ベルラーへによる南部地区の多くの住戸は階段室を介してブロックごとに積層するタイプだが、なかには三、四階から細い階段で直接玄関に降りてくる家がありある。ちょうど胎児の臍の緒のように道路に接しているから六軒、八軒といった住戸の玄関が地上に集中する。伝統的な街路の重みを尊重し、道路に接することが都市建築にとつては命に近いものだという観念が、長い歴史のなかで育まれてきたのだろう。接道に対する価値観が、わが国とはまるで異なっている。

ここから、近代建築が提唱する自由な配置に至る経緯をみてみると面白い。中庭を公共化し、空中歩廊でこの掟を最初に破ったのが、ブリックマンによるロッテルダムのスパンゲン集合住宅で、公共空間化の波は一〇年間ほどでみるみる進行し、平行配置や高層では、住戸と道路との関係は宅地内の細道を介して結びつく、いわゆる団地形式がとられるようになる。さらに道路とは点でしか接していないという自由な形式が登場するのは二六、七年頃になるのだが、これには二六年のマルト・スタムによる次のような「開放型都市」の構想がある。「交通量の以前にもまして激しい増加は、交通網の組織化を建築的な態度から自由にならねばならない。囲われた空間としての都市の構想はそのひとつに他ならず、それを開いた都市に置き換えねばならない」(G A ドキュメント『世界の建築』)と。街区から全く自由な、風車型と呼ばれるパウハウスの校舎が竣工したのはそれからまもなくである。

以来、近代建築は街区と建築を別もののできる形式として進行した。コルビュジエの前後のプロジェクトを比較してみるとよく解る。この近代建築の配置形式の経緯について、私はマルト・スタム論を書いた矢代真己さんを近江栄先生に紹介頂いて調べているが、未だに釈然としない節がある。

幕張の住宅地はマンション建築である。私が沿道性にこだわるのは、これ

らの住宅の個々が財産であり、ならば沿道あるいは接道は、その権利に通ずるものだという観念があるからだ。今日、多くの団地は、公共性の名のもとに道路から離れ、宅地内道路をたどり、さらに空中歩廊を横滑りしてわが家にたどり着くのが当たり前である。それでも私権に不都合が生じている訳ではない。しかしこれを建て替えるという場面ではどうなるか、通りに面した一部の建て替えでは済まなくなる。オール・オワ・ナッシングの果てしない議論の末の同意で、果たしてサステイナブルな配置形式といえるのかどうか。

ともかく空中高くに店があったり、高層の飲み屋ビルなどがあるのは、わが国特有のものであることだけは確かである。さらにわが国に街区という概念が希薄であることは、近代建築の唱導とも合致し、何でもありでこの上ない好都合であるが、反面、今日の都市景観の混乱は、街区と建築に対する作法の欠如をそのまま投影していると言っている。

この遠因は、わが国の都市の大半が街区型ではなく、周辺に大きくマージナルな空間をもつ農村の宅地ユニット、いわゆる屋敷型から出発したことに由来している。アジア特有の空間ともいうべきか。この落差の認識が、当時、関東大震災後の復興事業が大々的に展開していたのとは裏腹に、わが国の建築家を非都市的なるものに向かわせたのではあるまいか。数少ない都市型建築といえる同潤会アパートが官の力で竣工するのもこの頃である。

## まればびとの起用

さて、肝心の「異文化との葛藤」であるが、幕張の計画が軌道に乗り始めた頃、外国人建築家を要請し、質だけでなく、話題性を呼び込むべきであるという話が出た。

事業グループ各社ともこれに対応することになるのだが、対象はマンション事業である。ご承知のようにマンション事業はマーケットあつての建築であつて、消費者の好みの動向は事業者によってこと細かに分析されている。

またこの種の事業は、販売後のメンテナンスの責任を建築家に負わせるのは無理だという理由から、設計施工方式が一般化している。仮に建築家に依頼するという場面でも、早い時期に施工業者が併走しながらの設計になる。そんな場面に、言葉もあやしげな会話をしていたのでは機動力がままならない。そこで外国人建築家といっても、外国の大手設計事務所がいいとか、建築家に依頼するにしてもファサードだけではどうか、などという話になる。オランダの集合住宅にもそんな話が残っているというから、これも一つの方法かもしれない。しかしこれでは建築にならない。

すったもんだの末、私たちのグループは、幕張ベイタウン『パティオス一一番街』の設計に、事業者の理解によつて堂々と外国人建築家を要請することになった。私がステイブ・ホールを推薦できたのは、ネクサスの集合住宅を拝見してのことだ。彼の建築は近代建築の特質を最もよく体現し、かつデリケートに発展させているという直感からである。と同時に、私の側にもひとつの目論みがあった。同じことを言っても、外国人建築家なら通り易いのではないだろうか、われわれにはできないことが、外国人建築家なら可能ではないか、という点である。つまり「まれ人効果」とでも言うべきか、わが国の合議集団は、トリックスターの出現によつて、それまでの日常的な膠着状態がにわか動き出すのだ。

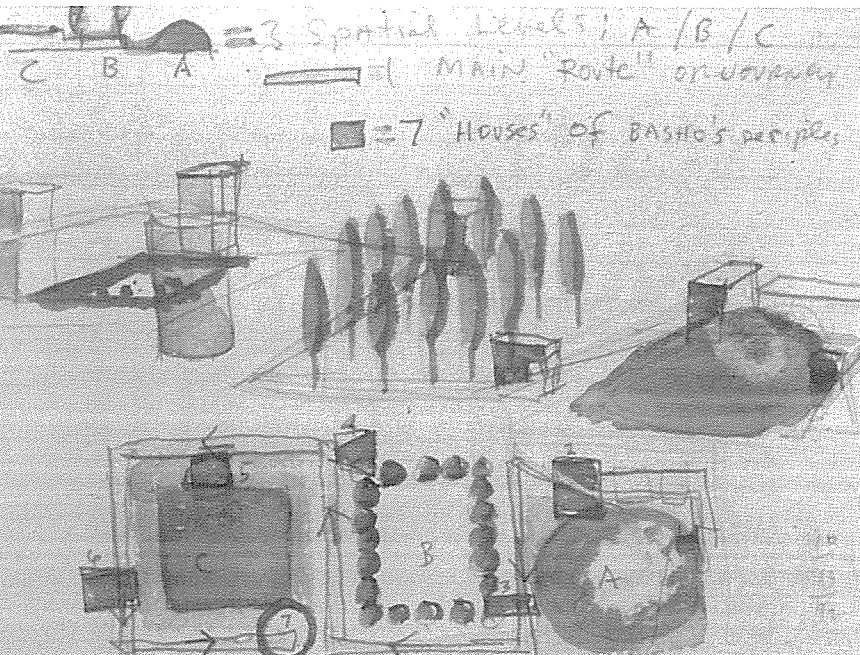
そんな効果を期待して、私はわが意を吹き込んでおくべく、ニューヨークに飛んだ。ひとつは、わが国の集合住宅には堅牢観がまるでなく、容積の緩和という理由もあってべらべらのテラスが景観を支配していることに対する憤慨を解消したいこと。したがって、線ではなく壁でつくられた建築でありたいこと。この街には「ガイドライン」があり、これを担保に事業者が参画していること。建築は沿道に沿って建てられるべく、したがって閉鎖形式であること。街全体には「景観先導施設」という概念があつて、街角やら住棟の随所に、ランドマークというよりも均質な景観を異質していく装置のようなものが要請されていること、などなど。

考えてみれば、軽く薄くひらひらとした今の建築の流行とはずいぶん逆行

したことを話してみた。ところが、意外にも、彼もそれなりの部分で同意するのである。厄介な「ガイドライン」も諸外国ではよくある話で、ネクサスのケースとの違いについても触れ、ともかく配置計画という根本からの依頼になった。

以来、配置が定着するまでの二〜三か月、われわれも一緒になって、日照の条件やら何やらで、相当数の配置案が、地球の裏表で昼夜の間断なく検討されてきた。しかし、彼の関心がそこにあつたのではないことは言うまでもない。のちに、敷地を視察して帰りの飛行機のなかで構想は出来ていたのだということを聞いたが、巧妙な戦略が組み立てられていたのだ。

ドローイング提供：ステイブ・ホール・アーキテクト



## ステイブーン・ホールの日本

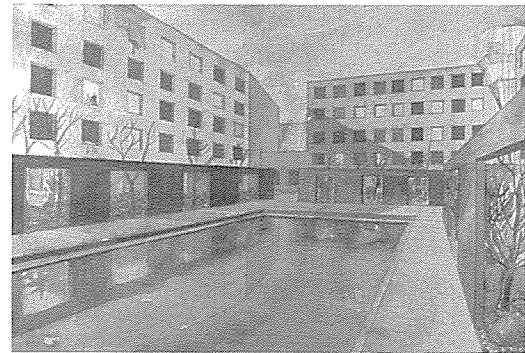
ハドソンストリート沿いにある天井の高いロフト風の彼の事務所は、実に国際色豊かである。大学の教師ということもあって、選りすぐりの若者が集まってくる。聞くところによると、海外のプロジェクトは母国のスタッフと必ず一緒にやるという。もちろん幕張の設計でも数人の俊英にお世話になっている。とりわけイェール大学での留学を終えたばかりの田中友章さんなくしては、これだけ密な情報を交換出来たかどうか。そんなわけだから、言葉の不自由もなく、「異文化との葛藤」と言ったところで、どこまでがといった憶測も拭えない。

加えてプロジェクトのモチーフが「奥の細道」であったことなどについてはすでに『道行きの建築』（建築文化九六年六月号）で書いたので、触れるとすればエピソードになる。

一つは彼が水彩画に巧みなことだ。それも淡彩でかすれや滲みのある水墨画に近い絵をかく。アトリエを案内してもらったときの筆洗を見て、ひどく共通の美観があるのに気がついた。彼は幼少の頃の戦後間もなく、父親の仕事で家族とともに東北地方を訪れたことがあり、その時同行した日本人が、たいへん日本の文化に明るい人であったことや、日本でのおもちやが雛人形であったり、草木染の和服や日和下駄というのも記憶に残る風物であることなどなど、そのときは外交辞令のように聞いて帰ったが、数か月後のプレゼンテーションは鮮やかであった。なんと「奥の細道」を下敷きにした「旅」の仕掛けが込められていたのだ。

「奥の細道」は発句に詞書を添えて論説を導入部風におく構成でできている。それがまた和漢の故事典籍をもつわけだから、われわれ日本人が読むにも該博な知識を必要とする。それをどれだけ理解していたかはともかく、ここで彼は「奥の細道」を下敷きにして、「東北地方を体験している」ことと景観先導施設といった「異化形成の手法」を掛けあわせているのである。

まずは住棟は住棟で三・一mピッチのモジュールにきっちり開口部を穿



ステイブーン・ホール  
一九四七年、ワシントン（アメリカ）生まれ。  
ステイブーン・ホール・アーキテクト（ニューヨーク）主宰、コロンビア大学教授。

幕張ベータタウン「パティオス一番街」は、  
ステイブーン・ホール・アーキテクト、曾根  
幸一・環境設計研究所、KAJIMA DESIGN  
SIGNSの共同設計により、一九九六年に竣工。

ち連続させたものを「地」にサイレントハウスとし、この住棟を巡って「旅」の景色を封じ込めようとする仕掛けを「図」にアクションハウスとして対比したのだ。発句と詞書のような関係がこの中庭を支配することになる。日本人の発想よりずっと日本的なのだ。最初それらは「哲学者の家」とか「釣り人の家」とか「生花の家」だったりした。お茶も生花もと間口を広げたのはよく解る。フォーリーとしての家の点在によって壁に描かれる影、水面から反射する光のモアレなど、無表情な住棟が一挙に染められる影、水西側には宙ぶりの家があったが、これだけはと事業者に見送られてしまった。設計が収束に向かうころ、これらは回遊式庭園の見立てや八景のように六つの詞「反陽」「幻彩」「水映」「青影」「落柿」「無空」などに変わっている。この辺りも彼の現象論的でもいえないような姿勢が冴えている。

アクションハウスのなかには、フレキシブルな空間を獲得するための鍵型の間仕切りなど興味を引く納まりも見えてほしいが、事業者との折衝では、私も随伴して壁の「目地」や「テクスチャ」や「打放し」でずいぶん永い論争をしてきた。しかしこれはわれわれの代弁に近い。侘びて澄みたる素材観や情動を抑制したような構成は、マーケットと呼ばれる消費者と、われわれ建築家の国を問わない共通の好みとの落差のほうだが、はるかに離れているのである。

（そねこういち／建築家、芝浦工業大学環境システム学科教授）

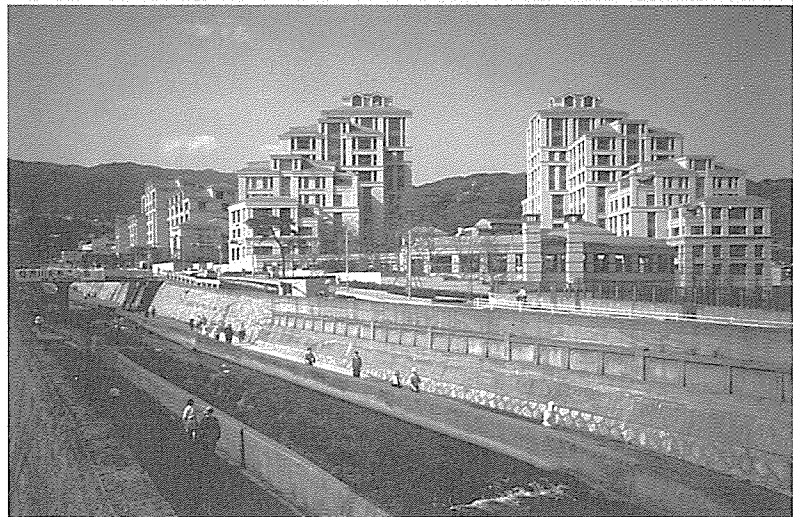
すまいのテクノロジ―

# 海外建築家との協働 で得たものと問題点

住吉の集合住宅の設計を通して

## 三沢 亮一

前号の特集である《二〇世紀から二一世紀へ贈る言葉》を読んで、戦後五〇年、社会の流れの中で固有の居住文化が失ったものは大きかったことを痛感させられた。と同時に、戦後の新たな居住文化にいかに対応していったかに、たいへん興味をおぼえた。近年、人口の高密化や地球環境の観点から住まいの形態がますます集合住宅に移行すると思われるが、一方で、居住面積の拡大



住吉の集合住宅 正面全景(写真/Timothy Hursley)。

今回海外の設計者との協働について私の経験を述べることで、そのような機会に少しでも役に立てば幸いである。

### 住吉の集合住宅計画

さて、私はこの十年余りのあいだ、複数の外国人建築家とさまざまな形で共同設計をする機会に恵まれたが、多くのプロジェクトは民間ディベロッパーによる比較的グレードの高い集合住宅であった。そのなかで特に基本・実施設計から監理までを経験した住吉のプロジェクトを選んで、その内容に触れてみたい。

計画地は神戸のJ R住吉駅近接の約一万坪のなだらかな斜面地。計画総戸数約二九〇戸の共同住宅プロジェクトである。

外国側の設計者はM・R・Y(米国)であった。同事務所は米国内外を含め幅広く活躍中で、チャールズ・ムーア氏と、パートナーでありこのプロジェクトの責任者であったバズ・ユードル氏、ジョン・ルーブル氏を中心とする設計事務所である。学校建築や教会、住宅などに数々の実績があり、カリフォルニアの香りのするクラシックなデザインが特徴である。なおムーア氏は四年ほど前に亡くなって、現在ユードル氏とルーブル氏の共同経営の形態になっている。

本プロジェクトの共同設計の形態は、主にM・

や健康指向が望まれ、いっそう快適な生活空間の創造に期待が高まりつつある。

集合住宅で生まれ育った世代が形成された今、集合住宅の生活に歴史的な積み重ねのある海外の視点を、改めて参考にしてもよい時期になったのではないだろうかと思う。そのような意味からも、これから、国内の集合住宅の設計に、海外の設計者が参加する機会が増えていくのではないだろうか。



左からJ・ルーブル氏、B・ユータール氏、C・ムーア氏  
(写真/Rob Lang)。

R・Y側が基本コン  
セプトおよびエレベ  
ーションとランドス  
ケープを担当し、日  
本側が、平面計画全  
般とコーディネーシ  
ョンを行なった。当  
時私は建設会社の設  
計部に属していたが、  
このプロジェクトに  
はディベロップマー  
の設計室の一員として参加した。

彼らの集合住宅の設計に対する姿勢について特  
徴をあげるとすれば、

- A 街並みへの配慮
  - B 地勢についての理解
  - C ランドスケープデザインの重視
  - D 豊富なエレベーションのボキャブラリー
  - E 地域性の表現へのこだわり
  - F 本物にこだわる材料の選択
- などがあげられる。

彼らが住宅に対して持っている理念は、住宅と  
は人が生活を豊かにエンジョイするための場であ  
るということであろう。そのため設計の方針は、  
住宅はあくまでも住宅らしく、これをどこに求め、  
いかに表現するかということであり、集合住宅で  
あっても、全く同じ考え方をとっている。

#### A 街並みへの配慮

日本では、建築側からの配慮はスポット的には  
見られるが、住戸の性能を犠牲にしてまで景観を  
優先することはたいへん難しい。都市計画面から  
のわが国における住宅の街並み景観は、歴史的な  
低層街区には見られるが、中高層住宅の街並み景  
観はごく最近までほとんど存在していないといえ  
る。また中高層住宅と低層住宅の接する部分にも、  
調和のとれた美しい移り変わりの表現は極めてま  
れである。

どちらかというど街並みに対して少しシニカル  
な目を持つ傾向のあった我々に対し、彼らの真摯  
に計画地やその周辺を見る目に接し、初心に帰ら  
なければいけないことを、再認識した。

#### B 地勢についての理解

例えば山あいには建つ建物の構えや川べりに建つ  
構えが必要に応じて変化するように、その土地の  
持つ特性に応じて建物の形が変化することが必然  
だと語る。彼らは建築のプレゼンテーションを行  
なう前に、地勢について

- 1 Concepts
- 2 Landmarks
- 3 Types of Spaces
- 4 Landscape

の四つのポイントからの説明を行なった。その土  
地がどのような意味を持つのか、それが、建築に  
どのような必然を生み出すのか、都市軸と自然軸

の関わりをなかで語りたかったのだと思う。

我々が本来持っていた土地に対する優しさを、  
また少し復活させなければならぬと思う。そこ  
で暮らすであろう一人ひとりの視点や小さな自然  
の意味合い、気候に対する具体的な表現等が、そ  
の土地での生活の楽しさを、さらに豊かに演出で  
きるのではないかと考えた。

#### C ランドスケープデザインの重視

ランドスケープデザイナーが、アーキテクトと  
同等に、コンセプトはもちろん新鮮なアイデアを  
提案した。一方、住空間は建築だけで成り立って  
いるのでは無いことを、七つの建物に対し七つの  
ガーデンと、さらにこれらに四季の彩りの変化を  
加えて表現していた。

住宅だからいかに生活を豊かにエンジョイする  
かが目的であり、建築空間と外部空間といった境  
界は無く、特にパーゴラやテラスなどのどちらら  
も属する空間を大事にしていると思われた。

日本では住宅建築に、やすらぎや、くつろぎよ  
り、研ぎ澄まされた建築空間や非日常性を構築す  
ることこそが大切だという考えもあるが、日常が  
精神的にも物質的にも豊かで新鮮ならば、何も肩  
に力を入れることはないということかもしれない。

#### D 豊富なエレベーションのボキャブラリー

集合住宅の歴史がある欧米に比べ、わが国はま  
だまだ経験が浅い。このため我々は、建物におけ





住吉の集合住宅 エントランスまわり(写真/Timothy Hursley)。

るさまざまな部位の表現が、意味のあるディテールという範囲にとどまらず、さまざまな生活シーンの具体的表現であるということをし、理解してもよいと思う。住まい手が集まる共用部分の豊かさや天井の高い吹抜けのあるタワー状の住宅、眺望性に優れたドーマー、寒い日の太陽の日差しを受けるウインターガーデン等、そこでの暮らしの楽しさを表現しなくてはならない。集合住宅は戸建てと比べマインナス面を強調されるが、そのような内部空間の楽しさをさらに外に向かっていかに表現するかが、集合住宅設計の本質の一つなのかもしれない。

#### E 地域性の表現へのこだわり

他のプロジェクトで協働したフランチェスコ・ベネチア氏(イタリア)、パノス・クレモス氏(ギリシャ)の場合は、そのデザインのおかげで民族性を感じさせる建築的表現が巧みである。多民族の集まるヨーロッパでは、アイデンティティを表現することは生きてゆくための知恵なのかもしれない。一方、ムーア氏のアメリカ西海岸の地域性を表すデザインの特徴については先ほど触れたが、これは歴史の違いや多民族の集まったアメリカにおける表現の方法なのだろうか。共通なのは自己のアイデンティティを表現するために相手のそれを尊重することである。そんな彼らを見ると、我々は果たして同じアジアの建築的文化を理解しているのだろうかと考えてしまう。ようやくアジアを偏見なしで受け入れられるようになった我々は、今、近隣の国々からの目を通して日本の居住文化をとらえることが必要かもしれない。和の表現とともに、個性・地域性といったものをどう表現するかが今後の課題であると感じた。

#### F 本物にこだわる材料の選択

あれほど本物の質感にこだわっていた日本だが、今や住宅のインテリアに木の香りすら無くなりつつある。本プロジェクトの内装に木がふんだんに使われることを、M・R・Y側が高く評価する姿を見て、また、打ち合わせの機会に多くの米国の建物を見るにつけ、私の先入観とは違い、彼らが

本物を愛する文化をもっていると感じた。  
文化の厚みとは背景に自然の厚みを持たなくては  
いけないことを率直に感じた。

## 共同作業の問題点

次に、実際に共同の設計の過程を振り返って作  
業上の問題点について述べたい。

### ○だれが何を受け持つのか

共同設計では、だれが何を受け持つのかを明らか  
にすることが一番大切である。国内でも、なか  
なかうまくいかない、まして外国人である。とに  
かくルールを決めること。そして未確定な部分  
があることや、これから起きるであろう変更を理由  
に決定を後延ばしにすることは、避けなければな  
らない。

### ○何を期待するか

民間の集合住宅におけるデイベロッパ側側の価  
値観は明快である。それは販売上のメリットに繋  
がることであり、このあたりが通常の建築と大き  
く異なる点である。

この価値観からすれば、明快なマーケティング  
からのコンセプトを伝えることが大切で、デザイ  
ンコンセプトとどのように共存できるかがポイン  
トである。

建築家がこれだけ複雑な状況下で、マーケティ

ング情報を把握することは易しいことではなく、  
ましてデザインが全てに優先すると考える外国人  
建築家に、他の情報も含め理解してもらうことは  
容易ではない。デイベロッパ側も集合住宅の特  
殊性をよく理解し、依頼する側のマーケティング  
コンセプトを極力明快にし、何を依頼すべきかを  
決定したい。

### ○内と外

今回のような協働で最も問題になりそうなケー  
スは 内部プランとエレベーションの整合性であ  
ろう。住戸のプランはデイベロッパ側の最も重  
要な部分であり、一方、エレベーションは設計者  
として最も力を注ぐ部分である。他のプロジェク  
トでも多くの場面でこれはたいへん苦勞されてい  
るようであるが、一番の解決は、解決のための徹  
底的な検討と最終判断者の明快性であろう。特に  
問題なのは日本人特有の遠慮で、これが建物の不  
明解さにつながる。

### ○評価

プレゼンテーションのためにはるる来日した  
建築家の、ドロ잉の素晴らしさに感動しな  
がら、一方で、これでは施主側の意向に沿えずこ  
れは困った、というケースはよくある。

一緒に働いた仲間として、そのデザインを押し  
たい気持ちと、これはまずいという理性が交錯す  
るのである。これには何が要求に沿っていないの

か明確に評価を表現すべきであり、プロである彼  
らは必ずや正解を提案してくれるであろう。

## まとめ

共同住宅の設計で海外の建築家が参加すること  
の意味はどの部分にあるのだろうか。元来、我々  
の住空間の考え方のひとつとして、象徴性や儀式  
空間をよしとし、国内の建築家の設計する住空間  
も背景にこのような思想があったのではないか。  
戦後五〇年、家族の構成をはじめ生活文化で変  
化したものはこのあたりにあるのかもしれない。一  
方さまざまな理由によりライフスタイルはより生  
活そのものを直接的に楽しむ方向に変化している。  
まして共同住宅の価値基準が規範を失いつつある  
と思うのは私だけだろうか。  
生活の楽しさの演出に巧みな部分や、長い集合  
住宅の生活経験があることに、彼らの参加の意味  
の一つがあるかもしれない。

昨年、関係者が家族同伴で久しぶりにサンタ・  
モニカに集い、親睦会を開いた。入れ替わった担  
当者も顔を見せ、お互いに同じ会社の人間より頻  
繁に顔を合わせ議論した時期もあったことがなつ  
かしく思えた。

(みさわ・りょういち/建築家、ミサワアソシエイツ代表)

私のすまいるん

特集●フォリナーズによる住宅設計―異文化との葛藤

## 異文化同士、異文化に暮らす

香港―仮住まい、ヴァーチャルスペース、グローバル経済の中で

松田 直則



一九六〇年代の初めころの香港。手前左端の建物は中国銀行旧本館、その後旧香港上海銀行本社屋の頂部がわずかに見える。中央手前が、植民地政府を象徴する建物、旧最高裁判所。その右上の建物がマンダリンホテル。欧米人社会はここを中心にし、中国人たちの商住区は写真の上方、低層建物が密集しているところに限られていた。

### 私のこと

香港には一九八三年の正月にきた。前年の九月、当時の英国の首相サッチャーと、中国の主席鄧小平が九七年以降の香港問題をめぐって正面衝突をし、香港は大騒ぎをしている最中だった。香港を離れる外国籍事務所が急増し、不動産の価格は急落をはじめた。多くの香港在住の中国人も真剣に海外移住を考え出していた時であった。そうした動きに逆行するかのようには、ロンドンの設計事務所から香港の建設現場へ、数年前に動き出してしまっていた香港上海銀行本社ビル建設の設計監理をするために、設計チームの一員として、つまり本国から派遣されたエキスパートリエイトとして、植民地香港での仮住まいを始めた。

一九八五年七月、本社ビルが竣工した後も、職場を変えて香港に居続けたのは、僅か二年半のうちには大きく変わり出した都市のダイナミズムに魅了されたせいである。この植民地の自由さと予見できないさまざまな可能性に満ちた投機性に惑わ

されたせいでもある。そうこうしているうちに一五年が過ぎた。だが今も私は仮住まいをしている。いずれは他所へ、という思いが常にあって、香港にあと何年という計画もないまま、だけれどもあまりの居心地の良さについに長居をってしまった。しかし香港は仮住まい。

### 香港は仮住まい

私の香港の住まいは借りものだが、これがたとえ買ったフラットであったとしても、この仮住まい性は変わらないのではないかと思う。香港の人たちがフラットを買うのは、自宅とし所有することよりもむしろ、投機性を求めているからだといわれる。香港の新興中産階級の人たちは、その時の不動産市場の具合をみて、二―三年で条件のよいところに住まいを買い換えるそう。自分が住む家に商品価値が付くのだから、できるだけキズを付けず、大事に使用する気持ちになるのかも知れない。いつかは自分の好き勝手にできる家を持ちたいという願望があっても、それが香港であるとは限らない。今日の中産階級の主人たちは、かつて海外に安住の地を求めて香港に仮住まいをし、そのうちに初心の夢を子供に託さなくてはならなかった世代を引き継ぐ人たちであるからだ。

たとえ香港の住まいが持ち家であったとしても、また香港の暮らしがどんなに長くなっても、「異郷」が「故郷」に変わることはないだろう。だが異郷に長くいれば、自国の文化への見方にズ

レが生じるものだ。それは仮住まいをしている異郷の文化との差異を縮めようとする無意識の願望なのかも知れない。異郷にあつては故郷の文化が思いがけない形に切り取られた場面に遭遇することもある。慣れ親しんでよく知っているはずの自国の習慣や産物に対する異郷の人びとの反応が意外であり、新鮮であつたりもする。これは旅行者にも共通の感覚だと思ふが、旅の演劇性や祝祭性は違った、日常性の中での異質な文化を、仮住まいの生活者は感じるものだ。

「異文化同士、異文化に暮らす」という題は、私が考えたのではなく、初めから与えられた命題である。編集者が抱いていた期待は、異郷での暮らしのなかで遭遇する異質な文化の日常体験記であつたと思ふ。だがこの題はまた、香港という都市の生い立ちを考えるのにも非常に適切な題名でもある。香港に住む大多数の中国移民と、一握りの英国のコロンナイザーたちが各々の自国の文化を個別に伝承しつつ変質させてきた歴史は、まさしく異文化同士の軋轢と共謀の軌跡であるのだから。表題の拡大解釈をするお許しを請うて、香港についての生活意識について、私の思うことを書いてみたい。

## グローバル化へ

香港のコロンナイザーたちは、自分たちの生活空間と中国移民のそれとを明確に区分してきた。今世紀の初めまで、英国人を中心とする西欧の国

々の人びと及びアメリカ人の生活圏に中国文化が入り込むのを許さなかったから、都市空間にもその区別は明確に現われ、それはほぼ一世紀の間、変わることがなかった。しかし八〇年代後半からの建設ブームによって、その領域性は今日急速に消失しつつある。この変化は、香港がコロンニアル的な経済活動をグローバル化してきたタイミングとも符合している。七〇年代の後半から香港の教育を受けた中産階級が成熟を始め、香港中国人の知的労働力の層は厚くなった。強力な華僑資本を背景にコロンニアル政府を動かせる中国人の財閥の数も増えた。フリーポートと安い税金、不緩衝主義の政府といった好条件が、多国籍の企業と金融業を香港に呼び寄せ、グローバルな経済活動の拠点として香港が世界の注目を集めるようになったのは、一九八〇年代の中葉からである。

## 無国籍ということ

経済活動におけるグローバル化は、香港に住んでいる九八%の中国人の生活意識にも及んでいる。香港中国人のグローバル的な要素はコロンニアルという風土の中で、常識を越えた高密度な住環境の中で、小さな島と半島の先端という限られた都市空間の中で培養されてきたと、私は考えている。

香港は国ではない。一九九七年七月に香港が中国の特別行政区となるにあたって、香港在住の中国人の国籍が大問題になったことがある。彼らの古い世代は、殆どが国を捨てて移住してきた避難

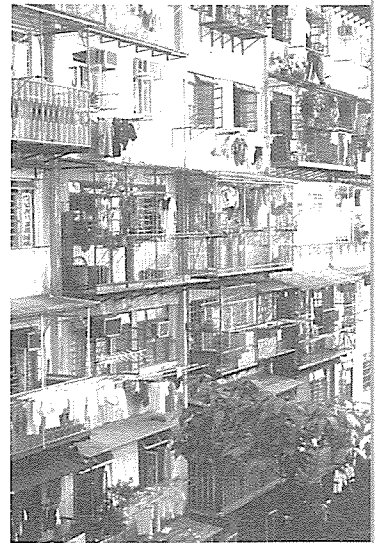
民だ。香港で生まれ育った新世代も八〇年代の終りには香港中国人人口の六〇%を超えた。彼らには国籍がなかった。当時彼らが海外へ旅行する時には、英国の保証する植民地政府の旅券を持つることになっていたが、これと英国の市民権とは無関係だった。一九八九年六月の天安門事件によるショックは深刻で、海外へ居住権を求め、香港をいつでも離れられるよう、金策の立てられる香港中国人の誰もが懸命の努力をした。カナダに、あるいはオーストラリアに住宅を買い、自分の妻を住まわせて市民権を獲得させ、しかし自分は香港に滞り住宅ローンの返済と妻と子供たちへの仕送り続けるという中産階級のサラリーマンが殆どだった。今にしてみれば、そんなに慌てることもなかったと思ふ人たちが多いと思ふが、その当時は大変な問題だった。しかし反面、こうした経験が今日多くの香港人のグローバル意識を促進したのではないだろうか。

香港が国でないことはまた、さまざまな外国籍を持つビジネスマンを受け入れるのに好条件となっている。多国籍のビジネスマンとその家族が香港の仮の住人となって、異国の小さな文化圏を形成している。英語はもちろんインド語、フランス語、ドイツ語、日本語の小中学校があり、異国人用の食料品や日用雑貨を売る店舗が、香港島の中心地区に散在している。文化と習慣の異なる多国籍の人間が、圧縮された都市空間の中で共存し、自由に活動できるという風土、また、たくさんの

異国人たちを抵抗なく受け入れられるという文化は、大量の香港在住の中国人が国籍をもたず、自分たちも異国人として同化しているせいであろう。このような視点からも香港人のグローバル意識は育てられているのだと思う。

## とまどう香港人

北京人とか上海人という呼ばれ方と同じ感覚で香港人という言い方が一般的になった。だが本来は「一国二政府」という中国統治形態が唱われた当初のスローガンで「港人治港」といった時の「港人」であり、正確には永久居住権をもっている香港在住中国人のことを指して言っているのだが、この「香港人」というアイデンティティに関する混乱は、香港の特別行政区としての「基本法」をめぐる議論が熱くなっていた八〇年代の終わりに、英国と中国との対話断絶を露呈した。この問題に対し英中両国はそれぞれ独自の見解を主張し、個別の対応策を打ち出したから、香港人は混乱した。かつては国籍を持たないことに対してそれほど深刻に考えなかった香港人が、九七年以降中国の国籍になることへの拒否反応を示したのだとも言われている。そしてその主な理由が、自由に海外へ出られなくなるからだという。これは香港人の殆どが、一五〇年の歴史をもつ都市にもかかわらず、「定住」するという意識を持たないことの表われであり、香港が仮住まいの都市であることを物語っている。



俗名イリーガルファサード。住民が増築したバルコニーはさまざまな用途に使われる。鉄製のフランクや格子は既成品化されていて、住民の好みと目的に合ったものを選ぶことができる。

## 究極の高密度

植民地時代の一世紀半の間に、中国大陸からの入境者は繰り返し襲いかかる津波のように香港島と九龍半島の先端に押し寄せてきた。富を求めて、あるいは自由を求めて、大陸からの移住民は仮の住まいを自らの手で定着できる都市につくり変えてきた。当初の植民地政府は彼らの居住地を集中させ境界を定めて小さな地区に押し込めた。だが、中国人の居住地区内での統治は中国人に任せ、彼らへの都市生活の規制をしなかった。際限なく増大する移住民の流入に対しても、同じ政策は大戦前後まで続けられ、その結果、世界に類を見ない高密度都市が出現した。こうしてできた超高密度な住環境がどのように悲惨で、人間性を蹂躪したのかという文化的な規範は育つことなく、いずれは別のところへとという仮住まい性が、今日を精一杯に生きて、明日へ希望を託す楽天性を支えている。この社会ではちょっとしたきっかけや好運で、

裸一貫の者が商売の成功者になれる。自ら選んで飛び込んだ異郷の生活は、自分自身で切り拓かなくてはならない。

仮住まいが長びけば、明日よりは今日の暮らしに目を向け、しばらくの定住の準備をする。どうしようもない狭さに外壁の一部を打ち破り板床を路上の空間に迫り出して、プライベートなスペースを僅かでも拡大する。陸屋根の屋上があれば部屋を継ぎ足して貸し部屋をつくる。鉄格子で囲ったバルコニーには鉢植の木でジャングルをつくり、目と鼻の先の隣人の視線をそらす目隠しにする。

十数階建てのコンクリートの建物が穴だらけになって、そこに緑の垂直庭園が出現することになった。このすばらしい住民の自主管理による都市の垂直庭園は、強い陽光を柔らげ、鳥かごの小鳥がさえずり、高密度住空間独特の環境を創造した。

似たような現象が中国の本土にもあるらしい。華僑が住む東南アジアの都市の多くにも見られるという。中国人の故郷の文化が形を変えて伝承している証しであろう。高密度に集まって住むという文化も、故郷の中国人が既にもっていたから、高密度の究極ともいえる香港での住環境に耐えることができたのかも知れない。しかしそこには、移住民特有な仮住まい意識があり、定住化していく過程においても、それは精神的な支えであるに違いない。加えて他力本願ではなくて、自力による個人の生活力が自分の環境を自分の手で変えていくエネルギーになるのであろう。

## 街区はイエ

圧縮され最小限になったプライベートな空間は、極端な場合、ベッド空間だけになる。香港の深水埗という地区は、世界で最も密度が高い所とされているが、ここには、「籠屋居民」と呼ばれる人たちの住まいが集まっている。ベッド分の広さを鉄格子で囲って、三段に重ねたユニットが僅かな共用空間を残して十数階の建物に詰め込まれたものだ。これは私の想像だが、かつて一九世紀後半に盛んであった苦力貿易という、中国人労働力が商品として扱われていた時代に、その商品を閉じ込める檻であったものが、ずっと後になってここに働きに来た苦力たちが自分の所有するベッドスペースを確保するための柵に転じたものなのかもしれない。原型がなくて、これほどまでに人間ひとりの生活空間を圧縮できるものだろうか、これほどまでにたくさんの人間をひとつの建物に詰め込めるものだろうかと思うからだ。

必然的にこの籠屋居民の生活空間は廊下へ、階段室へとみ出し、街路へと拡張する。食事は街路

籠屋居民の住まい。撮影／呉文正、一九九三年。



の露店で、街路の縁石は彼らのイスになる。公共の便所と浴室も街路の脇にある。街角にあるポルノの映画館は、巨大なテレビのある冷房の効いたせいたくな居間である。こうして街区の一角が籠屋居民たちの大きな「イエ」になっていた。信じられないほど小さな籠の中が物理的な彼らの居住空間であるが、彼らにとっては街区全体が意識の上での自分のイエだったのである。全く状況は異なるが、日本の茶室のことを私は連想した。

## ハイパー・スペース

狭い都市空間の中でひしめき合って生活する大多数の香港人たちが、経済的には大分楽に暮らせるようになった今日でも、ある程度の狭さには我慢をして生活をしている。彼らは冷房の効いたショッピングセンターで時間をつぶし、映画館で時間を楽しみ、大空間のレストランで食事をする。週末には近くの島々で遊び、年に一度は海外旅行もする。物理的な生活空間の狭さを意識の上で拡大する術を、香港人の多くは体得してきたのではないだろうか。

街全体が香港人ひとりひとりの生活空間と連続し、親密な場所となっているのは、街の限られた狭さと密度の高さとも関係がありそうだ。街を歩いているだけでも、レストランに食事に行っても、よく知人や友人に出会う。しばらくその場で立ち話をしたり、一緒に同じテーブルに座ることもある。ショッピングセンターのウィンドウには、いつか

手に入れようと思っっているブランド品が、かつて旅行したことのある都市の店と同じように陳列されている。殆ど世界中のブランド品が本店をつくりにしつらえられた店舗で売られているから、香港のショッピングセンターはヴァーチャルな海外旅行をさせてくれる。

香港の住民は銀行を日常的に利用する。通貨交換レートの変動や、各国の通貨の利息の上下についての情報に敏感に反応する。これがポケベルや携帯電話を流行らせた原因になったのかも知れない。電話を通じて預金してある通貨を他の通貨へ移すことも、株の売買の指示もできる。通貨や株の価格変動への関心は、国際情報をも身近に感じさせる。香港人の富への執着は、彼らの生活力の旺盛さと同義語である。このことも香港人のグローバル意識を高めているのだと思う。

\*

「私のすまいろん」は、仮住まい論からヴァーチャルスペースへ、さらにはグローバル経済へと、とりとめのないものになってしまった。それは私たちが、香港という異国に暮らし、英国と中国という異国文化の接触を考えさせられるはめになってしまったからだ。自分で仕掛けた畏だが、もとはと言えば、こんな大それた命題をくれた編集者が悪い。とにかく私はここで考えた幾つかの仮説を証明するために、多少時間をかけても研究をすすめることにする。片山先生、ありがとう。

(まつだ・なおのり／香港大学建築学科講師、在香港



# 「地」にどのような「図」を描くか

〈テーマ趣旨〉

これからの住まいづくりには、社会と時代の状況を受けてさまざまな期待がかけられている。その一つに羅針盤を失ってしまった都市住宅の理念という課題がある。生活者の立場から、住宅生産の立場から、デザイン文化の立場からなど、さまざまな立場が考えられるが、ここでは大局的かつ実践的に、住宅市街地という「地」にどのような「図」を描くかというスタンスで、これからの住まいづくりの理念を探りたい。すなわち、これからの時代に、住宅市街地という「地」はどうあったらよいか、そしてそのビジョンの上に、どのようなハウジング計画があったらよいかの「図」を提案して描くという立場である。論点としては、

①社会経済状況の変化、生活の変化、家族関係の変化、ライフスタイルの根本的な変化に対応して、個々の住宅、その全体としてハウジングの計画は、どのように変化していくのか、いくべきか  
②近代化の中で、住宅地の近隣社会が徐々に崩壊しつつあるが、近隣コミュニティの未来をどう考え、住宅・住宅地計画の中で、どう受け止めるか。

③住宅数が世帯数を上回り、むしろ今後の住宅の課題がストック改良の問題といわれるが、これを住環境、とくに一般住宅地の住環境改善に結び付けることができるとしたら、どのような住宅市街地のイメージ(地)にどのような住宅(図)を描けるのか、描くべきか。

④住宅や住宅地の計画は、本来居住者自身の主体的な計画が前提であると考えられるが、居住者参加はどのような計画をもたらすのか、また技術者はどのようなコラボレーションを行なうのか。などが挙げられる。これらは、これからの社会経済状況の捉え方、住宅市街地のイメージ、住宅のイメージが相互に関連しており、総合的に捉えていかなければならない。

シンポジウムは、第一部「基調講演」、第二部「パネルディスカッション(講演および討論)」の形で行なわれましたが、本記事では第一部の要旨と第二部の概要を掲載しています。第一部「基調講演」はこのシンポジウムへ向けての委託論文を基調にしたものであり、その全文は研究年報24号(一九九八年三月刊)および本シンポジウム資料「地」にどのような「図」を描くか」に掲載されています。(参照ください。)

## 第二部 パネルディスカッション

建築設計、都市設計、まちづくり、計画主体、それぞれの立場から四先生に講演いただき、引き続き、第一部・基調講演の三者を加えて討論を行いました。本記事はその概要を収録したものです。

文責||編集部

講演1

### 一般市街地の住まいづくり

—— 建築家の立場から

早川 邦彦



私は設計事務所を設立以来、七つの集合住宅を設計しています。

私は集合住宅を設計するにあたり、各住戸はもちろん大切ですが、むしろ各住戸が集合するときの共有領域に非常に興味があり、それを中心に組み立ててきました。その七つの集合住宅についてお話ししたいと思います。

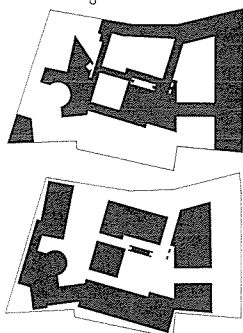
①一九八五年、私たちの事務所の初めての集合住宅「アトリウム」。非常に不整形な敷地で、唯一、四mの通りに面しています。

通常、集合住宅は住戸が「図」、住戸によって切り残された部分が「地」にあたります。

いままでは「図」のほうが重要で、「地」のほうが「図」を際立たせていくという関係

が多かったが、ここでは逆に、住戸によって切り残された部分(共有領域)を「図」として扱ってみようというところで取り組んだ集合住宅です。

共有領域として中庭をつくったら、住み手の間でコミュニティ意識が発生して、和気あいあいとそこが人びとの交流の場になるのではないかという幻想を抱きがちですが、都市型の集合住宅は、中庭をつくっても、われわれが



アトリウム (1985) 図と地

# 未来へのハウジング計画論

## 第一部 基調講演II

小林重敬

こばやし・しげのり  
横浜国立大学工学部建設学科教授

佐藤 滋

さとう・しげる  
早稲田大学理工学部建築学科教授

服部岑生

はっとり・みねき  
千葉大学工学部デザイン工学科教授

## 第二部 パネルディスカッション

### 講演II

早川邦彦

はやかわ・くにひこ  
榊早川邦彦建築研究室代表

鈴木崇英

すずき・たかひで  
株式会社UG都市建築代表取締役社長

間野 博

まの・ひろし  
広島女子大学生活科学部  
生活環境学科教授

大村芙美雄

おおむら・ふみお  
住宅・都市整備公団東京支社  
都市再開発部長

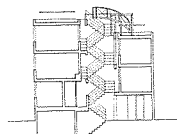
討論II 右記講師による  
司会II 服部岑生



思い描くような人びとの交流は発生しにくいと考えました。だから、そこはながめるだけの場所でもないのではないかと。かなり人工的な、都市的な風景をこのなかでつくりあげてみようという気持ちで設計したものです。

### ② 国立市の住宅地に建つ「ステップス」。

八坪と敷地は非常に狭く、L字型に二面道路に接しています。大きなサクラの木が敷地コーナーにあり、そのサクラの木をなんとかうまく利用できないか、ということが課題でした。ここでは共有領域が垂直に展開するものとして、半層ずつれ合った平行配置された二棟の住棟が向き合っています。シグザグに上がっていく階段によって、コンクリートの殻の中から各住戸の生活の気配がこの共有領域に伝わってくる。半層ずれる屋上も空中に走るブリッジによってつながって、共有領域になっています。

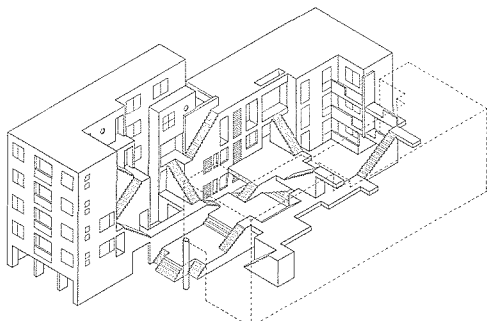


ステップス (1987)

### ③ 「ラビリンス」。

かなり交通量の激しい新青梅街道に面している長方形の敷地、両面が道路に面しているパブリック性を生かし、住み手だけの共有領域ではなく、通り抜けに一般の人でも利用できる共有領域としています。

窓先空地、避難通路、出入口通路、いろいろな法的な規制があり、杉並区に理解していただくのに時間がかかりました。住棟の間隔は、広いところで8mぐらいしかありません。圧迫感をなるべくなくし、奥行き感を出すために重層するという構成をとっています。



ラビリンス (1989)

④ 熊本アートのポリスの一環でわれわれが手掛けた「熊本市宮新地団地A」では、いままでの公営住宅がもっている単調さ「すべてを平等に扱わなくてはいい

## 基調講演1要旨

# 都市計画の仕組みと住宅市街地のあり方

都市計画の構造転換と住宅市街地のあり方の変化

小林 重敬

近代都市計画と住宅市街地



一九世紀に誕生した近代都市計画の仕組みは、当時の産業化をリードする主体として生まれてきた新しい社会階層に新中間階層に、快適な低層低密住宅市街地を郊外部に提供する社会的な役割を担って生まれてきた。しかし二〇世紀末になると、近代都市計画が生まれた要因である「都市化社会」の進行が止まり、人口の増加、市街地の拡大を前提としない「都市型社会」へと変化した。

わが国の住宅市街地を秩序づける仕組みと住宅市街地の現状

市街地を秩序づけるわが国の地域制の仕組みは、欧米の都市計画の仕組みのように住宅市街地像を確立するには十分でなく、郊外部を中心に一定の市街地像を形成する仕組みとしての地区計画や建築協定は、極めて限られた地域に適用されているにすぎない。しかし、日本において「都市化社会」から「都市型社会」への移行は顕著であり、既成市街地の再構築、なかでも都心居住のあり方が問われている。

わが国の今後の住宅市街地形成とその形成主体

わが国の住宅市街地像を議論するとき出される対照的な意見は、一つは土地の有効利用をできるだけ追及すべきであるという意見、他の一つは、市街地の現状をできるだけ維持すべきであるという意見である。多様な既成市街地の状況をもとに利用のあり方を考えなければならぬが、重要なのは、地区レベルで市街地像を生み出す主体である市民・住民の市街地像形成への参加のあり方である。

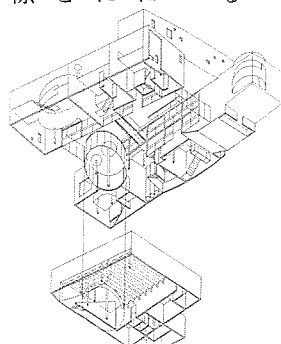
しかしこの点でも、既住民の参加のみでよいのか、都心部に住むことを希望している潜在的住民の参加を図る必要があるのかについて意見が分かれている。両者の意見を連携させる可能性を追求することが必要である。そのような連携のもとに、都心周辺部高密住宅市街地では「アン」と「ガワ」による住宅市街地形成のあり方を計画的な視点にたつて、また一般住宅市街地では開放型住宅市街地形成のあり方を街区レベルの視点で検討すべきである。

ない」という画一性ではなく、多様性をなるべく導入してみたいということを心掛けました。一二m角の中庭をはさむオープンスペース、三〇m角のオープンスペース、さらにより広いオープンスペースと、オープンスペースのスケールもさまざまに異なり、また、敷地の高低差を含めながらオープンスペースのネットワークを構成することによって、多様性をつくりあげていこうというふうに考えたものです。

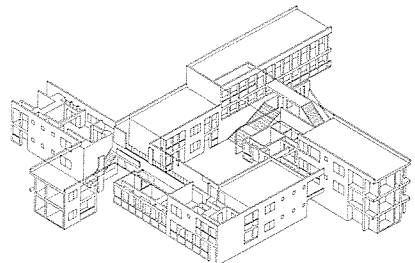
素材としても、水、芝生、硬い面、植栽と多様性を出していこうとしたものです。構内通路、擁壁、地形の変化などを、なるべく残しています。

⑤「用賀フラット」。これは真ん中の地下にホールが入っています。ここでは、住戸に關しても提案性のあることをしてみようということ、三階部分にあるユニットを除いては、全部がメゾネット構成になっています。

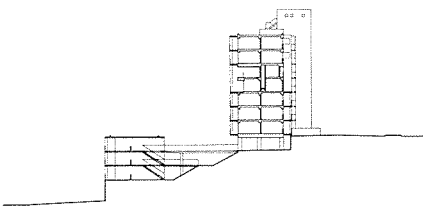
⑥「下関市営白雲台団地」は起伏のある敷地を生かし、敷地との一体化をテーマとしました。われわれは擁壁を廃して、なるべく住棟と敷地の起伏が一体化したものをつくると同時に、建て替えですから、元の住人が戻ってくる可能性が非常に高いので、土地の記憶として既存の三本の構内通路を残していこうということで計画したもので



用賀Aフラット (1993) 見上げアクソメ



熊本市営新地団地A (1991) 低層棟



下関市営白雲台団地 (1993~96)

## 基調講演2要旨

# 居住者主体による住宅地の更新

佐藤 滋



土地の権利が細分化し高密度化が進行している住宅市街地は、望ましい形での更新が進まず、さまざまな形式の住宅、併用建築が秩序なく混在し、防災、住環境、生活基盤などの問題がますます深刻になりつつある。個別の住宅の再建だけではこのような問題の解決は不可能で、地域の中で共通のルールに基づく住宅地の更新を、居住者主体で進めていくことの必要性は、誰もが認めることであり、その萌芽は近年、少しずつ現れつつある。

居住者主体による住宅地更新計画には、次の三タイプがある。

- ① 共同建て替えの連鎖による目標イメージの共有 (例・上尾市仲町愛宕地区)
- ② 居住者による環境保全のルールづくり (例・千代田区六番町)
- ③ まちづくり協議会によるまちづくりイメージの先導 (例・神戸市野田北部地区の復興)

住宅市街地を居住者主体で更新するためには、さまざまな居住者がまちづくりの目標イメージを合意し共有することがその出発点である。「まちづくり体験ゲーム」「三次元立体建て替えゲーム」などのシミュレーション手法が効果を発揮するが、さらに更新のプロセス、まちづくりのプロセスのイメージの共有、更新計画が目指す生活のイメージを明確にすること、さらに、居住者主体の更新計画を支える社会的な仕組みを確立することである。次のように整理できる。

- ① 空間像の共有のための支援技術の開発
  - ・イメージ交換のためのシミュレーション手法
  - ・対話型の住環境シミュレーション手法
- ② 更新のイメージの社会的合意形成
  - ・都市居住の元型としての新町家
  - ・アーキタイプを生み出す方法論
- ③ 都市に住み続けるライフスタイルと住宅政策
  - ・ライフスタイルとしての地域内循環居住

次ページへ続く

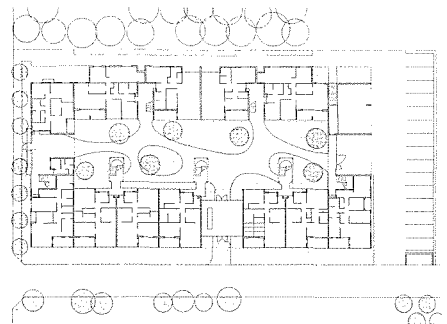


まちづくり体験ゲームの様子

す。

⑦ 最近作の「パークコート杉並宮前」。いままでの六例は全部賃貸で、これは唯一分譲です。緑が鬱蒼としたパブリックのグリーンに囲まれた敷地。そういう特性を生かして、緑のネットワークの一部として設計したいという意図で、完全な囲み型の集合住宅で、内側に小さなミニパークをもつ構成になっています。建物はフレーム構造で、非常に軽快であると同時にリズムミカルな構成として、建物を背景に緑があるという、静かなたたずまいを達成しようとしたものです。全三五戸に対し、二三の住戸タイプがあります。

\*



パークコート杉並宮前 (1996)

集合住宅を設計するときには、住み手の顔はみえません。住み手が環境構成に参加することはできない。住み手ができるのは、いろいろな住戸のバリエーションがあるなかで、自分の住む場を選択するという行為、それが住み手にとって唯一の自分たちの住む場への参加になるということ、なるべく住戸タイプの多い集合住宅を設計することになっています。

## 講演2

# 沿道型、高層・超高層集合住宅づくり

## の立場から

鈴木 崇英



私は、都市設計の立場で、いろいろな住宅プロジェクトに参加してまいりました。いま「住宅の量から質への転換」といわれますが、これからのハウ

- ・ 地域内循環居住のための住宅政策
- ・ 住宅地更新のための社会的プログラム

#### ④ 推進主体の確立

- ・ 支援する専門家の育成と社会的な地位の確立
- ・ 推進のためのパートナーシップの確立
- ・ 地域社会の運営システムの確立

### 基調講演3要旨

## 高容積集合住宅の建築計画の課題

——これからの都市型集合住宅の要件と期待

### 服部 岑生



建築計画の立場から、都市空間にどういった建築をつくったらよいか、都市の理想的空間像を探る、というスタンスで、論じたい。今後期待される高容積集合住宅への課題を中心に以下の諸点について考えねばなるまい。

#### ① 建築計画にできること

- ・ 都市論なしの建築計画は難しい……都市計画と建築計画の危険な関係、ダイナミズムを前提とする建築・住まいの難しさ
  - ・ 建築のミクロ秩序を形成する働き……人間の実感から形成される住戸とその近傍の計画条件
  - ・ 家族・コミュニティとのかかわりの見直し……家族・地域社会の変容の巨大な力への無力さと気張らない対応
- ② 原環境論と理念的な空間像の模索
- ・ 囲みの現象……開放型住環境から閉鎖（囲み）型住環境への革新の波
  - ・ 中間領域による三段階構成……住戸・最親密領域と街路・公園・都市建築・公共領域Ⅱ二段階構成、囲みの中間領域の導入による三段階構成への期待

ジング計画は、住戸、住棟の建築的な質にとどまらず、街の質、コミュニティの質、一緒に住んで一つの街をつくらせていくことが非常に重要です。

住む人がどういった生活スタイルを望むのか、どういったことに価値を見出してそこに住もうと思うのか、そういうものを実現する場として、どういった街、どういったコミュニティをいかにつくっていったらいいか。私が手掛けた実際の例をいくつか見ていただきます。

① 「幕張ベイタウン」は七人からなる計画設計調整者という仕組みがあり、私はそのうちの一人です。街並みをつくること、中庭をつくるのがルールです。街の意識としては、生活の感覚、息吹がわかりながらプライバシーがあること。最初につくった「パティオス二番街」は建築設計はUG都市設計の山下昌彦と宇野求さん。「設計者は二人以上でなければいけない」というルールがあります。全部で二三〇戸ぐらいの規模ですが、街区の幅が七〇mぐらい、一八m道路をはさんでほかの棟に面していますが、中庭は四〇mぐらいの広がりがあった、開放感は結構、中庭のほうがよい。

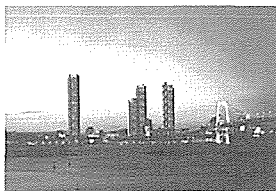
② 隅田川べりの「大川端リバーシティ21」。親水公園をつくらせて、東京八重洲口に真っすぐつながる橋をかけています。昔は工場だった土地を、こういう住宅地ができるように環境を改善している。地域の環境が悪化する方向にいったのですが、それを逆転しようという発想で提案して、だいたいでき上ってきている。

③ 「芝浦アイランドの計画案」。超高層で高密度の住宅ができないかという一つの試みです。容積率八〇〇%。低層部の「下の街」と超高層の「上の街」があり、下の街で二〇〇%、上の街で六〇〇%稼働という考え方で、一〇階ごとに木が植わっているコミュニティ広場をつくる計画です。一〇階建てを縦に積み重ねたようなものです。下のほうは、店とか、SOHOとか、なるべくごちゃごちゃした街をつくりたいという試みです。計画案は高さ三〇〇mですが、実際は一五〇〜一六〇mになろうかと思っています。

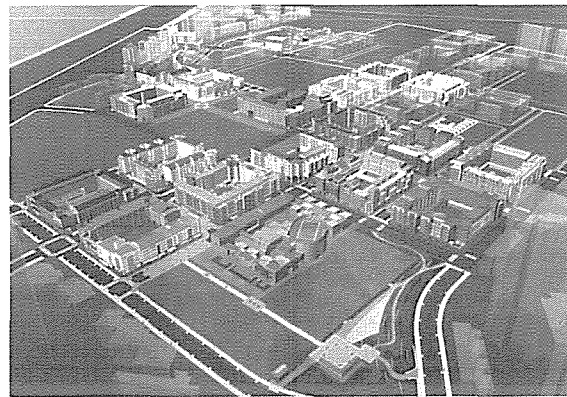
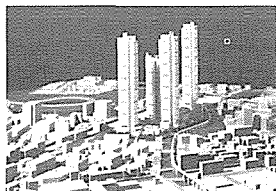
\*

私がやってきたのは、住宅で街並みをつくるということです。

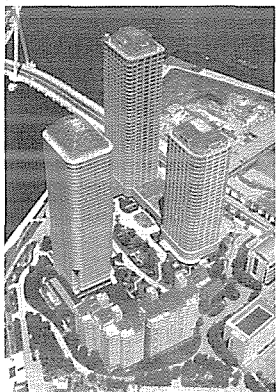
- ・都市住宅の防御性……歴史的な防御条件の重視、都市住宅の必須空間
  - ・都市に住む楽しみ……賑やかな通り、眺めの良い窓の発生
  - ③ 高容積化のダイナミックな変化への対応
    - ・高容積化とリゾーニング……ニーズ対応の新規住宅供給(高容積化の効果)、人口分布またはハウジングキャリアの地域特性の変化、都市の用途構成の変化(リゾーニング)
    - ・リジエネレーション……密集市街地の生活環境整備、都市の経済活力の再生(リジエネレーション)
  - ④ 家族・生活の変容と住戸計画
    - ・家族の崩壊と個人化……単身者の増加、婚姻率の低下、出生率の低下
    - ・家族という人間関係の必要性……核家族化の変化率の安定化、疑似家族・疑似大家族の増加
    - ・住戸の分解と再編成……公室・私室構成の住宅論の崩壊、動的な個室の編成による住戸計画への期待
  - ⑤ 近未来のコミュニティと住棟・住宅地計画
    - ・コミュニティの崩壊と再編……個人化、都市の人間関係の希薄化による、コミュニティの崩壊、居住単位の権利の確保、平等性の計画
    - ・計画的调整が可能な計画住宅地への期待……ソシアルミックス、エージミックス型住宅地の必要性
  - ⑥ すきまと日本的な空間―建築計画の責任
    - ・環境空間としてのすきま……手当てされない最大ボリュームの隙間空間、居住環境の質を左右するすきま
    - ・路地ネットワークの可能性……閉鎖型配置による中間領域のつくり方が課題、既往例の安定しない空間特性
    - ・更新の目標空間像とすきま……ストック、住宅市街地の居住性を左右するすきま、界隈性という日本性の担い手
- 今後の住宅供給の中でハウジングをどう考えるべきか。囲み型集合住宅の可能性をもっと追及すべきであること、環境回路のための群の形を探りだす必要があること、今後出てくるさまざまな新しい家族のあり方に対して新しい住空間像を提案する必要があること、を強調しておきたい。



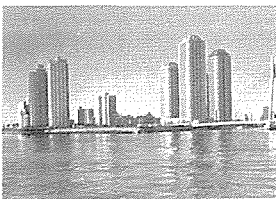
芝浦アイランド計画案



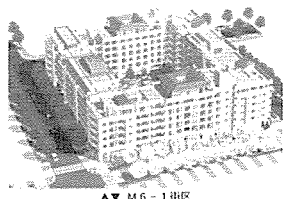
幕張ベイタウン全体図



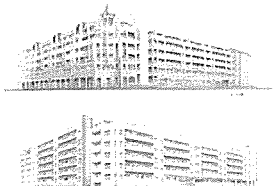
大川端リバーシティ21計画案



▲▼ M2-2街区



▲▼ M6-1街区



幕張ベイタウン街区計画案





一番目のテーマに、住宅のなかに非住宅のものを入れて、にぎわいをつくっていくことができないうかということ。特に、若い人に積極的に住んでもらいたい、住宅のニーズを掘り起こしたいというときに、こういうことが必要だと思います。

二番目に、それぞれのプロジェクトにテーマ性が求められる。環境共生とか高齢者というテーマはよくありますが、もつと個性の強いテーマもこれから必要ではないか。それによってコミュニティをつくるという考え方です。

三番目に、「コミュニティインフラ」という概念の導入。コミュニティを支えるために必要なもの、それがあると生活が楽しくなるもの……託児所、小さな広場、風呂屋、パン屋……、そういうものを積極的につくる必要があります。そして店舗だから高い家賃をとるのではなく、安い賃料でそういうものを成り立たせる仕組みをつくる必要があるでしょう。

四番目に、「コミュニティ形成を促進するプログラムから計画していく」と。先ほどお話ししたごちゃごちゃした街づくりなどは、いったいどうやって管理するのか、誰が経営するのか、「面倒くさいから、よそう」となりがちです。神戸の震災復興でも提案したことです。コミュニティ形成のためにはこういう条件、こういう施設が必要だということが先にあって、供給側の面倒くささとか都合が先に立つべきではない、と言いたいわけです。

五番目に、「コミュニティとプライベート」。隣りの人の生活がわかるような感じがいいのではないだろうか。

六番目に、「スケルトンとインフィル」。借りているけれど、中の造作などは自由である。そしてそれを安くつくられるようにする。すると、居住者も多様な人が入るようになり、コミュニティも形成されてくる。これがこれから重要になってくる。

七番目は、かたちの問題ではなく、「金融ビッグバンなどに対応したつくり方」がこれから必要となるということ。

最後に、所有から利用へと時代が移ってくるときに、「税制、補助金の考え方を変える必要」があります。そういったこともこれから改善していかなければいけません。

ればいけません。

幕張ベイトウンでは、『幕張ベイトウン物語』という本をつくりました。ただ建物ができて人が住めばコミュニティができるだろうというのではなく、そのなかの活動、交流を積極的に促進しようということで、企画してつくったものです。コミュニティをどうやってつくっていくかというソフトの面が大事なことだと思います。

講演3

## 住宅市街地の更新によるすまいづくりの立場から

間野博



低質住宅市街地が都心部周辺に広がっています。そういうところ出てきている問題点は、住宅そのものが低質で、小さく、老朽化していること。相隣環境に関しては、建て詰まりということに代表される問題。基盤施設が整備されていない、狭隘道路が広がっている、しかも、私道であること、などです。

僕はずっと関西の低質住宅市街地⇨木賃住宅地区の更新に中心をおいて仕事をしてきました。こういった都心周辺に広がる低質住宅市街地は、実をいうと、非常に更新が進んでいます。大阪では木賃住宅がいちばんピークにあったのが、一九七八年、七二万戸で、それが一五年ぐらの間に三〇万戸減っています。つまり、なんらかの格好で更新されたわけです。

密集事業制度なんか使ってやっていく更新は、微々たるもので、三〇万戸を更新しているということは、それだけの民間エネルギーが費されているわけです。そういうエネルギーを誘導する仕組みをつくらないと、とうてい太刀打ちできません。民間誘導で住宅市街地をつくり変えていけないだろうか、

というのが僕がずっと追求してきたテーマです。

みんな個別更新です。木賃アパートは、手っ取り早く経営が成り立つワンルームマンションになるか、家主が経営を放棄すると、建て売り業者の手に渡って、狭小建て売り住宅が建つ。

道路は狭隘道路、二項道路にも指定されていないようなものがたくさんあります。せいぜい中心後退二m。法律上は「道路をつくれ」とは書いていないわけで、敷地境界線がそこにあるとみなせばいい、実態としては四mに広がっていません。更新された市街地がいまちになったのかというと、どうもそうではない。どんどんそういう方向で更新が進んでいっています。

単純にいうと、一戸当り二五㎡の文化住宅を七五㎡にしようとすると、それだけで床面積を三倍にしなければいけません。ということは、容積率も三倍。従前の容積率が一五〇%ぐらいですから、四五〇%要するという話になります。そういう状況のなかで考えると、民間ディベロッパーが入ってきて、「等価交換でやりましよう」という話は通りません。どうしても、そこに住んでいて、そこに土地をもっている権利者に焦点を当てなければいけません。

現状の過密状態からいうと、本来は集合住宅になっていかなければいけない市街地だと考えられる。集合住宅化のために何が必要なのか。根本的に二つ問題があります。

その一つは、集合住宅自身の問題。「戸建てを超える集合住宅」といえるほどの集合住宅はなかなかできていません。一方で、「都心に戸建ては無理なのか」という話があるように、どうしても「戸建てがいい」とみんな思っている。それを突き崩せるような集合住宅を提示できないと、その先に進めません。

質的に戸建てを凌駕する集合住宅ができるからといって、みんな集合住宅に向くかという、もう一つ問題があります。住宅というのは、資産なんですね。この側面は非常に大きくて、この点にメスを入れないことには、どうしても集合住宅化の方向に向いていきません。

最近、「メニユア」というのがよくテーマになっていますが、所有権とか、

資産とか、そういう面で新しいシステムを取り入れる。これは非常に難しいことですが、そのへんのことにかかわっていかないと、集合住宅化はできません。

もう一つ、更新は個別に起こります。それでは集合住宅化はできない。敷地の統合が必要になってきます。これまた大変な問題で、いろいろな試みがされつつ、なかなかうまくいっていません。

僕は、とりあえず三つの方向を提示したいと思います。

一つは、権利者協同ハウジングということで、民間誘導がベースなのですが、街区の間隙のガワのところはディベロッパーが入れるわけですが、アッコのところはなかなか入れない。ガワがある市街地はまだいいわけで、大阪の外縁部の木賃アパート地域は、都市計画道路は計画されていても、できていない道路のほうが圧倒的に多い。そうすると、どこまでいってもガワがない、アッコばかり。どうしても権利者が協同でやるしかありません。

実際、放っておいても自然に三〇万戸ぐらいは建て替わっているということとは、みんな自力で建て替えているわけです。それだけの投資もしている。その投資がうまく結合できたり、あるいはプラスアルファすれば、いま行なわれている更新よりもレベルアップすることができるはずなんです。

それがなぜできないのか。一つは、多様な選択メニユアが必要だということ。借家人、借地人、大家、持ち家が集まっているわけですから、希望は全部違う。希望が違うものをくつつけるためには、当然借家向けのメニユア、持ち家向けのメニユア……、権利タイプが一絡でも、事情はずいぶん違うわけですから、その事情に応じたメニユアが必要です。

昔からの日本の制度は、みんなお金、つまり補償で解決するわけです。「メニユアは一つです。メニユアに合わない人はお金で解決します」というのでずつときています。必要なのは、むしろメニユアをもっとたくさんつくることです。そのうえで、呉越同舟が必要。考え方は全然違うのだけれども、その事業にはそれぞれの立場での合理性がある。この事業に協力してもいいな、ということになるようなメニユアを用意できることが必要です。

僕が一つの答えとして試みてきているのが、資産としては独立性がある、しかし建物としては一体性をもっていて街並みをつくる、という方法でプロジェクトをつくることです。

二つ目の方向で、「ハウジングと基盤整備の一体化」。私の手掛けた門真の朝日地区、東大地区、両方とも基盤整備を伴っています。デイベロップパーにやらせているわけではなく、建て替えているのは地権者です。道路、公園は公共事業として公共がつくっている。援助するという関係ではなく、協同でやるということですね。コラボレーションが必要であるということ。

かつ、そのためには、制度的な問題として、ハウジング関連公共施設整備事業という制度をぜひつくってもらいたい。ハウジングを進めていくためには、基盤整備が必要だ。その基盤整備をするための、街路事業とは違う論理の公共施設整備システムが必要だ。

三つ目は、「長期対応・柔軟プログラム」。民間誘導でやるというのは、そう簡単にはいきません。途中で頓挫することなんてざら。強制力がありませんから、合意形成に時間がかかります。そこでだめにならないように、無理やりこり押しをすることになってしまいます。最終的には、公共団体が全部引き受けなくてはいけなくなるなんてことがときどきあります。そういうやり方ではなくて、何カ所も同時並行的に進めるというやり方が必要。

つまり「囲碁」型戦法でいくべし。囲碁は、目ができてもできなくてもある程度攻防をやりと、そこでストップして、次のところに行く。お互いがなんとなく、相手の出方をみようかというので、ちょっとおいておく。次の違うところで攻防戦をやる。で、うまくいけば、目ができる。うまくいかなかったも、次にいく。すると、だんだんつながってくる。ああ、こっちがこきたのだったら、こっちはこうすればうまくいくじゃないかと、全体的な戦いが進んでいく。非常に広大な低層密集住宅市街地をどうアタックしていくかという、そういう囲碁と同じような考え方をとらなければいけません。そのためには、いろいろな体制とかシステムが当然必要になってくるのですが、その話をすると時間がなくなってしまうので、ここで終わりたいと

### 大阪府豊中市 東大地区面的共同再生事業 木質アパート密集地区の段階再開発

東大地区  
木質アパート密集地区の段階再開発

東大地区の再生計画

再生計画の概要

再生計画の進捗状況

再生計画の成果

### 大阪府門真市 朝日地区面的共同再生事業 木質アパート密集地区の全面再開発

朝日地区  
木質アパート密集地区の全面再開発

朝日地区の再生計画

再生計画の概要

再生計画の進捗状況

再生計画の成果

思います。

#### 講演 4

## 公共住宅・都市住宅地の計画主体の立場から

大村 芙美雄



私ども住宅・都市整備公団の仕事は、いまある制度仕組みの制約のなかで目いっぱいやるにはどうしたらいいかということなのです。

### 1 状況

①「価格・規模・経営のトリレンマ」。家賃水準は平均年収八〇〇万の二割、年間一六〇万円で払えるのを標準に考えて、規模は誘導水準以上が半分という言い方で、結構大きいものを要求されています。それを借金しながら経営していきなさいということですから、これをわれわれは「トリレンマ」といっています。大変厳しい状況のなかで仕事をさせていただいております。

最近はや量的にも足りて、選択の時代に入ってきました。高くて不便なものは借りていただけません。よりよいものを供給するという一方で、一生懸命試行錯誤している状態です。

②「六〇年代の商業・業務のスパロール」。都市への人口集中、そして周辺部へのスパロールという状況から、現在は、商業・業務が住宅地のほうにスパロールしている。したがって、都心の住宅地が混乱して、いまそれを取り戻そうとしている時期なのかもしれません。

片方で、都心そのものもずいぶん意味が変わってきています。共同化して、住宅と商業と業務をミックスで供給しようとするときに、場所によっては、住宅がいちばん値段が高く出せる。商業はほとんど値段が出ないなんていう時代にまで変わってきて、商業を入れて容積を上げれば、住宅の貸し値を下

げられるかということ、必ずしもそうではない。いろいろな変化が起きています。

③「高齢化」。民間借家で入居を断られるのは、一番目が外国人、二番目が老年寄り、特に単身のお年寄り（男子の単身者は比較的動くが、女子の単身者はあまり動かない）。都心居住を考えると、高齢化の問題は避けて通れません。

### 2 都心居住推進の隘路

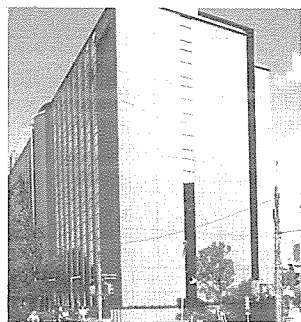
地価が高いことと、適地がないという二点。それをどうやって克服するか。①高地価対策つまり地価を顕在化させないで事業ができるかどうか。要するに、簿価の状態で運営をしていたら、借地でやるか等価交換（地価を顕在化させないで、市場の価格で折り合うところまでで土地の値段を我慢していただく）、「附置義務住宅制度」を活用して地価を顕在化させない。

②土地の高度利用。超高層がいいか悪いかという議論はありますが、複合化、高密度で、土地持ち分を軽減することによって、より安い住宅をつくる。それから、再開発とか要綱事業、さまざまな制度手法を使って、補助金を入れてもらうことで、コストを下げる。

③「適地の創出」も以上のこととまったくリンクしてしまっていて、いろいろなことをやっていますが、実例を幾つか見ていただきましょう。

東京、南青山の「コラム南青山」は、借地方式で島根県の事務所と宿泊所と公団住宅をつくった例です。

神田小川町のある共同ビル。権利者は一人を超えていましたが、土地はそのまま従来の方がもっておられて、相互賃借権をかけて、上に住宅を幾つかの制度をだぶらせてつくっています。再開発という意味では、組合施行も、個人施行も、公団施行もやっていますが、一〇人ぐらいですと、任意の共同化のほうが早いし、現実的。これ



コラム南青山

は優良再開発の制度をかませた例です。

六本木の林野庁の跡地を森ビル以下六社が払い下げを受けました。区が住宅のあり方に注文をつけて、では、公団が半分手伝いましょうと。住宅棟の右側半分が公団住宅で、左側が森ビル以下六社の住宅です。

これは借り受け制度を使って、二〇年間公団が借り受け、上物を建てて、建設費をもらいながら、借り受け料を払っていくというものです。

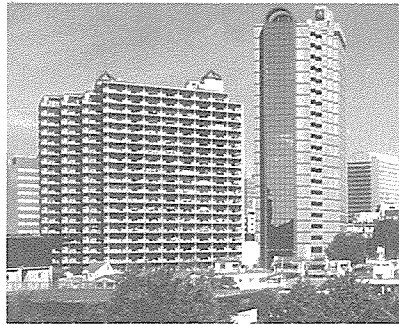
恵比寿ガーデンプレイスは、もともと容積率二〇〇%の工場跡地を四〇〇%に塗り替えて、オフィス二棟と住宅二棟が建っています。北側が公団住宅で、四〇〇%のところで八〇〇%使わせていただいで、土地費を下げてコストダウンを図っています。住宅の開発に合わせて公共施設も整備していくような特枠の制度によっています。

「トリニティ芝浦」。東京都の総合設計制度のなかでは、住宅については容積の割増の制度がありますから、隣接の二地主と協力して、オフィス開発をなさる方が住宅の容積をいただく。その容積を公団が建てる分の業務床と交換して、住宅のきわめて高い容積を実現しました。したがって、土地費を下げたという事例です。

新川二丁目、先ほど鈴木さんのお話に出た「リバーシティ21」の対岸のところで、



恵比寿ガーデンプレイス



林野庁の跡地の再開発 六本木ビュータワー



神田小川町ハイツ

住友倉庫と一緒にやったもの。公団が土地を取得して建てているのですが、事務所棟の附置義務部分と、一部都営住宅があり、全体一体でやることによって、住宅のみの容積が一二五〇%つくれる。したがって、土地費を安く済ませることができた例です。鈴木さんから、大川端に橋を架けることで環境改善したという話がありました。新川地区は、われわれは「化けさせる」という言い方をしていますが、橋をかけることによって、どん詰まりだったところが抜かれるようになって、こっちの地格が上がってきた。いわば、土地の格を上げて開発をしたという例です。

この「化けさせる」というようないい状況がなかなかできません。たとえば調整区域を買って、そこを色塗りを変更して、基盤整備を行なうことで地価を上げていくということを含めて言っているわけですが、右肩上がりではなく、うつむきかげんの経済になったときには、増進ということがなかなか出てこなくなりますから、そういうなかで今後どういうことをやっていくかは、大変むずかしい課題だと思っています。

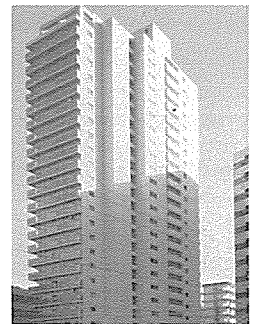
台場の海浜公園。公社、公団、都営と三者で開発しています。ここではこの中に六フロア、四〇㎡ほどのコミュニティスペースをつくっています。そういうスペースは、



シériaお台場三番街



新川二丁目をリバーシティ21より見る



トリニティ芝浦

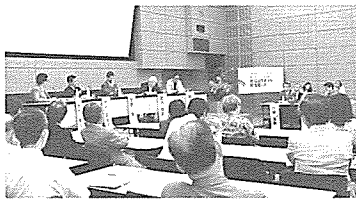
公団は何十年間もつくり続けて、失敗をし続けています。やはりソフトのほうが大事ですから、ここでは、使い方について公団の人間も一緒に入ってやらせていただいています。うまく根づいてくれるかどうか。単純に物をつくっただけでは、そういうものが生きてこないというのが数十年の間の失敗として反省をしているところです。

### 3 課題

最後に、今後の「課題」ですが、きょうの中心的テーマである「都心居住ビジョンの構築」ができていない。郊外型の住宅団地の開発については、われわれも数十年の経験で、どういう環境を確保していくかということをおぼん学んできました。都心居住についてはまだ十分整理ができていないのが正直なところです。

「再開発事業制度の改善」や「役割分担」。国、地方、事業者、個人、地元、こういう役割分担の話と制度とが密接に関連していくのだと思っています。

## 討論



パネルディスカッション風景

服部（司会） 三者の基調講演、さらに、四者のお話を踏まえて、新しい家族像、コミュニティ像に対応して、どういう「図」が描かれるべきか、あるいは居住者参加の意味はいったい何であろうか、環境の更新と改良にはいつ

たいどういう課題があるだろうか、という点について議論したいと思います。

## 新しい住宅地のあり方

### ハウジングと基盤整備の一体化

小林 問野先生から、大阪の木賃地域にはガワがない、アンコばかり、という話がありました。いままでの道路づくりは、地方の郊外部に道路をつくってきました。地方都市にバイパスをつくり、地方の中心市街地の衰退を招いています。これからは都心に幹線道路をつくる仕組みをとっていく必要があるのではないかと。そのことによって、ガワをつくっていくという議論も必要ではないか。

関連して、一・二m以上の都市計画道路であれば国はお金を出すが、それ以外は基本にお金を出さない問題がある。四mとか六mの道路は自前で整備しなさいということなのですが、細かなガワの構造を形成している八mとか一〇mの道路をどうやってつくるかという論理がわが国にはありません。それをどうやって実現していくかも、これからの既成市街地を再編していくうえでの大きな課題です。既成市街地における道路関係の投資をもっと図らなければいけない。お金の配分にかかわる問題です。

基盤整備を行なうことによって八mの道路を入れる。その周辺には、五階建ての都市型の住居が建てられる。その結果、固定資産税その他が永続的に基盤整備を行なった自治体に入ってくる。そういうシミュレーションを基盤整備を行なう根拠づけとしてしっかりやっていくという面もあっていいのではないかと。「ハウジングと基盤整備の一体化」という理屈をはっきり固めていく必要があるのではないかと。

服部 道路は基本的なインフラであり、その整備の理屈が出てこないのは、今後問題があるということですね。

佐藤 「図」と「地」の間はますます広がるという感じがしています。これは埋めないでいいものなのかどうか。それをどうつないでいくかを真剣に



考えなければいけないと思うのですが。

もう一つ、いろいろな大規模プロジェクトが動いています。それをきちんと関係づけていくことが必要ではないか。要するに、「図」と「図」を関係づけていく仕組み。街路でつながっているとか、スーパー堤防でつながっているとかということはみえてきますが、そこにできているもの同士の関係でいうと、あまりにも野放図になりすぎているのではないか。

いままで幾つもつくってきたものをどんなふうにつなげていって、一つのイメージをつくっていくのか、そのへんが重要ではないか。公園も新しい仕組みができて、そのあたりはどんなふうにお考えなのでしょう。

**服部** 住環境を整備していく課題として、大規模な開発と、佐藤さんなどが手掛けておられるつくり方に非常に隔たりが出ています。今後の住宅市街地をどういうふうにご考えていったらいいかという話から入りましょうか。

総論から入ると非常にやりにくいので、個人的な好き嫌いも含めて、新しい住宅地のあり方ということで、皆さんにお話を伺いたいと思います。

### 住宅設計における町への視点

**早川** いままで日本の集合住宅と、集まって住むという歴史が古いヨーロッパの集合住宅を比べたときのいちばんの差は、そもそも集合住宅が発生する基盤がかなり違うということです。

日本は、明治時代に入ってから、国の産業を興す、国力をもっとつけ経済を発展させるという目的から、住むところと働くところを一緒にしたほうが効率的ではないかということで、工場に付随した宿舍が集合住宅のスタートです。集まって住む豊かさ、楽しさが日本の集合住宅には、感じられません。

一方、ヨーロッパの集合住宅は、ガウディの集合住宅とか、ロイヤル・クレッセントとか、カール・マルコスホフとか、そこで感じるのには、空間自体が非常に豊かであるということ。日本の集合住宅は、「ケ」、日常的な空間の積み重ねだけで全体ができています。ところが、ヨーロッパの集合住宅をみると、個々の集合を成立させている共有領域のなかに「ハレ」の空間がある。

私は集合住宅を設計するとき、共有領域、それも「ハレ」の空間としての共

有領域を中心に組み立ててみよう、そんな気持ちでスタートしたわけです。

もう一点、設計する場合、どうしても住み手の立場で設計しがちです。住み手にいい住環境を提供するためにはどうしたらいいかということ。しかしこれからは町の視点に立つ、すなわち周辺環境との関係をどうするかが、非常に大切なことではないでしょうか。

私を手掛けているのはかなり小規模なものではありますが、道や周辺環境などに接するパブリック度が高い共有領域と、集合住宅の共有領域、すなわちプライベート度のわりと高い共有領域がどういう関係をもつてつながっていったらいいのか、そういうことを絶えず考えながら設計しています。

そのような「町への視点」が、市街地における「地」と各プロジェクトの「図」との接点になりうるのではないかと気がしています。

**服部** いまの理論は非常にわかりやすいですね。そのことが町全体に連鎖的につながっていく構造というのが、おそらく早川さんのなかの市街地のイメージではないかと思うのです。都市全体を更新するというような権力的なことではないかたちで町をつくりかえていくというお考えのように思います。

間野さんは「集合住宅化しないとだめだ」と言われましたね。

### 集合住宅化——資産は分離しても建物は一つ

**間野** 僕はデザインとは別の方向から話をしたわけですが、一戸当りの敷地面積が四〇㎡、五〇㎡というのでは、戸建てはないだろう。実際に一戸当りそれぐらいの敷地面積しか確保できないとすれば、集合住宅化するしかないのではないか。だから、高容積化、高密度化するという話でもありません。

門真の「カルチェ」にしても、東大利にしても、都通四丁目「カルチェ・ドウ・ミロワ」にしても、これから住宅市街地のなかで更新していくときにプロトタイプとして十分に使えるものを提案したつもりなんです。

「カルチェ」は、七四〇〇㎡あります。通常の一〇〇㎡〜二〇〇㎡ぐらいの更新からいうと、かなり大きいわけで、通常の市街地からしたら、街区をまたがる再整備ということになる。したがって、グルッと道路が新しくできていますし、公園もできている。そこに四棟の囲み型の低層高密度の賃貸マ

# 都通り4丁目地区の共同再建事業

～それぞれの事情の違いを乗り越えて～

## ■計画概要

- (1) 敷地面積 1,643.55㎡
- (2) 建築面積 937.82㎡
- (3) 延床面積 3,719.17㎡
- (4) 構造形態 鉄筋コンクリート地上4階建て
- (5) 住宅戸数 59戸
- 内訳 分譲住宅 17戸
- 賃貸住宅 42戸

- (6) 運用制度
  - 住宅：専有権管理、公租グループ分譲住宅制度
  - 長年賃貸的特定分譲住宅制度
  - まち・すまいづくりコンサルタント派遣制度
  - 電気住宅用設備整備促進事業制度
  - 民間地上賃貸住宅制度
- 取組等についても建設特別の適用を予定

## ■位置図



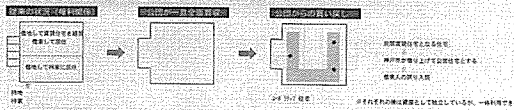
## ■配置図・1階平面図



## ■事業目的

調査で実施した権利者グループを、震災前から進めてきた「特定まちづくり計画」に基づき、再建することと改めて再建しようとする。地主・地主・借家人・持家とさまざまな権利者が、それぞれの条件の違いを多様なメニューの選択で克服し、大規模な再建を実現する。調査で実施した権利者グループが権利内容に明確にしつつ、協議可能な内容で合意を遂行し、取組の進捗が目標をクリアする一歩を踏み出す。電気住宅となるよう、公租がサブリーダーになり、民間賃貸・グループ分譲住宅制度をベースに、神戸市民間地上賃貸住宅制度、電気住宅用設備整備促進事業を適用して事業化します。

## ■事業のしくみ



## ■完成予想図



## ■コンセプト

この計画は震災で全壊した長屋群を再建しようとする。様々な権利者がそれぞれの事情の違いを乗り越えて一致団結し、密着住宅の中で市内最大規模の33人の権利者による共同再建事業を遂げるための計画である。この計画によって、共同再建住宅のそれぞれの権利は確保として独立し、かつそれらを一体利用することを目指すのである。震災以前より長年培われてきた人情あふれるコミュニティの形を形を継承しながら、再建を主体にまちの再生を目指している。

2014.10.16 広島女子大学教授 藤野 博  
設計監理 森崎設計事務所 藤野 博 森崎 博

ンションを配置している。それぞれは、二二〇〇〜二〇〇〇㎡ぐらいで、それが四つ集まって一つの町をつくっています。

東大利地区は、段階再開発というやり方で、いっぺんにやっています。東大利も七一〇〇㎡で、各単位は、八〇〇〜二〇〇㎡のユニットで住宅が建てられています。現道を利用して、それを建て替えて同時に拡幅する。部分的には買い取って公園をつくる。公共と地権者が協同して段階的に順番に共同建て替えるを進めていくということを可能にしているわけです。

そうしてみると、一つひとつのものは、そんなに珍しいものではなく、至るところに成立可能なものではないか。ユニットとして考えた一五〇〇㎡とか二〇〇〇㎡、つまり街区単位で動かすということに関しては、難しいとはいえず、低賃住宅市街地のなかでどこでもやれないことはないという思いでやっています。そういうものがずっと広がってくれたらいいなと思っています。

服部 それで、囲み型なんですよね。早川さんの設計されたものはどう評価

されますか。プロトタイプ的な意味で……。

間野 囲み型に関しては、僕も非常にいいなと思っていて、どのプロジェクトも設計者はそれぞれ違うのですが、みんな囲み型で設計することになりました(笑)。

市街地のなかで住むかたちとして、囲み型は、日照条件などからは難しい面があるのですが、まとまりという点ではいい。同時に僕は、権利とデザインを分離して、資産は分離するけれど、建築は一緒だということをやっています。分けてくるのですが、それをやるには囲み型配置は非常に分割しやすいですね。低層高密度で、ユニットがグルッと回っていると、いろんな切り取り方ができる。で、資産を分離しやすい。かつ、街並みとして一体化できるといふメリットもある。非常に実利的なことでも評価できると思っています。

服部 早川さんがやっておられるのは一敷地です。間野さんの場合は、幾つかの敷地に分けた状態で、壁をパーティウォールなりブランクウォールにしておられるわけですね。敷地を区分所有ではないかたちで使えるようにしているということだと思のですが、そのあたりは佐藤さん、小林さんの話に連動したのではないかと思います。

市街地はさまざまな意味で大規模な土地利用変換を伴って再開発するような場所もたくさんありますね。鈴木さんや大村さんはそういうお仕事が多々多いわけですが、「大規模なものをつくってどうする」というニュアンスのこととか、「さらにその更新はどうするのだ」という心配の話もありました。プロジェクトが都市全体のなかでどういう意味をもってくるのか、そういうことを含めて、鈴木さん、お話しいただけますか。

## 公園がつくってきた団地は田舎風

鈴木 私は東京生まれの東京育ちなんですけど、結婚して賃貸アパートに住み、家をもとって探したら、手ごろなところで計画的につくられたもので、買いたい家、住みたい家、住みたい住宅地がなかった。公園もいろいろ考えたのですが、どうも違和感がある。それで、住みたいところをつくりたいというのが、この仕事に携わる動機にあるのです。

公園がつくってきた団地は、どうも田舎風だと僕には思える。平行配置でいきなり土の上にコンクリートの塊が載っかっている。悪くいうと、掘立て式みたいな感じ。地方から東京へ出てきた人が住みやすいということがあったのではないでしょうか。下町的な、おつき合いがあって、生活の息遣いも感じられる集合住宅。そういう面が公園住宅、団地には感じられない。

ところが、最近では、そういうところで育った人たちの二代目が出てきて、みんな都会人になってきた。都会的な生活をしたくなってきた。そうすると積極的にこういうところに住んでみたいというものがない。一方、欧米の住宅地も旅で見えてきたりする。外国の真似をすればいいということではないですが、一緒に住んでいるということが、何か共通の価値観を感じて住んでいるのではなからうかということを感じました。

そうなったときに、先ほど「図」と「地」が離れているというお話でしたが、私は、離れば離れるほどいいと思っている。一般解ではなく特殊解、そういういろいろなライフスタイルに合うものが幾つかできればいいなと思っています。

いまの人たちが街に求めるのはたぶん、街への帰属意識と、こういうコミュニティに住んでいるというもの。そのなかでの自分のアイデンティティだと思います。個性のある街、そのなかでまったく同じユニットが積み重なっているというのではない、自分は違うものに住んでいるという意識をもちたいということがあるのではないかと。

その帰属意識、欧米の例ですと、お金をもっている度合いによって住んでいるところが違うということですが、日本の場合はあまりそういうことがなくて、これからは、趣味とか、時間をゆったり使いたいか、こういう人たちとつき合いたいか、そういう価値観を共有できるような単位で住みたいという方向があるのではないのでしょうか。

かつて「日本人はウサギ小屋に住んでいる」と言われてみんながっかりした。そのときは、小さくて見すばらしい家に住んでいると受けとったと思うのですが、実はそうではなくて、集合して住む意味が全然わかっていなくて

一緒に住んでいる、ということをいわれたのではなからうかと思えます。これは街とかコミュニティをどうつくるかということにつながる問題です。

服部さんが、私は大規模なものをつくらせているとおっしゃったのですが、大規模にこだわっているわけでは全然なくて……。

服部 ごめんなさい。絵が大きいようにみえているんですね。

鈴木 大きいと、いま言ったようなことが実現する余地があるとは思っていません。私は都市設計ですので、ついそちらのほうに流れてしまう面はありますが、これからの問題として、いかにそういう街をつくるか、ではないでしょうか。

#### 一度、団地生活を体験した人は囲み型が好き

服部 なかなか意味深なお話でした。私は、住居履歴と好きな住宅のタイプを調査・分析したのです。超高層はほとんど嫌いな人が多いんですが、好きな人は確実にいるんです。どういう住居経歴をもっているかというところ、田舎の人です。直接東京に来て、最初にそれなりの家に入る人が超高層が好きだと。好き嫌いで入るかどうかは別にして、で、いったん団地生活を体験した人は、中高層の囲み型が好きだと。そういうふうにはつきり出ます。

日本の戦後の近代化の過程のなかで、非常に多くの地方の方が東京に入ってきて、その近代的な家の象徴が、団地だったのでないか。現在ではそれが超高層。いったん団地を経験して、次にどうなるかということになると、新しい意味づけをもった家づくりが必要になってくるのではないかと思うんですね。「地」から離れるほうがいいというような過激な発言もありました。大村さん、お願いします。

#### 基盤整備は都市経営の視点で

大村 かつては開発利益がかなりあって、ある一定の大きさの開発をやれば、それに見合う基盤整備を開発側で負担して、それなりのものが整備できていました。ところが、現在、増進がそうない時代になったときに、どういうスキームでやっていけるかを考えると、やはり日本型のライトダウンみたいな仕組みをつくらないといけない。アメリカのライトダウンは追い出し型で、

問題がないわけではないですが。

逆にいうと、公団みたいな組織は、「地」をつくる仕事、いろいろな「図」が描けるシチュエーションを一生懸命つくりなさいというのが、今回の組織変更の大きな目標でもあったなと思います。それを支えるためには、「日本型ライトダウン」が必要なのではないか。

立川駅北口再開発で、都や国から補助金をいただいたのですが、あとの経済効果を考えたら、国と都は一年で、市も三年ぐらいで取り戻しちやっただ。公共団体してみれば、固定資産税は上がるし、そこで経済活動が活性化することで別の税収が出て、かなり短期間に取り戻している。

いままでは、タダの金は「やってしまふ」みたいな発想で公共団体は考えているんだけど、都市経営として、このぐらい投じれば、あとで戻ってくるよと。公団みたいな組織は、あとで税金を国民からとるわけにいかないものから、回収のしようがないので、それは公共団体にやらしてもらおうしかなかった。そういう視点で基盤整備をやれば、道路、公園というレベルからもっと踏み込んだ、公共空地やアトリウムみたいな共同の部分までの整備ができてくるのではないか。そこまで公団みたいなところが自分でつくってしまうのではなく、建築家、都市計画家が力を発揮できる仕組みをどうつくっていくかということだと思っております。

都市のなかで何を我慢するか、その代わりに何を手にするか、を考えると、やはりかなり装置化した共用部分が大事になってくるでしょうから、誰がどうかわかって、どういうお金を使って、というようなことを考えた仕組みをつくる必要があるのかなと思います。

公団はまだそのところが十分にできていなくて、鈴木さんがおっしゃったように、「地方から出てきた人が安心して住める街」から一步も前に出ていないかもしれないですが、いろいろな試みはしています。

ただ、「大川端リバーシティ21」は、公団のプロジェクトのなかでは数少ない、二〇年間同じ人間がかかわってやってきたプロジェクトで、たぶん同じ人がずっとかかわってやっていける仕組みも、コントロールという意味で

は大事だと思います。

**服部** 大村さんは、なかなかいいにくい研究中のこともたくさん抱えておられるようで、本当は歯切れよく、新しい住宅のイメージなり住宅地のイメージをお出しただければ、大川端の次のステップの提案がどうなっていくかということがわかってくるのでしようけれども。

**佐藤** 中庭囲み型、これが本当にすべいいいとは思わない。やはりある限定されたなかで実現していくものなのだろうと思います。

**同潤会** 江戸川アパートは囲み型ですが、同潤会の代官山は、囲み型ではないですね。当時のヨーロッパのものをいろいろもってきていますが、やはりある種日本的な、時間をかけて段階的に物をつくっていくとか、基盤と一緒に物をつくっていくなかでできてきた、自然な空間のおもしろさをもっていたのではないかと思う。

先ほど鈴木さんも、三〇〇mの下にそういう街をつくりたいとおっしゃっていたのですが、それはデザインの問題ではなくて、ある種のつくっていく仕組みの問題とリンクしないと、なかなかうまくいかないでしょう。

たとえばアメリカのミッシオン・ベイ。これはまだできていませんが、中庭囲み型で、それを何重にも囲んだりしています。それはつくる仕組みとか主体を組み合わせさせていって、奥のほうには安いハウジングをつくって、表側はわりと市場性のあるものをつくってと、維持していくためにも、仕組みも同時に考えている。中庭の囲み型とか、形態だけの問題ではなかなか解けていけないのかなと思います。

**日本の法制度は近隣との関係を協調する仕組みを持っていない**

**早川** 私は自分で設計して、結果的に、囲み型といわれる集合住宅になっているんですが、どうして囲んでいくのかなと考えると、周辺の環境をあまり信頼していないということが、たぶんいちばん大きい。「地」の空間、周辺の市街地の空間的な骨格、環境の特性が欧米のようにかなりしっかりしたものであれば、当然われわれはそれに対して積極的な関係をもっていこうとします。

日本は時間の変化が速くて、隣りが更地であつても、その更地を利用してなんてことは考えられない。隣りに何が建つてしまふかわからない。では、周辺に素材的に何か合わせるようなものがあるかというところ、素材もまちまちである。スケールもわかり。既存の周辺の環境を信頼して、そこに融合していく姿勢がなかなか生まれない。とにかく自前の変わらない空間を内側につくり込もうということが結果的に囲み型をつくっていくことになりませう。

幕張のプロジェクトは、既成の市街地ではなくて、自分たちで新たに市街地の環境をつくっていくわけですね。街路空間を明確につくりだしていこうと。要するに、エッジをしっかりとつくっていこうということから、それはそれでまた囲み型というのが発生していくのではないかと。

一概に囲み型といっても、既存市街地のなかでの囲み型の発生のしかたと新たに開発するところではちよつと違うのではないかなという気がします。

**服部** 私も囲み型については、いろいろななかたちの追求があつていいし、佐藤さんがいわれるように、いろいろな背景の条件のなかで考えるべきだと思ひます。中規模のブロックが幾つか連帯していつて市街地ができるときに、日本の法制度は、隣りとの関係を協調するような仕組みをもつていません。

法律そのものがお互いをばらばらにするつくり方になつていゝ。あらためて協調しようということによつてはじめてできるわけです。なかなか連帯しないし、消極的に囲みになつていゝという早川さんのお話です。で、おそらく新しい答申のなかにはいろいろなものが出ていゝ。今後、積極的な意味のものが出てくるのではないかと期待してはいますが、いかがでしょうか。

**小林** おっしゃるとおりです。ヨーロッパでは保全地域という市街地がほとんどで、ロンドンではウェストミントスターの四分の三、ドイツの中心市街地はほとんど連帯市街地という位置づけで、そこは周辺との調和を前提として建築許可が下りる世界です。ですから、そこに住んでいても、周辺にどういふ建物ができるか、だいたい予想できる。

アメリカはそれがないために、しっかりとコードをつくつて、地域ごとに、建築のタイプまで限定するゾーニングでコントロールしている。そうい

う意味で、また、予想可能性が高いわけです。

わが国はどちらもない。非常に大規模な超高層から、アンコのちまちました数千㎡単位の低層高密の住宅市街地まで、多様なものが共存するかもしれない市街地を、どういふ制度的な枠組みで、あるいは環境条件を配慮したうえでつくりうるのかという、非常に難しい、どこも経験していないようなことをやつていゝのです。

## 家族のあり方、コミュニティのあり方

**服部** 典型的な窓先空地問題とか、今後、非常に大きな改革が行なわれるでしょうから、期待したいと思ひます。

京大の高田先生から、「生活の変化は、社会、コミュニティの変化を引き起こしてゐるのではないかと。そういう変化に対して、どういふハウジングの考え方があるのか」といふ質問をいただいていゝ。高齢者の問題、ハウジングの問題、社会の変化などについて、いまお話ししたかったことと、どうつなぎ合わせてお考へになつてゐるのかお話ししたかったことと思ひます。

### ベーシックなスペースを貸して、オープンで付け加える住宅に

**大村** 大きくは、いま非常に世帯が小さくなつてきていて、公団の居住者は二・九人を割つてゐます。一人四〇㎡としても、三人で一二〇㎡あればといふ世界になつてきてゐる。つくるものも家族規模によつても変わつてくるのかなといふ気がしてゐます。

いま服部先生とご一緒に勉強させていただいてゐるプロジェクトで、あまりいろいろなものを取り付けないで、ベーシックなスペースだけを貸して、それにオプションをいろいろつけることができないうかといふことを考へてゐます。簡単にいえば、家族の伸長に合わせて必要な部屋やストックルーム、あるいは仕事部屋なども借り足せるといふことができないうかといふ物をつくるのは簡単ですが、それを支えるソフトのほうが問題で、そうい

う需要にパツと対応できるように空いた部分を確保できるか、その管理を誰がやっていくかなどがカバーできないと、制度として成り立っていきません。同じように、コミュニティという議論も、階段室のコミュニティなど固定されたものではなく、選択型のコミュニティではないか。こういうところに住みたいという人が入るコミュニティを考えるべきだろう。

そうすると、コミュニティスペースを用意することに終わらずに、そこでつながっていく人たちを、プロが入って集めて、最初の仕掛けをしていくようなことをしていかなないと、なかなかうまくできていかなさう。そういうことも含めた、住宅サービスの水準、管理の水準、そういう部分に新しい仕事があるのかなという感じをもっています。

**服部** 間野さんにはこういう質問をしたいのです。権利者協同型とおっしゃっていました。間野さんの手掛けられたものをみてみると、更新の際に、当初のコーディネート段階で、家族とかコミュニティを相当きめ細かく考えておられるようにみえるんですね、大阪では、東京での話とかなりちがう議論もあるのではないかと思うのですが。

### 地域循環居住のすめ

**間野** 基本的に、下町的なものが常にベースにあることは確かです。世の中の先端部分では、確かに家族の崩壊とかがあるのですが、既成市街地のなかに入って権利者と話をしますと、もっと古くさい部分がまだいっぱい残っていて、特に都心周辺の既成市街地は、基本的に古い町です。

例を挙げると、都通四丁目は、阪神大震災のあとに入って、いま建設中なのですが、ここは戦前長屋なんですね。ここの家族は、他人同士が家族になっているみたいところが、ものすごくおもしろい。例えば、身寄りがなくなつた自分の母親の友人を、まったくの赤の他人なんだけれども、家族に入れ、一緒に生活していたりする。権利者が三三人いて、実際に住んでいる二九世帯のなかに、他人の面倒をみている家族が三世帯あつた。

建て替えの計画をするとき、本来からすれば別世帯ですから、そのおばあちゃんを借上げ公営へ入れるわけです。そうすると、ずっと世話していた人

は、同じ階に部屋がほしいという。分譲に入る人も、自分が世話したおばあちゃんと同じフロアに住みたいとか、転出するのだけれども、おばあちゃんを借上げ公営に入れてもらうから、自分としては近くに転出したいとか、そんな話がいっぱい出てきた。まだまだそういう世界がある。

都通四丁目は、借上げ公営住宅として三〇戸ほど新規供給されるのですが、その三〇戸の人たちは、もともと住んでいた人たちのコミュニティに入り込んでくるわけですね。たぶん新しい人たちを受け入れて、もとのコミュニティを母体にした新しいコミュニティをつくっていくのではないかなという感じがしました。

佐藤先生が地域内循環居住とおっしゃいました。要するに、同じ家にもう一回戻るとは非常に難しいのだけれど、その近所周りぐらいでお互いに順繰りにもとの近隣関係を維持しながら更新していく。そこに新しい人も入ってくる。その新しい人は古い人のなかに受け入れられて、より拡大した新しいコミュニティをつくる。ものすごく古くさい話になるのですが、やっぱりそういうのがいいなと僕は思います。

**服部** 非常に暗示的でいいですね。鈴木さんも江戸っ子っぽい家族論があるのではないかと思いますが。

### 住み手が自由につくれる住戸プランに

**鈴木** 先端をいく建築家の方が、家族のあり方が変わって、個室が第一にあり居間みたいなものは後ろにあればいいというような住宅を設計して、それが話題になったり、それがいまの家族のあり方を住戸プランに反映しているといわれたりしている。私はそれはちょっとおかしいと思います。

単に若い人がわがままになってきていることを、住戸プランに反映したほうがいいのだということには結びつかない。個室をつくと引きこもって教育上よくないというような、先に家族のコミュニケーションがあつたほうがいいのだ、という話に置き変わる程度のものであれば、それによってプランあるいは住戸のあり方が変わるほどのものではないだろう。

家族のあり方というのは、もっと昔の、通い婚をやっているころといまを



比べれば、最近の変化は全然変わったといえる話ではない。それより、仲のいい女性同士が住む——若いうちにシェアして住むとか、年とってから、結婚したくないから、あるいはしなかったから仲のいい友だちと住みたいとか、もつと極論をいえば、男と男が一緒に住みたいというのもこれから出てくるかもしれない。あるいは、男と女でも結婚はしてないとか、そういうような家族のあり方もある。

大村さんのお話のように、ベーシックなものをどうオプションで変えるかということでも十分応えられる話だと思います。

**服部** なんとなく対立的な気持ちもないわけではないですが、世の中では「ポストLDKが課題だ」という説がいっぱいあります。いわゆる「3DK割りの住戸プランはなんなんだ」という意見は、私の同僚の学者のなかにもいっぱいあります。設計者となればもつといます。「ああいうプログラムは制度である」という風潮も世の中にあるわけで、鈴木さんは相当古い意見をいわれたようにも……。

**鈴木** いえ、もしやるのなら、八〇㎡の住戸の中が間仕切りも何もなくて、好きに仕切れるとか、内装を好きにできるといって、それぞれ個人によって変わっていないではないか。居間がものすごくでかくて、個室が小っちゃいとか、個室をいっぱい並べたい人はそういうふうにできるようにという意味です。

**服部** ということは、住戸プランそのものは、型みたいなものでとらえるのではなくて、自由自在にいけるものがないと、そういう主張ですね。女性が社会に進出するとか、いろいろな意味でわれわれは外部化したものに依存するようになっていく、そういう観点はいかがですか。そういう住宅計画、あるいは住宅地計画は……。

**鈴木** そうなると、住戸のプランというより、一つのあるコミュニティ、街、つまり大きな都市ではなくて、何百戸というある個性をもった一つの街、コミュニティインフラのなかでそういうものを備えるべきだと思います。

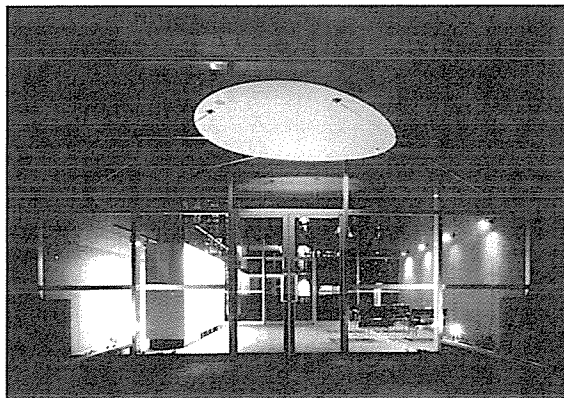
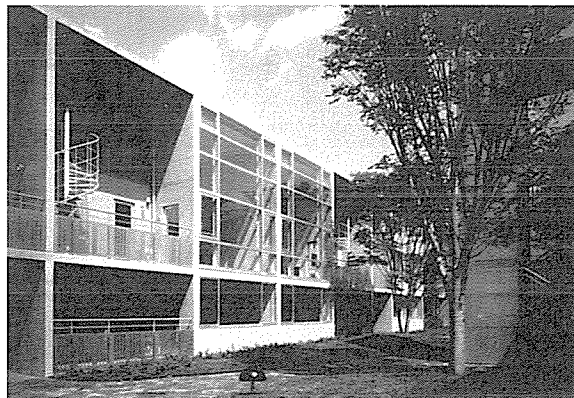
**服部** わかりました。相互扶助、共同性のある住まい方ということを開野さ

んがいわれ、また最低の単位をもつて、あとはプラスするという大村さんのおっしゃるような家族像もありますし、いま鈴木さんのお話にあつたように、さまざまなバラエティーがある状況に、住戸の問題は、どうしてもなってきたような感じがします。

最後に、早川さんに伺いますが、「パークコート杉並宮前」の例は、やっぱり住まいというものが「ハレ」ということのなかで、生活そのものをみせるというかたちなのでしょう。家族像、あるいは生活像は……。  
**集合住宅はあまりつくり込まないほうがよい**

**早川** 集合住宅でいつも思うのは、設計しているときに住み手の顔がみえないことです。だから、「どういふつもりで設計しているのだ？」ということになる、自分がこういうところに住んでみたいと思えるところ、それを設計するよりしようがない。民間の集合住宅であれ、公営の市営住宅であれ、その気持ちは変わらないんです。

同時に、集合住宅をつくるときに、あまりつくり込まないほうがよいの



パークコート杉並宮前 設計／早川邦彦建築研究室

ではないかという気も非常にしています。そこに住む人たちが、時間の経過とともに、自分たちの住んでいる環境に何か参加していける場所、すなわち余白となる場所をいかに集合住宅のなかに残していくか。そういうことも、最近、できる範囲内でやっていきたいと思っています。特に、市営住宅などでは、経済的な制約が少なくなりそうですので、そういうことはやっています。

結局、いまのようなわれわれの生活のなかでは、なかなかコミュニティ意識は生まれがたい。もし生まれるとしたら、コミュニティ意識ではなく、自分たちはこの集合住宅に住んでいるのだという帰属意識だと思っただけで、集合住宅をつくる場合に、どうやったらそこに住む人たちにそこへの帰属意識をもってもらえるか、ということが非常に大切なのではないかと。

一つの要素として、「ハレ」の要素をもった共有領域もそうであるし、バルコニーであったり、ピロティ空間であったり、ケース・バイ・ケースですが、プライベートとパブリックの間に余白空間をどういうふうに出出していくか。それが集合住宅を設計していくときにいちばん自分にとって関心があるテーマとなっています。

服部 家族のあり方、コミュニティのあり方は、非常に不透明なところがある。皆さんそれぞれ意見が違ったり、角度が違ったわけですが、古いものと新しいものが共存しているというような考え方であった感じがします。

「リジッドにつくらないほうがいい」という意見は、自分でプラスできるような仕組みとか、鈴木さんは自由に住み手がつくれること、早川さんもつくり込まないほうがいい、とおっしゃったので、ハウジングそのものを建築していくときの構えとしては、そこらがわれわれとして意思が一致できる、あるいは決定できる場所ではないかと感じます。

さて、最後に会場から、維持・再生、管理の問題で、東洋大学の内田雄造さんから質問がきています。

**集合住宅はあらかじめ建て替え対応策をつくっておくべきだ**

内田（東洋大学） 私は規制緩和の手段としての高容積化には批判的な立場でおります。そうはいっても、部分的な高容積はありうると思っ

ますが、大規模集合住宅に関しては、かなり問題が多いのではないかと。

阪神大震災でも、同潤会の建て替えのことを考えても、えらく大変だということを実感していますし、特に公営住宅の場合には応能応益家賃の問題があつて、高齢の低所得者に特化していくと思います。そうでなくとも、いまはいいけれど、将来的に人気がなくなってきた場合にどうなるか。そうなるのと、どうも大規模集合住宅は、あらかじめどういうふうに対応していくかを考えておく必要があるのではないかと、ご意見を伺いたい。

鈴木 芝浦アイランドの場合は、提案としては、スケルトンのほうは二〇〇年もたせるつもりで、そのかわりインフィル（住戸）や設備のほうは取り替えやすくしておこうと。中で移り住めるとか、間仕切りは自由にできるとか、住戸の大きさすら自由にできる。そういうこともできるように、時代の変化に耐えられるようにという、柱が非常に少ない架構による提案です。

また、昔つくった、分譲と賃貸が共存する普通の中層の団地で、分譲の人たちがそろそろ建て替えたいといった。しかし調べてみると、敷地に一団地がかかっている。フィジカルなもの——高層だから建て替えにくいとかいう問題——より、制度の問題のほうが実は大きいのではないかなと思います。

内田 高さではなくて、大規模ということで、コンセンサスの成立の難しさなんです。

鈴木 制度が混在しているともっと難しいという問題があります。

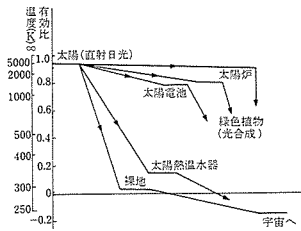
服部 大規模で、なおかつ超高層型の住宅、住宅地の更新問題は、基本的に公共の関与が非常に必要な事項ですね。内田さんがいわれたことは、今後大きな課題で、アメリカで大規模超高層型の団地がスラム化して建て替えられないとか、犯罪の温床になるといったあとの手当てとして、小規模散在型の公営住宅づくりを始めた経緯があります。そこまで日本がいかないというところに安心もするのですが、非常に大きな課題になるのではないのでしょうか。時間になってしまいました。教科書的な雰囲気から脱皮できたのではないかと思います。それぞれ個性的にハウジングに取り組んでおられ、テーマをもっておられるということがわかりました。ありがとうございました。

## 宿谷 昌則

人間にとつての「環境」とは、私たち人間を取り巻くものやことのすべてである。私たち人間は、一日二四時間のうちの少なくとも八〜一〇時間を、場合によっては丸々二四時間を建物の中で過ごす。建物の中には私たちが、壁や窓・床・天井のほか、家具やさまざまな機器に囲まれている。このように建築を構成するものによって区切られた部分の環境を、私たちは一般に「建築環境」と呼ぶ。

地球表面に棲息している人間を含む動物、そして植物・微生物についての知識、地球の地質学的・氣象学的活動についての知識などが、二〇世紀の科学・技術の発達によって飛躍的に増加した。その結果、私たち人間は、地球という大きな環境に囲まれて生きていくことを多かれ少なかれ認識するようになってきた。これを「地球環境」と呼んでいるわけである。

「建築環境」は、「地球環境」の内側に存在する。「建築環境」と「地球環境」の間には、「都市環境」



や「地域環境」など、境界線の設け方次第でいろいろな大きさの環境を考えることができる。「建築環境」のような小さな環境は、「地球環境」のような大きな環境にはあまり関係がなさそうに思えるかもしれない。しかし、二一世紀の半ば過ぎには百億を越えようかという勢いで人口が増加しつつある人間が、これまたたいへんな勢いで「地球環境」のなか

にある資源を消費し、廃物や廃熱を「地球環境」に捨てて活動をしていることを考えると、「建築環境」を「地球環境」と関連させて議論するのは大切だと思う。資源のかなりの部分が、「建築環境」をつくり、それを維持するために消費されることになるからである。

● 筆者は二〇年ほど前に建築環境工学の世界に身を置くようになり、光と熱に関わる問題を中心に研究を始めたが、そのころは、「建築環境」と「地球環境」を比較してみよう、あるいは両者につながりを見出してみようなどとは考えなかった。ところが、今に到ってそんなことを考えるようになった。そのように筆者の考えが發生・展開してきたのである。筆者の考えが拡がり展開していくのに影響した書物をいくつか紹介してみよう。これらは、「建築環境」と「地球環境」を考えるための、いま現在の筆者が考える基本図書である。

● 「建築環境」がどんな状態にあるかを、私たちは五官・五感によって知覚する。五官は、耳・目・皮膚・鼻・口、五感は聴覚・視覚・触覚・臭覚・味覚である。五官に対する刺激は、音・光・熱・空気・

### 〈建築環境と地球環境〉基本図書リスト

(※印を付した本は任総研図書室に所蔵しています)

- (1) 波辺要編著『建築計画原論Ⅰ』丸善、一九六二年。
- (2) 波辺要編著『建築計画原論Ⅱ』丸善、一九六三年。
- (3) 波辺要編著『建築計画原論Ⅲ』丸善、一九六五年。
- (4) 木村建一『建築設備基礎理論演習』学献社、一九七〇年。

- (5) 木村建一編著『建築環境学Ⅰ・Ⅱ』一九九二年、丸善。
- (6) 環境工学教科書研究会編著『環境工学教科書』一九九六年、彰国社。

- (7) Olgyay, V. and Olgyay, A., "Solar Control & Shading Devices", Princeton University Press 1957.

- (8) Olgyay, V., "Design with Climate", Van Nostrand Reinhold 1992 (First ed. appeared in 1963 by Princeton Univ. Press).

- (9) シム・ベンダーリン、スチュアート・ローワン(林明男訳)『エコロジカルデザイン』ピオシティー、一九九七年。

- (10) Solar Energy Research Institute, "The Design of Energy-Responsive Commercial Buildings", Wiley Interscience, 1985.

- (11) 寺田寅彦『さまよえるユダヤ人の手記より』(「思想」一九二九年九月初出)、『涼味数題』(「週刊朝日」一九三三年八月初出)、『寺田寅彦全集第三巻』一九九七年。

- (12) 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』(「経済往来」一九三三年二月初出)、『篠田一七編「谷崎潤一郎隨筆集」』岩波文庫、一九八五年。

- (13) 藤井厚二『日本の住宅』岩波書店、一九二八年。
- (14) 高田誠二『熱エネルギーのお話』日本規格協会、一九八五年。

水といった「建築環境」を構成する要素である。これら物理的な要素の振る舞いをどう扱うかを、建築計画のための科学的基礎「建築計画原論」として体系的にまとめた(1)〜(3)が、筆者にとって建築環境工学の世界への入門書だった。

「建築計画原論」は、今日までのあいだに照明や暖房・冷房・換気などの建築設備技術の基礎的学問としての役割をも担うように、というよりは主要な役割をそちらの方に移すようになって、一般に「建築環境工学」と呼ばれるようになって久しい。他の諸科学の分野と同様に、建築環境工学は、分科の学として著しく発展してきた。この間に、「環境」や「設備」を書物のタイトルの一部に冠した教科書は、(4)〜(6)に示すもののほか数多くある。

「建築環境工学」の教科書は、光・熱などの建築環境の要素のそれぞれについて、羅列的な記述をしていることが多い。定説となっている知識をできるだけ多く盛り込むことに重点が置かれているからだ。

それに対して、環境要素と計画を結びつけることに重点を置いて著わされたものとして重要なものが、(7)(8)だと思う。最近に著わされた(9)なども同様の意味で重要だと思う。(10)も参考になる。(11)(12)などは「建築環境」とは何かを再考するためにとても良いし、関連して(13)などに述べられたことを改めて掘り起こすことも重要だろう。

筆者は、「建築環境」を良好な状態にするための建築的・機械的・電氣的仕掛けを総称して、「建築環境システム」と呼ぶことにしている。この建築環境システムが働くには、〈流れ〉と〈循環〉の存在が重要である。そのことが認識できるようになったのは、筆者の場合、熱力学と生物学の書物を素人なりにひもといたからだ。熱力学と生物学は、筆者にとつての「建築環境工学」を「建築環境学」へと、閉じた世界から開かれた世界へと導いてくれたといつても過言ではない。

熱力学は、抽象性の高い学問で、なかなか取っ付きにくい領域ではあるが、扱う対象の多くが、実は私たちの誰もが日常的に体験できる現象であつて、わかつくとする気持ちさえ持続すれば必ず理解できる。ここでは、数多い熱力学の書物の中で、(14)〜(21)を挙げておきたい。筆者は、熱力学の世界にかなり深入りしてみたが、そうしたところ、エネルギーやエントロピーのほか、エクセルギーと呼ばれる重要な概念が次第にきちんとつかめるようになって、以前には気づけなかつたことに気づくようになった。生き物の振る舞いに興味が出てきたのは、熱力学がわかり始めてからのように思う。生物学の書物を

\* (15) 植田 敦『熱学外論―生命・環境を含む開放系の熱理論』朝倉書店、一九九二年。

\* (16) 押田勇雄・藤城敏幸『熱力学』裳華房、一九七〇年。

(17) 山本義隆『熱学思想の史的展開―熱とエントロピー』現代数学社、一九八七年。

(18) 押田勇雄『エクセルギーのすすめ―熱力学の革命がはじまっている』講談社ブルーバックス、一九八八年。

(19) 押田勇雄『エクセルギー講義』太陽エネルギー研究所、一九八六年。

\* (20) Atkins, P. W., "The 2nd Law—Energy, Chaos, and Form—", Scientific American Books, 1994.

\* (21) Zemansky M. W. & Dittman, R. H., "Heat and Thermodynamics", McGrawhill, 1981.

(22) 中村桂子『生命科学』講談社学術文庫、一九九六年。

(23) マーロン・H・ホーランド、バート・ロッドソン(中村桂子・中村知子訳)『Oh! 生き物』三田出版会、一九九六年。

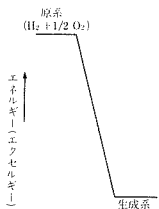
(24) 沢田允茂『考え方の論理』講談社学術文庫、一九九六年(一九九六年第四一刷)。

(25) 沢田允茂『論理と思想構造』講談社学術文庫、一九七七年(一九九四年第一六刷)。

(26) 沢田允茂『言語と人間』講談社学術文庫、一九八九年(一九九五年第六刷)。

(27) 沢田允茂『哲学の風景』講談社、一九九七年。

(28) Lovelock, J., "The Ages of GAIA-A biography of our living earth", Norton, 1991.

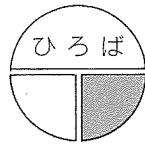


上及び右頁図版—押田勇雄著『エクセルギーのすすめ―熱力学の革命がはじまっている』(講談社ブルーバックス)より。

素人がひもとくのは、熱力学と同じように骨の折れることではあるが、「建築環境システム」がどのようにして成り立つのかを考えるうえでやはり重要である。ここでは、読みやすくしかも内容が広くかつ深い(23)を挙げておきたい。

● 「建築環境」の要素である光や熱は、私たちが直接知覚できるけれど、「地球環境」は、私たちが直接知覚できる対象ではない。「地球環境」はあくまで、私たちの頭(心)の中で認識されるものである。認識は「ことば」によって行なわれるから、論理・言語といったことについて考えることは大切だ。そのため役立つ書物として(24)〜(27)を挙げたい。

筆者の場合、熱力学や生物学を素人なりにひもと



## 草原の国から見た雑草の国 エン・ポルド

「高層ビルが立ち並ぶ近代的なテクノロジーシテイ」

これがモンゴルで私が「東京」に対して抱いていたイメージだった。しかし、二年前に留学のため日本に来た私は、実際の「東京」がそのイメージとは違っていることが解ってきた。伝統的な建築技術や要素をとり入れた近代建築は全く建てられていないのではな

くことで、筆者の「認識の風景」の中に「地球環境」が入ってきたように思う。そうして、例えば(28)〜(30)に目を通してみると、そこに述べられていることが腑に落ちてくるように思えた。

「認識の風景」が豊かになって、いま一つ思いを巡らすようになったことは、私たち人間が「地球環境」に備わっている仕組みをうまく利用した「建築環境システム」をつくっていくには、住まい手と住まい手、住まい手とつくり手、つくり手とつくり手の豊かな関係性をつくっていくことが如何に大切かということだ。そのことが視野に入ってくると、(31)〜(34)に述べられていることの大切さがわかってくるように思う。

(しゅくや、まさのり／武蔵工業大学大学院工学研究科教授)

いかと思っていたのだが、多くの住居や木造建物がまちに広がり、それぞれの時代を表明しているのであった。また、新しい発見もいろいろあった。

### ● 方位と距離の感覚

まず第一に気付いたことは、日本人の方向感覚とモンゴル人のその違いである。例をあげてみると、目的の場所が解らなくて地図を描いて説明して

もらおうとする時、尋ねられた人はどのように地図を描き説明するか。

日本人の場合、最寄りの駅等を目印にして道路を描き、道順を細かく説明する。しかし、その地図に方位はなく、目印の建物(銀行、スーパー等)の説明はあっても東西南北の説明はない。モンゴル人は遊牧民として常に方位を確認するという習慣があるので、方位の

説明がないというのは不思議な気がする。遊牧民は自然の中で方向感覚を培ってきたので、方向も「太陽の昇る方向」「太陽が沈む方向」という表現をする。

そして道を探ねた時に、「そんなに遠くはない。その方向へ一三〜一五キロの所だ」というような答えが返ってくる。このようにずっと広い空間が目の前に続く草原と建物が立ち並ぶ日本のまちとでは、空間のとらえ方が異なっている。これは「方向」だけでなく「距離」に關してもいえる。一三〜一五キロを「遠い」と感じるか「近い」

\* (29) Lovelock, J., "GAIA-The practical science of planetary medicine", GAIA Books, 1991.

\* (30) 小原秀雄・下谷二助『きみのからだは地球環境』農文協、一九九五年。

\* (31) 野沢正光・小玉祐一郎・圓山彬雄・槌屋治紀・福島俊介『居住のための建築を考える』シリーズ土曜建築学校1、建築資料研究社、一九九四年。

\* (32) 奥村昭雄『パッシブデザインとOMソーラー』シリーズ土曜建築学校2、建築資料研究社、一九九五年。

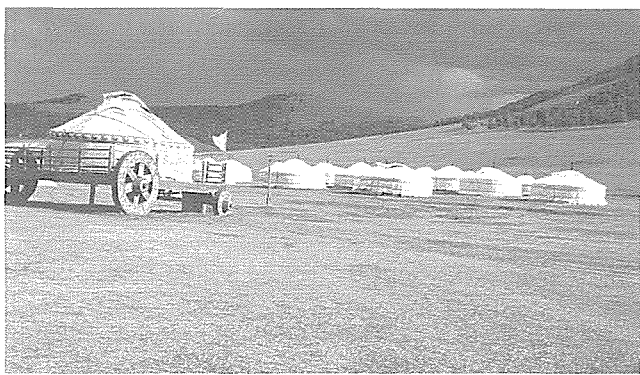
\* (33) 長谷川敬・和田善行・村田徳治『消費する家』から「働く家」へ』シリーズ土曜建築学校3、建築資料研究社、一九九六年。

\* (34) 中林由行・岩村和夫・小谷部育子・延藤安弘・卯月盛夫『共に住むかたち』シリーズ土曜建築学校4、建築資料研究社、一九九七年。

と感じるか、という違いである。草原の人にとってはこの距離はたいして大變なことではない。しかし、都市生活をしていて長い距離を移動する機会の少ない都会人にとっては、一三〜一五キロは「遠い」となるようだ。

### ●土地の所有と「豊かさ」の感覚

また、日本に来てからずっと考えていたことが、人と土地の結び付きについてである。日本人は、なぜ居住できる土地の範囲が少ないのに、一戸建ての家を持ちたがり自分の土地に執着するのだろうか。これはもったいないこと



遊牧民の住宅「ゲル」。

ではないかと私には思える。草原は土地は広く誰のものでもない。当然あるもので、人びとはあまり土地の所有に関心を払わない。それより馬や羊など家畜が「豊かさ」を表わす。それに對して日本では、どんなに小さくても自分の土地、庭、家があると「豊か」になったと考えるようである。

モンゴルでは建物を建てる時の土地の所有権という問題はあまり深く考えられていない。しかし、日本に来て、建築物は土地の上に建てるのだから土地の所有という問題が不可欠だ、ということを変更して考えさせられた。

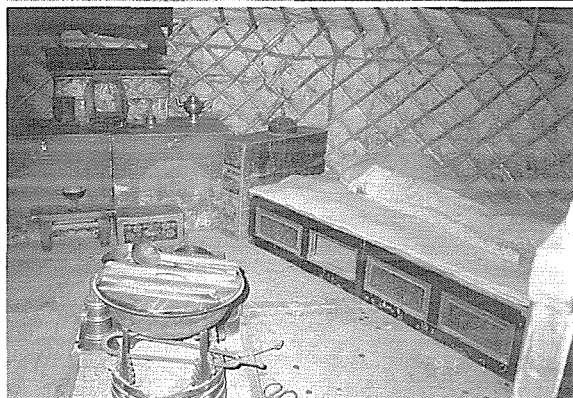
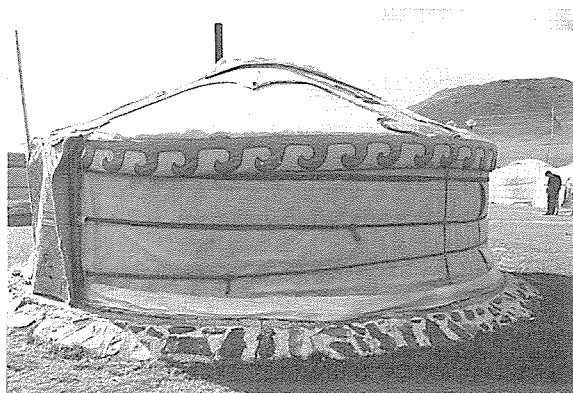
### ●コミュニケーションのかたち

日常生活についても、社会が発展してくると、皆で協力して生活していく形態より、個人生活が尊重される形態になっていく。そして情報交換や報道が人びとにとって重要になってくる。居住地域も、情報を交換できれば近くに住む必要性がなくなり、パソコン等の機器の発達により仕事も自由にできるとなると、場所の選択も可能性が広がると思う。

日本も近代化が進み、住宅も変化してきているようだ。昔と違い近所との交流はだんだん少なくなる。

モンゴルにはこんな話もある。

遊牧民のゲルという住宅の入り口には掛け金がなく、朝、ご飯を作って食



ゲルの外観と内部。

卓の上に置いておくと、夕方帰ってくるまでに、誰か通りすがりの人がそのご飯を食べていく。ご馳走になった人は何か身のまわりのものをそのゲルの仏壇に供えて感謝の気持ちを表わし、またご馳走した人は誰かに良いことをしたと幸せな気持ちになる。これは遊牧生活する人びとのコミュニケーションである。

私は今、六角鬼丈先生の研究室で皆様にお世話になりながら建築の勉強を続けている。今後いろいろなことを吸収し、経験したいと思っている。これからよろしくお願ひ致します。

(エン・ホルド)  
東京芸術大学大学院建築科修士課程

\*  
「ひろば」へのご投稿をお待ちしております。「住」に関する提案から日頃お感じになっておられることまで、研究者・実務者から市民の皆さま方の忌憚のないご投稿をお待ちしております(採用分については薄謝進呈)。

原稿用紙(四〇〇字詰) 三枚程度。原稿には住所、氏名、年齢、職業を御記入下さい。なお、内容を傷つけない範囲で一部手直しさせていただきます。

〈宛て先〉

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-18

財団法人住宅総合研究財団

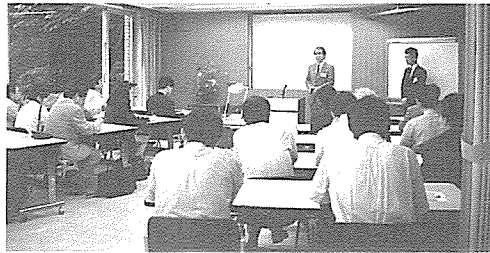
すまいるん編集部「ひろば」係

# 広範囲に注目の課題二六件——住総研一九九八年度研究助成決定、期待される成果

住総研事業の中心を占める今年度研究助成は、左記の二六件の研究が選ばれました。六月十九日には、住総研にて主査説明会が開催されました。研究成果は九九年九月までの二六か月の研究期間を経て、二〇〇〇年三月発刊の住総研研究年報に掲載される予定です。ご期待ください。

## 住総研1998年度研究助成一覧表

研究番号	主査	研究題目
9801	中谷 礼仁	近代アメリカでの日本人建築従業者に対する認識の変遷と構造分析
9802	前田 昭彦	イギリス・サッチャー政権以後の都市・住宅政策の動向
9803	越野 武	南サハリンの住宅における歴史的背景と居住環境に関する研究
9804	小林 克	17・18世紀の日本とオランダの都市居住生活と物質文化の実態比較
9805	熊谷 広子	ブラジルにおける日系移民の住空間の変遷について
9806	大坂谷吉行	地方中小都市における「まちなか居住」の推進方策に関する研究
9807	藤井 明	コンパウンド(複合住居)の空間組成に関する研究
9808	谷村 秀彦	伝統的都市の現代化における空間制御技術に関する研究
9809	乾 正雄	街並色彩に関する研究
9810	眞嶋 二郎	自治体住宅マスタープランの策定過程と策定手法に関する研究
9811	宗田 好史	町家・町並み景観整備による都心商業・商店街活性化手法の研究
9812	安藤 元夫	復興まちづくりにおける生活街路・住宅の一体的整備に関する研究
9813	沢田 知子	ライフステージの展開に伴う非標準世帯への移行からみた住戸計画
9814	荒川千恵子	公的住宅建替えに際し住民の個人的記憶を計画に生かす手法の研究
9815	森本 信明	昭和20年代を中心とした住宅計画の史的研究
9816	園田真理子	集合住宅におけるバンダリズム及び人為的環境不安に関する研究
9817	大場 修	近世町家の地方色の形成過程とその成立要因
9818	白井 裕泰	横田家大工文書における近世住宅の調査研究
9819	大原 一興	古民家の保存・活用のための方法論的研究
9820	橋 弘志	居住環境における持続可能性に関する研究
9821	宗本 順三	環境負荷低減を目指した住宅建材選択システムの開発と適用研究
9822	木多 道宏	都市住民の生活行動と日照に関する研究
9823	延藤 安弘	高齢者の「安心・自立居住」を「まち」で支える「地域力」の実践的研究
9824	劉 銑鍾	高齢者の持ち家を活用した生活安定に関する研究
9825	古阪 秀三	住宅生産システムの革新による住宅産業構造の変革研究
9826	真鍋 恒博	建築部品・構法の変遷に関する資料の保存とリスト化に関する研究



財団で催した主査説明会風景

### 次号予告

'99年冬号一九九九年一月一六日発行

### 特集「すまいと「性能」

〈焦点〉  
性能は何を保証するのか  
住宅性能論争をめぐって  
太田利彦

〈ミニシムボジウム〉  
すまいづくりと「住宅性能」  
すまいの多様化が進む中で  
岩下繁昭(㈱アテイアス)  
下村郁夫(埼玉大学)  
司会 峰政克義(住総研)

### 報告

住宅性能表示は市場をどう変えるか  
大森文彦(東洋大学・大森法律事務所)

見えないものを伝える  
「快適さを伝える難しさ」  
渡辺幸次(積水ハウス納得工房)

住宅性能表示と建築家  
片山和俊(東京芸術大学)

住み手からみた「住宅性能表示」の問題点  
和田 登(㈱リクルート)

すまいのテクノロジー

性能とすまい!  
鳴津民男(㈱園建築設計事務所)

「穴ぐら」考  
松原秀行

へひろば

オトコのリビングロン  
長田直之(インテンシブ・ケア・ユニット)

すまい再発見

増沢幸尊(㈱増沢建築設計事務所)

〈図書室だより〉

都市計画の本  
大江守之(慶應義塾大学)

タイトルは仮題、執筆者は変わることがあります。



# 住総研新刊行物のご案内

住教育委員会著書

★まちはこどものワンダーランド  
——これからの環境学習

本書は、人・住まい・環境等すべてのへか  
かわり)が希薄化している社会において、  
へつなぐ)ことをキーワードに、これから  
の環境学習の視点と方法として、《環境体  
験重視型学習》を提起しています。

ユニークな実践事例の紹介と、理論的意  
味づけとして住環境学習におけるワークシ  
ョップの有効性などを探っています。また  
手法のシート化を図り、手軽に取り組める  
ようになっていきます。

編著 住宅総合研究財団住教育委員会  
風土社 258ページ 本体価格2800円



出版助成による刊行  
☆住宅と健康

環境先進国スウェーデンで出版された本書  
は、一般市民、材料・設備メーカー、建設  
・設計会社、ハウスメーカー、ビルオーナ  
ーなどに向けて「健康住宅」の知識普及の  
ためにつくられたものである。スウェーデ  
ンでは新人研修や企業向けセミナーのテキ  
ストとして使われている。

編者 〓スウェーデン建築研究評議会/スウ  
エーデン王立住宅・建築計画委員会  
訳 〓早川潤一  
S A N W A 278ページ 本体価格2800円

☆同業会のアパートメントとその時代

本書は、代官山アパートメントが再開発に  
より取り壊されようとしているのを機会に  
同業会アパートメントの研究に因りつてき  
た研究者グループが協働して、代官山アパ  
ートメントの記録を残すことに取り組んだ  
成果を中心としている。同業会アパートメ  
ントの意味を読み解く一助になるだろう。

著者 〓佐藤滋 高見澤邦郎 伊藤裕久  
〓大月敏雄 真野洋介

鹿島出版会 245ページ 本体価格3300円

印刷助成による研究論文の刊行

購入ご希望の方は、丸善営業部(電話03  
—3272—0521)へお申し込みくだ  
さい。

●研究No.9005 菊地成朋ほか

砺波散居村における居住システムの分析  
中日本の代表的な「散居」を、「どのよう  
な仕組みで成り立っているのか」という観

点から、水利確保、イエの領域、立地特性  
などの成立要因と、戦後の圃場整備事業が  
屋敷と水路・道などの環境との関係に与え  
た影響を、詳細に調査・分析している。

A 4判75ページ 本体価格2400円

●研究No.9741 徳田哲男ほか

施設における介護負担と機器支援に関する  
調査および実験研究

介護空間の適正化と介護者側の心理負担の  
軽減を図ることが、良好な介護環境の形成  
につながるという視点から、介護環境の実  
態調査および介護負担に関するモデル実験  
を通して、施設整備のあり方を提案してい  
る。

A 4判69ページ 本体価格2100円

## お詫びと訂正

一九九八年夏号(前号)82、83ページに掲載  
いたしました「戦後住宅建築史年表」に  
以下の誤りがありました。慎んでお詫びし、  
次のように訂正いたします。

〈誤〉 一般建築・社会の項

50 堀口捨己 ↓堀口捨己

戸建て住宅作品の項

65 堀口捨己 ↓堀口捨己

88 古手川商店 ↓小手川商店

98 100%リサイクル ↓100%リサイクル

68 坂出入口土地 ↓坂出入口土地

60 「建築年間」創刊 ↓「建築年鑑」創刊

## 「TAMA」の購読について

●発刊日は原則として、冬号一月一六日、

春号四月一日、夏号六月一五日、秋号一  
〇月一日です。したがって、送付開

始は、購読料受領後の最新号とさせてい  
ただきます。なお、購読手続きには約一  
週間かかりますので、お含みおき下さい。

●購読満了時にご通知いたしますので、引  
き続きご購入いただきますよう、お願い  
申し上げます。

●バックナンバーのお求めにもおたえし  
ております。ご希望の方は、あらかじめ  
在庫の有無、送料を左記財団まで、ご確  
認下さい。

購読料は次のとおりです。

一年間 二〇〇〇円(送料共)  
三年間 五〇〇〇円(送料共)

お支払い方法

●領収書は、郵便局の払込票兼受領証で代  
えさせていただきます。財団からは改めて発  
行いたしません。

●購読期間中の購読中止による購読料返金  
はいたしません。

「すまいろん」は次の店頭でも販売してあり  
ますので、ご利用ください(店頭での予約  
購読の受け付けはしていません)。

●建築学会資料頒布所 港区芝5-26-20  
電話(03)3456-2051

●南洋堂書店 千代田区神田神保町1-21  
電話(03)329-11338

財団法人住宅総合研究財団

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-8  
電話(03)4841-5381 FAX(03)4841-5794

# エリエル・サーリネンハウス

アメリカの中の北歐

岸 健太 & トーマス・コン

●アメリカ

一九二〇年代の母国フィンランドの経済危機を背景に、シカゴ・トリビューン社屋の設計競技（一九二三年）入選以降、エリエル・サーリネンはその後半生をアメリカの人として過ごすこととなる。当初はミシガン大学建築科で教職に就いていたが、一人の教え子の父親、テトロイトの新聞王ジョージ・ブースに招かれ、彼の構想する新教育機関のキャンパス全体設計および教育プログラムへの助言

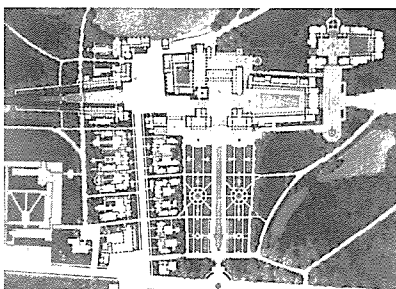


図-1 全体計画の初期案

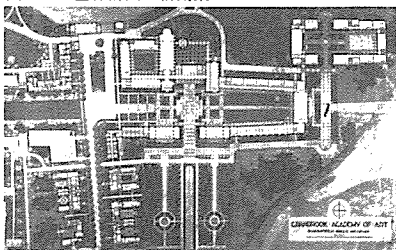


図-2 全体計画の初期案

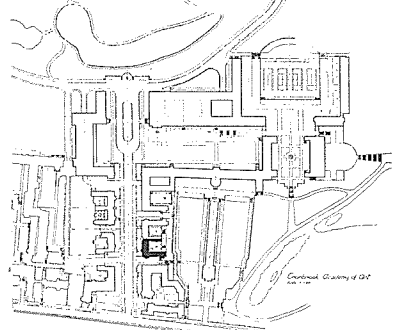


図-3 配置計画のほぼ最終案(1934年頃)。下方黒部分がサーリネンハウス。

オブ・アートの教育理念を、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動に換えるものとし、優れたクラフトマンの育成を教育の主眼とする。一方サーリネンは、同時代的な問題意識は共有しながらも、そこに別の可能性を求めていた。フィンランドでの彼の最終作品であるヘルシンキ中央駅の設計（一九一五年）で、ナショナル・ロマンティズムに対する数多くの批判を真剣に受け止めながら、デザインが持つ特殊性と工業技術の持つ普遍性の新たな融合の道を模索していたサーリネンにしてみれば、工業技術と職人技術の今までにないバランス感覚、換言すれば「素材」の加工と製品化の過程における新たな概念こそが問われるべき問題であった。

を行なう機会を得る。この克蘭ブルック・エデュケーション・コミュニティと名づけられた新教育機関は、幼稚園、小学校、高校、科学博物館、そしてアカデミー・オブ・アート（図書館、美術館）から成る、大規模な私設教養地区として構想された。

当時、テトロイトは依然として自動車産業の興隆の只中にあった。この状況の行く末に当時のヨーロッパの産業革命期以降の文化的葛藤を重ね見たブースは、特にアカデミー・

●克蘭ブルック

全体計画の初期案(図1、2)で、サーリネンは敷地として与えられた広大な森の自然の中に、微妙に角度の異なる軸線や秘密の焦点を多数設けながら諸施設を慎重に配置し、

それらを相互に距離や高低差を超えて有機的に繋げようと試みる。そこでは、彼の数多くの都市計画案や、フィンランドでパートナーのH・ゲゼリウス、A・リンドグリーンとともに設計された共同住宅ウィトレスクで追求された、都市と自然に関する考察の成果も十分に反映させられていた。しかしこの斬新な配置計画も、ブースにとっては予算を超過した奇怪な提案と感じられ、規模縮小を含むデザインの変更をサーリネンに強く要求する。

さらに、サーリネンの独走を危惧した彼らは、克蘭ブルック組織内に建築事務所を設立し、サーリネンを主任に据えながらも、かつての彼のミシガン大学での教え子たちをスタッフに置き、目付け役としてブースの長男をスタッフの一人に加えて計画を継続させる。

●葛藤

前述のアカデミー・オブ・アートの教育理念に対する意見の相違も含め、この度重なるブースとの衝突と相互不信は、少なからず彼のアメリカ人に対する認識を、進歩的で開かれた世界人というものから、固有のアイデンティティを求める保守的な国家人というものへと変えていった。この葛藤は、民族性やその固有の歴史から逃れてこの若い多民族国家に渡り、来るべき世界の要請に積極的に応えようとしていたサーリネンに、癒しがたい孤独感をもたらす。この経験が、彼の自邸サーリネンハウスの性格を大きく決定づけている。

●森へ

サーリネンハウスは、学内メインストリー





写真-3  
左からエーロ・サーリ  
ネン、エリエル・サー  
リネン、スワンソン。

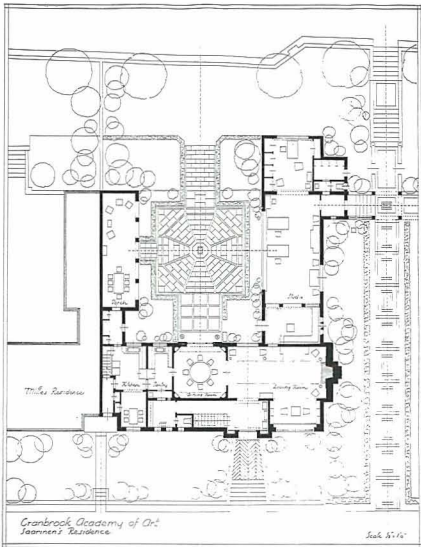


図-4 サーリネンハウスの最終平面図  
(方位は上方が東、右の配置図とは90°異なる)



写真-1 アカデミーウェイから見たサーリネンハウス。



写真-2 ダイニングルームより森(東方)を見る。



写真-4 サーリネンハウス内プライベート・スタジオ。  
夫人との共用で、見えているのは夫人の織物。

ト沿いの教員宿舍群の中に控えめに配置されている(図-3)。北側隣家のミルズハウスを含めると、この建物は完全な対称型を成しているが、巧妙に計算された幅を持つ通りからは建物全体を完全に見渡すことはできず、それは軽快に自然なものとして眼に入る(写真-1)。平面計画(図-4)からは、中庭中央の彫像に向かって敷石に刻まれた人工的なパースペクティブが、主要各部屋からの視線を彫刻に集中させていることが見て取れる。高台にあるこの建物からの唯一開放された東側への視線は、図書館前の大きな人工池を飛び越え、奥行きのある深い森の中へと吸い込まれる(写真-2)。自ら故郷を一度は捨てたサーリネンであったが、周囲との絶え間ない葛藤と孤独の中で求めたものは、やはり他でもなく故郷北欧の風景であった。彼は、森のみが外部に見えるこの自邸で家族に囲まれ、時にはプライベート・スタジオ(写真-4)で一人思案し、また時には隣人の、やはり北欧スウェーデン出身の彫刻家カール・ミルズと語らい故郷に思いを馳せた。開かれた世界を求めるサーリネンと、森の中の隠れ家である彼の自邸。サーリネンハウスは、この北欧の一建築家が混迷の時代の中で避け難く抱えた葛藤と矛盾を現代に伝えている。彼の生き様に思いを巡らせてみることは、やはり現代という混沌とした状況を世界という連続体のなかで否応なく生きる我々にとり、決して無駄なことではないだろう。

(文責：岸健太、Cranbrook Academy of Art 卒業)



## 編集後記

城下町がどうしてできたのだろうか、以前から不思議に思っていた。大雑把に言えば、多くの建築が静的であるのに対して、城下町の城と町の構成はダイナミックで空間的であるからだ。永い間、それは守ることから始まった戦国大名たちの工夫と想っていた。命題が守ることにあれば、背に大きな水や高い山を背負い、前にも蛇行する川を配し町を築く発想が生まれると考えていた。ところが司馬亮太郎によると、城はヨーロッパのカテドラルに発想の源があるという。信長は宣教師を通じてヨーロッパの町の構成を知っており、町の中心に高く聳えるカテドラルをイメージして、城と城下町をつくったのではないかという。異文化との出会いというのは、本来このくらいの新鮮

さと強さ、そして影響力をもっているものであった。が、現在、旅は消費され、クイズ番組や体験番組の定番として楽しむものになりつつある。今回の企画の裏側には、安易な異文化紹介や体験に対する嫌悪感がある。建築家や研究者として、異文化は創造の契機をばらむもの、という思いもあった。

ところでミニシンポジウムをやってみて、自分の思い入れが時代から少し離れていたように反省している。A・レーモンドは、若い学生にとつて全くか殆ど知らない建築家であり、そのために、多くの時間を彼の紹介にさかなければならなかったことをお断りしておきたい。異文化が「時間」にもあると実感した。

(本号責任編集 片山和俊)

住宅総合研究財団(略称「住総研」)

昭和二十三年、当時の清水建設社長・清水康雄により、戦後の窮迫した住宅問題を、住宅の総合的研究、および成果の公開、実践、普及によって解決することを目的として設立された財団法人であります。

現在は住宅に関する研究助成事業を中心とし、「研究年報」「研究論文」を発刊、また住に関する専門図書室、セミナー室等を整備、公開、社会のお役に立つよう、公益事業につとめております。

この「すまいろん」は、活動の一環として、成果の一端を、市民、実務者、研究者の皆様により広く、より手軽にご理解いただくとともに、その意見交流の場になることを願って刊行(季刊)されているものです。ご利用のほど、よろしくお願い申し上げます。

季刊「すまいろん」98年秋号

一九九八年十月一日発行

頒価 500円

発行人 財団法人 住宅総合研究財団

発行人 峰政克義

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-8

TEL (03) 3484-5381

FAX (03) 3484-5794

E-mail: jusen @ nix.mesh.ne.jp

URL: http://www.jusen.or.jp/

編集委員

服部岑生(千葉大学デザイン工学科教授)\*

片山和俊(東京芸術大学建築科助教授)

小林秀樹(建設省建築研究所室長)

野城智也(東京大学大学院工学系研究科助教授)

立松久昌(月刊「住宅建築」顧問)

\* 委員長

● 制作 建築思潮研究所  
印刷・製本 慶昌堂印刷株式会社